茶堂遺跡

長野県上伊那郡中川村片桐茶堂

緊急発掘調査報告書

1984

南信土地改良事務所
中川村教育委員会

茶堂遺跡

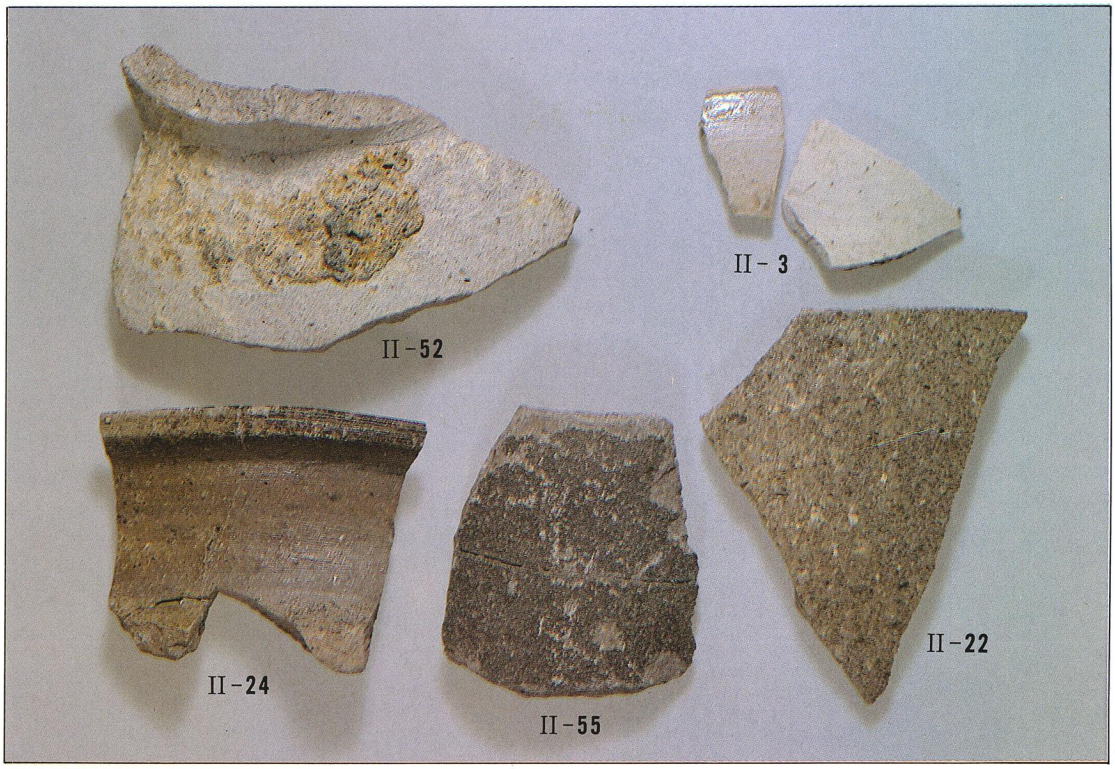
長野県上伊那郡中川村片桐茶堂

緊急発掘調査報告書

1984

南信土地改良事務所
中川村教育委員会

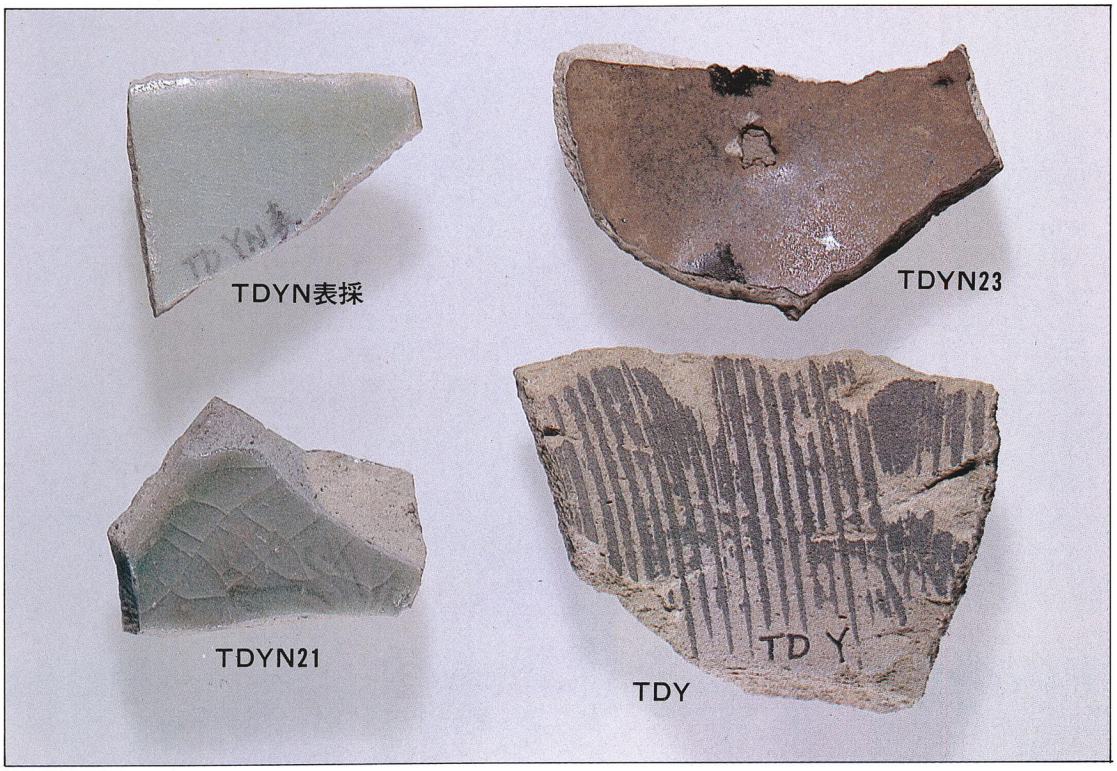
口絵１（図版目次参照）



口絵２（図版目次参照）

口絵３（図版目次参照）

口絵４（図版目次参照）



序

この報告書は，片桐北部地区の県営圃場整備事業により，昭和58年度と59年度の２ケ年にわたり緊急発掘した茶堂遺跡の報告書であります。

茶堂遺跡は，天竜川に沿って南北に走る国道 153号線と，国鉄飯田線の中間段丘上に拓けた横前部落の農耕地の中にあります。

発掘作業は，昭和58年10月18日から12月９日までと，59年４月２日から６月11日までの２回に分けて行われ，その結果縄文早期の押型文土器，早期末の繊維土器，前期前半の住居址，中期後半の住居址，更に弥生中期初頭の庄之畑式土器，後期後半の住居址，更に降って中世掘立建物址や土壙，溝状遺構，柱穴群などが確認されました。詳細については章を追って記されていますが,8,000年を超える遠い昔からこの地に営まれた先人の暮しの一端を伺う貴重な資料が得られた訳であります。

今回の調査で，昭和55年度より継続して毎年行なわれてきた県営圃場整備事業に伴う緊急発掘調査も計画の総てが完了しました。既に調査が行なわれた溝林遺跡，原田遺跡，上ノ原遺跡に加え，この茶堂遺跡から得がたい埋蔵文化財の数多くを発掘し，記録保存すると共に，出土品を歴史民俗資料館に保管展示できますことは本当に意義があるものと思います。ここであらためてご指導いただいた県教育委員会並びに南信土地改良事務所そして一貫して調査を担当していただいた団長の友野良一先生をはじめ調査員の諸先生方及び発掘関係者の献身的なご協力に対し，心から感謝申し上げる次第であります。

昭和60年３月

中川村教育長　　北　沢　正　美

例　　言

1．本書は昭和58・59年に実施した，片桐地区の県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査にもとづく報告書である。

2．本事業は南信土地改良事務所の委託により，中川村教育委員会が実施した。

3．本報告書は発掘が昭和58・59年の２ケ年にわたるので，報告書作成は59年度に作成することとした。

4．各遺構の図面の縮尺は$\frac{1}{60}$を基準としたが，一部$\frac{1}{80}$のものもある。遺物の縮尺は主に$\frac{1}{3}$としたが，大形の土器は$\frac{1}{6}$にした。また，小形の土器・石器は$\frac{1}{2}$にしたものもある。

5．本報告書の執筆者及び図版作製者は次のとおりである。

○本　文　執　筆　者　友野良一・小木曽　清・木下平八郎・北村　章・松下節子

○遺　　構　　図　高山よし子・松下節子

○土器・石器の実測　小木曽　清・細田登志美・高山よし子・横田愛子

○土　器　の　復　原　小木曽　清

○写真の撮影・図版　木下平八郎

6．木炭の鑑定は工藤喜広が行った。

7．本報告書の編集は教育委員会が行った。

8．遺物及び実測図は中川村歴史民俗資料館に保管してある。

目　　次

口　絵

序

例　言

第Ⅰ章　発掘調査の経緯 …… 1

第１節　発掘調査に至るまでの経過 …… 1

第２節　調査会の組織 …… 1

第３節　発掘調査の経過 …… 2

第Ⅱ章　遺跡の環境 …… 7

第１節　遺跡の位置 …… 7

第２節　地形及び地質 …… 8

第３節　歴史的環境 …… 11

第Ⅲ章　遺構と遺物 …… 18

第１節　調査の概要 …… 18

第２節　遺構と遺物 …… 18

土　器 …… 18

石　器 …… 18

縄文時代の遺構と遺物 …… 22

早期の遺物 …… 22

前期の遺構と遺物 …… 22

３号住居址 …… 23

４号住居址 …… 25

５号住居址 …… 26

６号住居址 …… 27

７号住居址 …… 29

中期の遺構と遺物 …… 32

８号住居址 …… 32

遺構外遺物……33
弥生時代の遺構と遺物……37
後期の遺構と遺物……37
1号住居址……37
2号住居址……43
遺構外遺物……47
中世の遺構と遺物……48
掘立建物址……48
1号掘立建物址……48
2号掘立物址立……49
3号掘立建物址……49
4号掘立建物址……49
土　壙……50
溝状遺構……53
1号溝状遺構……53
2号溝状遺構……53
その他のピット群……54
地下式貯蔵穴……55

所　見……59

図　版……62

参考資料……84

あとがき……90

挿　図　目　次

1図　茶堂遺跡の位置図……7
2図　茶堂遺跡凹地帯埋没層序……8
3図　茶堂遺跡の地層図……9
4図　調査堺の南北断面図(3号断面図)
集石東西の断面図　(4号断面図)…10
5図　茶堂遺跡附近遺跡分布図……12
6図　茶堂遺跡附近の地形・発掘区……13
7図　茶堂遺跡遺構配置図……14
8図　中川村遺跡分布図……16
9図　縄文早期の出土土器拓影……22
10図　3号住居址実測図……23
11図　3号住居址出土土器拓影……24
12図　4号住居址実測図……25
13図　5号住居址実測図……27
14図　6号住居址実測図……28
15図　7号住居址実測図……30
16図　8号住居址実測図……31
17図　遺構外出土土器拓影……33
18図　遺構外出土石器実測図……34
19図　遺構外出土石器実測図……35
20図　遺構外出土土器拓影……36
21図　1号住居址実測図……37
22図　1号住居址木炭分布図……39
23図　1号住居址残存木炭の倒れた方向と種別分布及び土器の分布と結合状態図41
24図　1号住居址出土土器及び石器実測図42
25図　1号住居址内土壙実測図……43
26図　1号住居址内土壙出土土器拓影……43
27図　2号住居址実測図……44
28図　2号住居址出土土器拓影及び石器実測図　47
29図　遺構外出土土器実測図及び拓影……47
30図　1号掘立建物址実測図……48
31図　2号掘立建物址実測図……48
32図　3号掘立建物址実測図……49
33図　4号掘立建物址実測図……50
34図　土壙実測図……52
35図　溝状遺構実測図……53
36図　その他のピット群実測図……54
37図　地下式貯蔵穴実測図……55
38図　茶堂遺跡出土陶磁器実測図……56
39図　茶堂遺跡附近出土陶磁器実測図……56
40図　横前附近の地名図……89

表　目　次

表1　中川村遺跡一覧表……17
表2　茶堂遺跡出土土器一覧表……19
表3　縄文前期住居址規模一覧表……22
表4　3号住居址ピット一覧表……24
表5　4号住居址ピット一覧表……26
表6　5号住居址ピット一覧表……27
表7　6号住居址ピット一覧表……29
表8　7号住居址ピット一覧表……30
表9　8号住居址ピット一覧表……32
表10　1号住居址ピット一覧表……38
表11　1号住居址主な木炭の大きさと種別一覧表40
表12　2号住居址ピット一覧表……45
表13　茶堂遺跡土壙一覧表……50
表14　茶堂遺跡掘立建物址一覧表……51
表15　茶堂遺跡出土陶磁器一覧表……57

図　版　目　次

図版１　鍬入式，遺跡発掘の説明（下）
図版２　遺跡全景(上)東より(下)南より
図版３　遺跡の地層(上)凹地帯の層序
図版４　西側より見た遺跡(上)１号住居址とその付近の遺構(下)
図版５　１号住居址の遺物出土状況(上)１号住居址(下)
図版６　１号住居址発掘前(上)発掘状況(中)遺物の記録(下)
図版７　１号住居址木炭出土状態(上・下)
図版８　１号住居址炉址(上)木炭出土状態(中)土器と炭化したカヤ(下左)遺物調査状態(下右)
図版９　１号住居址板状(上左)炭化したカヤ(上右)建築材が重なって出土した状態(下)
図版10　３号住居址(上)４号住居址(下)
図版11　５号住居址(上)６号住居址(下)
図版12　掘立建物址(上・中・下)
図版13　８号住居址炉址(上)２号溝状遺構と８号住
図版４　１号溝状遺構の断面(上)１号溝状遺構
図版15　集石(上)地下式貯蔵穴(中・下)
図版16　５号(上)６号(中)７号(下左)４号(下右)土壙
図版17　１号住居址出土カメ形土器(１・２)壺形土器(３)Ｎ１グリッドNo.48(４)
図版18　出土土器
図版19　出土石器
図版20　見学会(上)発掘に参加した方々(中・下)

口絵１　II-52，壺（自然釉）鎌倉時代　II-３，灰釉陶器（平安時代）
II-24，甕（鎌倉時代）　II-55，甕（鎌倉時代）　II-22，甕（鎌倉時代）
口絵２　II-27，甕（鎌倉時代）　II-46，甕（鎌倉時代）　II-41，灰釉（鎌倉時代）
I-147，甕（鎌倉時代）　II-21，甕（鎌倉時代）
口絵３　II-14，甕（室町時代）　II-５，鉢（室町時代）　II-29，鉄釉鉢（室町時代）
II-79，甕（室町時代）　I-133，青磁碗（中国）南北朝期
I-表採，天目茶碗（室町時代）　II-56，摺鉢（室町時代）
口絵４（中溝）　TDYN表採，青磁碗（中国）南北朝　TDYN23，鉄釉碗（室町時代）
TDYN21，青磁（中国）南北朝　TDY，摺鉢（室町時代）

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至るまでの経過

県営圃場整備事業地区内の遺跡の調査は，長野県教育委員会より村教育委員会に対し圃場整備地区内に埋蔵文化財包蔵個所があるので，事前に調査するよう連絡があり，おって南信土地改良事務所より緊急発掘調査について委託したい旨，村教育委員会への依頼があって，両者協議のうえ，村教育委員会の編成した中川村茶堂遺跡発掘調査団が発掘業務を遂行することになった。

昭和58年９月16日南信土地改良事務所長と中川村長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約」を締結し10月18日茶堂遺跡調査会を開催し発掘計画について協議する。10月25日に教育委員・文化財調査会・土地改関係者・調査団等が参集して鍬入式を挙行した。

第２節　調査会の組織

○中川村教育委員会

教育委員長	松村安雄
委員長代理	杉沢　要
委　員	斉藤英雄
〃	米山俊博
教育長	北沢正美
教育次長	湯沢幸雄
技　師	北村　章
書　記	松下節子

○茶堂遺跡調査団

団　長	友野良一	（日本考古学協会員）
団長代理	根津清志	（長野県考古学会員）
調査員	木下平八郎	（　〃　）
〃	小木曽　清	（宮田村）
調査補助員	高山よし子	（中川村）

第３節　発掘調査の経過（昭和58年度）

月　日	日　　誌
10月18日	13時より役場において調査委員会を開催し，発掘に関した打合せを行う。
24日	発掘に必要な資材の運搬とテント張り。
25日	発掘する個所が以前は畑地であったようで，水田にしたとき相当表面を削り取って造成したらしいので，おそらく場所によっては埋土の所や切土の個所があるので，最初に耕土だけブルドーザで除土してから発掘することにし，作業を進めることとした。15時より鍬入式を行う。続いて横前集会所で発掘の無事と成果を願って直会。
26日	本日より発掘作業が行われる。宮崎氏の耕土を西村氏の田の方へ押す。5×5m のグリッドを設定東の方から西の方に向って杭打，西側南のＭ・Ｎ・Ｋ14・13・12のグリッド毎にジョレンがけを行う。東南の土手近く黒褐土層より押型文土器片が出土。
28日	前日にひき続いてグリッド東に向かってジョレンがけ，Ｋ・Ｌ・Ｍの11グリッドを。
29日	耕土の除土は一応地場附近までで止めてあるので，地場土がまだ残っている場所もあるところより，除土し全体の状態を見たうえで発掘個所を決定することとした。
31日	遺跡を中心として縦横断の測量とグリッドの調査。中溝の遺物のとりあげ。
11月１日	グリッドのジョレンがけ。Ｋ・Ｌ・Ｍグリッド。
２日	Ｋ・Ｌ・Ｍ６～７グリッドのジョレンがけ。
４日	Ｋ・Ｌ・Ｍ４～５グリッドのジョレンがけ。
５日	Ｋ・Ｌ・Ｍ・３，グリッドに方形の黒褐土の落込みを確認する。住居址ではないかという意見も出る。
７日	Ｋ・Ｌの３～４を拡張すると，縄文前期と思われる土器片を発見する。
８日	Ｈ・Ｉ・Ｊの14グリッドを東に向って調査。この３グリッドは無色土層の落込が深い。遺物は縄文中期・土師・中世陶器が出土する。
９日	各グリッド界に30～40cmの断面調査用のベルトを設定する。本日Ｈ・Ｉ・Ｊ 14～13グリッドを調査。
10日	Ｋ・Ｌの３～２グリッドの黒土の落込み個所は，弥生時代の住居址であることが確認される。
11日	Ｌ・Ｍの２～１グリッドに楕円形の柱穴を発見。今日のところ遺物を伴わないが，縄文前期にある住居址かも知れないという意見も出された。
12日	Ｈ・Ｉ・Ｊのグリッドの北側に地層調査のための掘削をはじめる。深さは2～2.5m掘下げる。
14日	遺物の取上げをしてないので，台帳を作り遺物の取上げを行う。

11月15日	前日にひき続いて遺物の取り上げと，ジョレンがけ。
16日	設定したグリッドの大方ジョレンがけが終り遺構の出土状態が確認されたので，本日より弥生時代の１号住居址の発掘を再開した。出土遺物の実測取り上げ，炭化材が多く検出される。
17日	弥生第１号住居址の調査，中央に30cm幅のベルトを設けて掘り下げる。中溝より木柵の一部が発見される。その一部を試掘する。
18日	弥生第１号址附近の調査と一部中溝の試掘を行う。遺物 150点。
19日	各グリッド出土遺物の記録。中溝木柵測量。
21日	木柵は周辺の出土遺物という意味で調査，凹地断面の写真および実測。
22日	弥生の住居周辺の調査，中溝木柵写真。
23日	弥生の住居の周辺調査と中溝木柵確認。
24日	南の部分の実測，Ｍ・Ｌの２・３グリッド調査。
25日	弥生時代の住居址の調査，中溝の木柵取り上げ。
26日	弥生時代の住居址木炭の検出に主体をおいて調査を進める。
28日	弥生時代の住居址の調査と，周辺の遺構の調査も並行して行う。
29日	弥生時代の住居址の床面を確認，炭化物は実測と写真をとるためそのまま残す。
30日	弥生時代の住居址は出土した土器を総合して，弥生時代後期の住居址であることが確認された。
12月１日	この弥生後期の住居址は木炭の多いことと焼土も多いところより火災によるものであることがわかった。
２日	作業員全員で遺跡内の整理をおこなう，不足のグリッドを一部設定し調査を行う。
３日	弥生の住居址も大方調査が終ったので測量をはじめる。残りの木炭を取り上げる。
６日	遺跡全体の実測と全体の写真，柱穴の断面調査と，周溝の確認。弥生以外の柱穴址の確認作業。
７日	２号・３号の柱穴址の調査，各グリッドに残された遺物の取り上げ。
９日	遺構の測量，テントの撤収片付。
１月９日	出土遺物の整理
３月19日	昭和58年度作業終了

（昭和59年度）

月　日	日　　誌
4月2日	14時より考古学研究室において調査委員会を開き，今年度の打ち合せを行う。
6日	発掘に必要な資材の運搬と，テント張りを行う。
7日	昨日に続き資材の運搬とテント内の整理を行う。
9日	現場は以前水田だったため表面の耕土を重機で除土して発掘することにした。15時より鍬入式を行い，引き続き横前集会所において発掘の無事と成果を願って直会。
10日	本日より発掘作業開始。グリッドを設定し杭打。M・Lの15～18までのグリッドをジョレンによりローム層まで検出。中世陶器片出土。
11日	昨日に続きK・Lの15～18までのジョレンがけ。須恵器片・灰釉片の出土。
12日	I・J・Kの15～18までのジョレンがけ。中世陶器数片出土。
13日	Iの15～18のローム層検出。
17日	H・J・I・Kの14をジョレンがけ。土器5片，石器3片出土。
17日	H・I・J・Kの14をジョレンがけ。土器5片，石器3片出土。
18日	K・L・Mの19グリッドをローム層まで検出。灰釉片出土。
19日	Kの19グリッドをローム層まで検出。中近世陶器片出土。10時雨強く作業中止。
20日	Jの18・19，Kの20グリッドをジョレンがけ。出土遺物にNo.を記入し出土記録をとる。20グリッドの中央ラインのセクション面作製作業。
21日	H・Iの19グリッドをジョレンがけ。遺物取り上げ。
23日	Gの18・19グリッドを黒褐色土まで検出。石が多く作業が思うようにはかどらない。
24日	Gの17～19グリッドを黒褐色土（一部ローム層）まで検出。Gグリッドは礫が多いが，なんのためのものだかわからない。
25日	I～Mの13・14グリッド上にある柱穴を掘り下げることにした。
26日	K・L・Mの15～19グリッドにある柱穴の掘り下げ。晴天続きで，土の乾燥が激しく，朝から宮崎岩雄さんの家でお借りした動霧で水をまく。
27日	F・Jの17，I・J・Kの19グリッドにある柱穴掘り。乾燥がはげしく，午後から水をまく。
28日	4・5・6号土坑の調査を行う。清掃及び全体の写真撮影。
5月1日	北側投入の石の断面。溝状遺構，100分の1で実測。遺物洗い。
2日	溝状遺構1・2号及び全体の実測（$\frac{1}{100}$）。写真撮影
4日	土坑5・6号，柱穴，溝状遺構の写真撮影。セクション作図。

5月7日	柱穴，柱穴群の写真撮影。柱穴セクション作図。遺物の取り上げ。柱穴群から掘立建物址が3ケ所あると思われる。
8日	掘立建物址の実測開始。同時に昨年度分の残り第2号住居址の調査も始める。
9日	第2号住居址より焼土が2ケ所あったので写真撮影。
10日	第2号住居址実測（$\frac{1}{20}$）L・Mの15～18グリッドの実測。
11日	L・Mの15と18グリッド及び第2号住居址の実測。
14日	I・J・Kの14・15及びG・Hの19グリッドの実測。第2号住居址のレベル測量。
15日	20グリッドライン（西側土手）のセクション作図。I・Jの12・13グリッド実測。
16日	20グリッド及び第2号住居址の柱穴セクション作図。午後は雨のため，作業中止。
17日	第2号住居址の柱穴セクション作図及び焼土を半カット掘り下げ。
18日	第2号住居址の焼土清掃，写真撮影。柱穴の確認及び検討。
19日	20グリッドラインのセクション作図。第2号住居址の柱穴掘り。
21日	Gグリッドライン（北側）のセクション作図，第2号住居址の半カット柱穴掘り。
22日	I・Jの12～15・Kの15・Lの15～20・Mの15，16グリッドのレベル測量。
23日	Gの19・Hの18・Iの16，17・Jの16～19・Mの17～19グリッドのレベル測量。
24日	柱穴実測図及びレベル測量筒所の確認。
25日	第2号住居址の実測及び，半カット柱穴のセクション作図。
28日	第2号住居址の実測ならびにレベル測量。写真撮影。
29日	第2号住居址半カット柱穴の実測，レベル測量。
30日	第2号住居址の遺物のレベル測量。半カット柱穴の掘り下げ。
31日	第2号住居址の遺物のレベル測量と遺物取り上げ，実測図の確認。
6月1日	テント内のかたづけ。第2号住居址実測図の補足測量。
2日	テント内の資材の運搬とテントの撤収を行う。
4日	遺物取り上げの確認と測量を行った。
5日	調査委員会を開き，全体の確認を行った結果，第2号住居址西側にある方形(柱)穴の再調査が必要となる。
6日	第2号住居址の西側の土を取り除くと，方形の柱穴群が出てきた。
7日	昨日に続き方形柱穴の確認。半カットにして掘り下げ，写真撮影を行った。
8日	方形柱穴の実測とレベル測量を行う。
11日	方形柱穴と全体的な最終確認をして，現場での作業を終了とした。
9月20日	出土遺物の整理

	｜
12月１日	報告書作成のための整理作業を始める。
	｜
１月18日	報告書作成の作業終了

長期間にわたった発掘にあたって，深いご理解とご協力をいただいた，地元の関係の方々，発掘に直接参加下さいました方々に心より感謝申し上げる次第であります。

発掘調査に参加された方々（順不同）

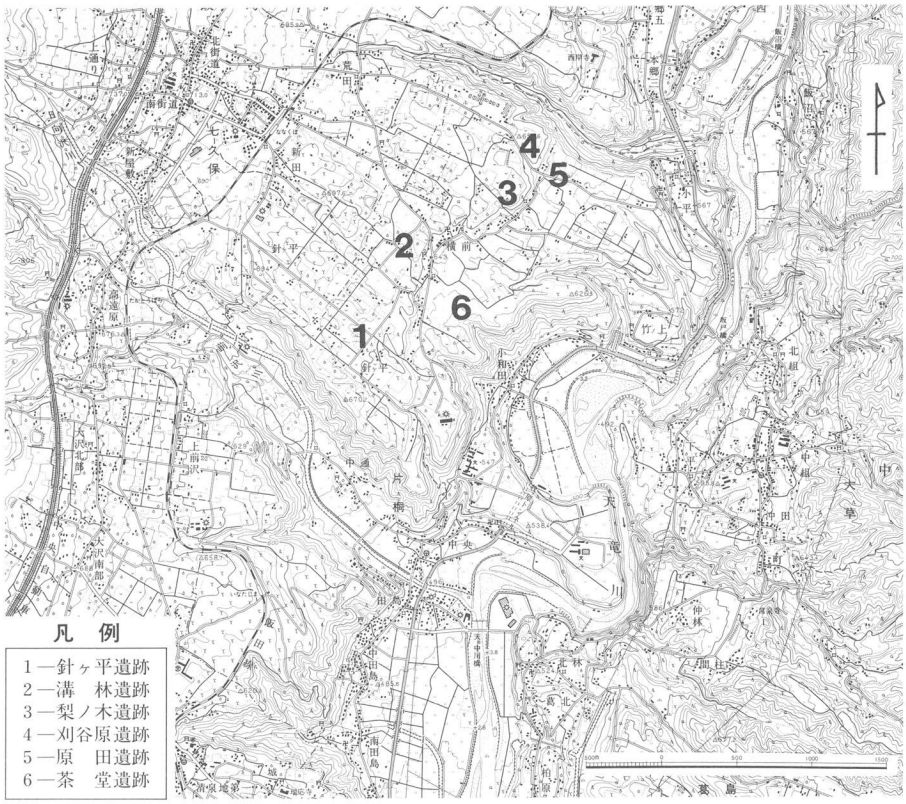
桃沢　武・有賀　美恵・木下　文子・高柳　茂雄・雨沢　恵子・太田喜代子・坂井ふき㌢
原　みち子・田中　栄・有賀あさよ・下平　敬子・高柳　米子・荒井　操・原　はつほ
清水千鶴枝・尾崎美智子・地田きく子・坂井美代子・中山ゆり子・小原かよ子・桃沢　友江
中塚　浩子・宮崎　治雄・下平　貞雄・荻原　久子・宮崎　岩雄・大場　房雄・斉藤　益美
今井佐久子・高坂　清人・松下日出子・戸田さく㌢・平沢　たづ・中塚　益三・中塚みさほ
鈴木　一・臼井ひづ子・丸田　南枝・桃沢みさ㌢・下平　明・細田登志美・横田　愛子

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置

茶堂遺跡の地理的位置は，東径 137度55分42秒，北緯35度38分24秒に位置し，長野県上伊那郡中川村片桐横前茶堂といわれる地籍に所在する。遺跡に至るには，国鉄飯田線七久保駅より東方約3.5km，国道 153号線より西方2.6kmの地点にあたる。遺跡附近には，木曽山脈に源を発する奥田切川と，前沢川とに挟まれた，天竜川より数えて第１段丘に分布し，標高 633m 内外の範囲に広がっている遺跡である。

本遺跡の附近には，針ケ平遺跡(縄文中期・弥生後期)，溝林遺跡(縄文中期)，梨ノ木遺跡(縄文中期)，刈谷原遺跡(縄文前期・弥生前期)，原田遺跡(縄文草創期・早期・弥生中期初頭)の諸遺跡にかこまれ，東に天竜川をへだてて赤石山脈の山々，西に木曽山脈の諸峯を眺めることのできる景勝の地に位置している遺跡である。



1図　茶堂遺跡の位置図

第２節　地形及び地質

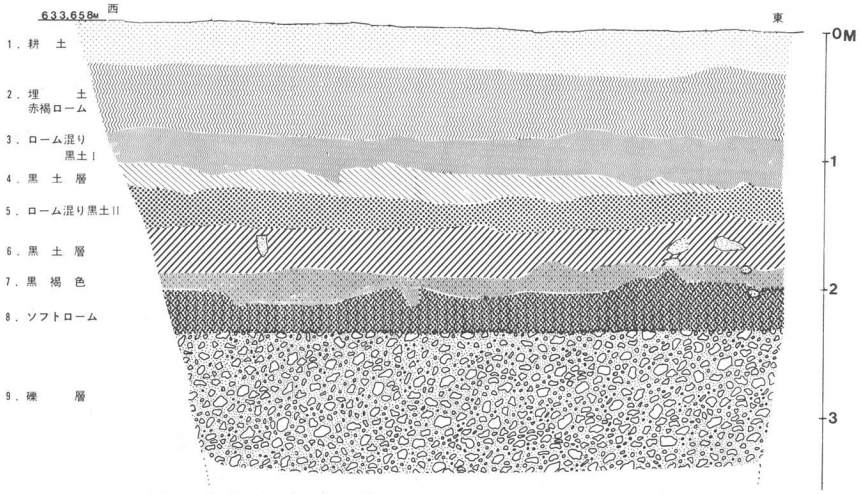
１）地　　形

遺跡の位置する片桐横前は，古くは与田切川と前沢川が作った洪積台地を，天竜川，与田切川，前沢川がさらに浸食して作った田切地形である。遺跡の所在する横前扇状地は，中川村でも天竜川の河岸台地として，最も平坦で，安定した場所にある。この地域には，縄文時代草創期から早期・中期・後期，弥生前期・後期，古墳，奈良，平安，中世と多くの遺跡が分布している。

２）地質（２図・３図　図版３）

横前扇状地の基盤は，古期火山灰土を含む砂礫層からなっている洪積層である。

この洪積層の上部に，中期・新期ロームを置いた層序である。



２図　茶堂遺跡凹地帯埋没個所層序

層　序

第１層……耕土層

第２層……埋土層（赤褐色ローム層）

第３層……ローム混り黒土層　Ⅰ

第４層……黒土層

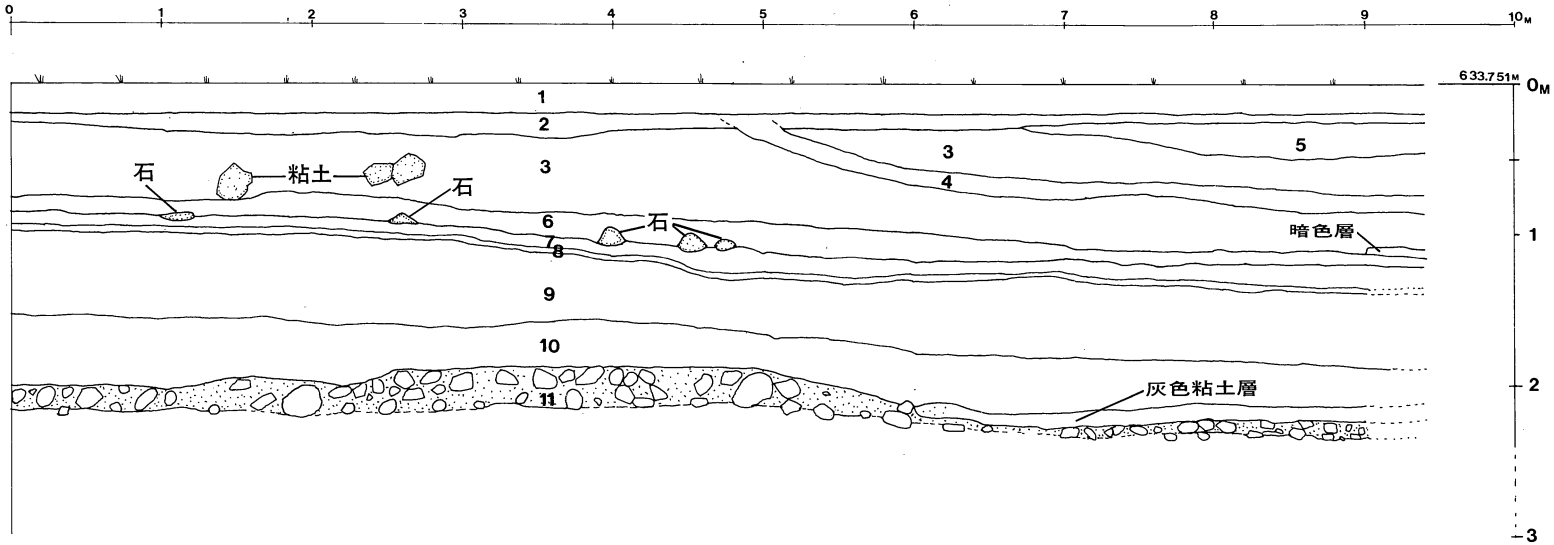
第５層……ローム混り黒土層　Ⅱ

第６層……黒土層

第７層……黒褐色土層

第８層……ソフトローム層

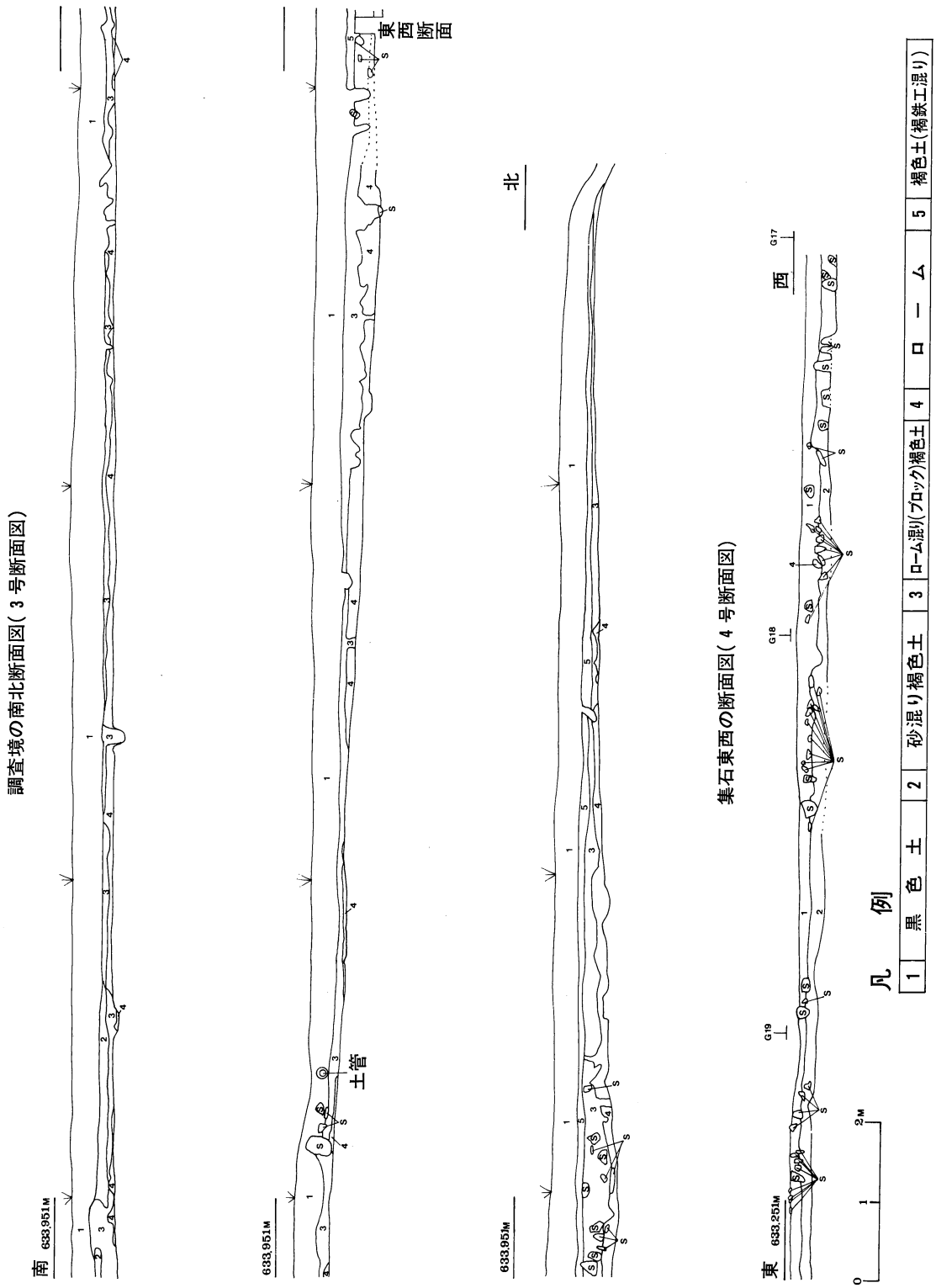
第９層……砂礫層（洪積層）



凡例

1．耕　　土
2．黒　　土
3．硬質ローム
4．第4浮石帯
5．軟質ローム
6．浮石混り層
7．第3浮石帯
8．暗　色　帯
9．硬質ロームⅠ（チョコレート色）やや濃い
10．硬質ロームⅡ（チョコレート色）やや薄い
11．礫　　層

3図　茶堂遺跡の地層図



4図　調査堺の南北断面図（3号断面図）・集石東西の断面図（4号断面図）

第３節　歴史的環境　（5図・6図・7図・8図・図版 2—上・下・表1）

茶堂遺跡の所在する中川村片桐地域には，遺跡分布調査の結果48個所遺跡が確認されているが，今回は，そのうち，当遺跡の附近に分布している遺跡について簡単にふれてみたい。

1．針ケ平遺跡は，当遺跡の南西前沢川左岸段丘上から針ケ平部落附近にわたって分布している遺跡で，縄文中期の集落と考えられる。

2．牧ケ原遺跡は，現在中川西小学校・中川西公民館・片桐保育園などがある所を中心にして東の方にも最近遺物が発見され，調査が進むにつれ遺跡の範囲も広くなっている。牧ケ原遺跡からは，弥生後期の住居址が発見されているところから，弥生時代の集落が存在していたことは確かである。また，古墳時代の遺物も確認されているところから，古墳時代の村の存在も考えられる。そのほか，奈良・平安・中世の遺物散見するところから，弥生時代以降中世に致村があったろうし，東山道賢錐の駅の牧場も置かれた可能性も考えられる遺跡である。

3．六万部古墳は，昭和52年度調査が行なわれ，金銅製柄頭をはじめ，直刀・鉄鏃・小玉・馬具・刀子・須恵高杯，杯・土師杯・人骨など多数発見された。これらの遺物から後期古墳であることが確認された。

4．小和田遺跡・小和田垣外からは縄文中期・弥生時代の土器が出土している。小和田遺跡からは，弥生時代の後期頃と思われる木柵が土地改良工事の時に発見され，弥生時代より米作が行われていたことを物語るもので，中川村では茶堂（中溝）より発見された水田遺跡と供に，貴重な遺跡である。

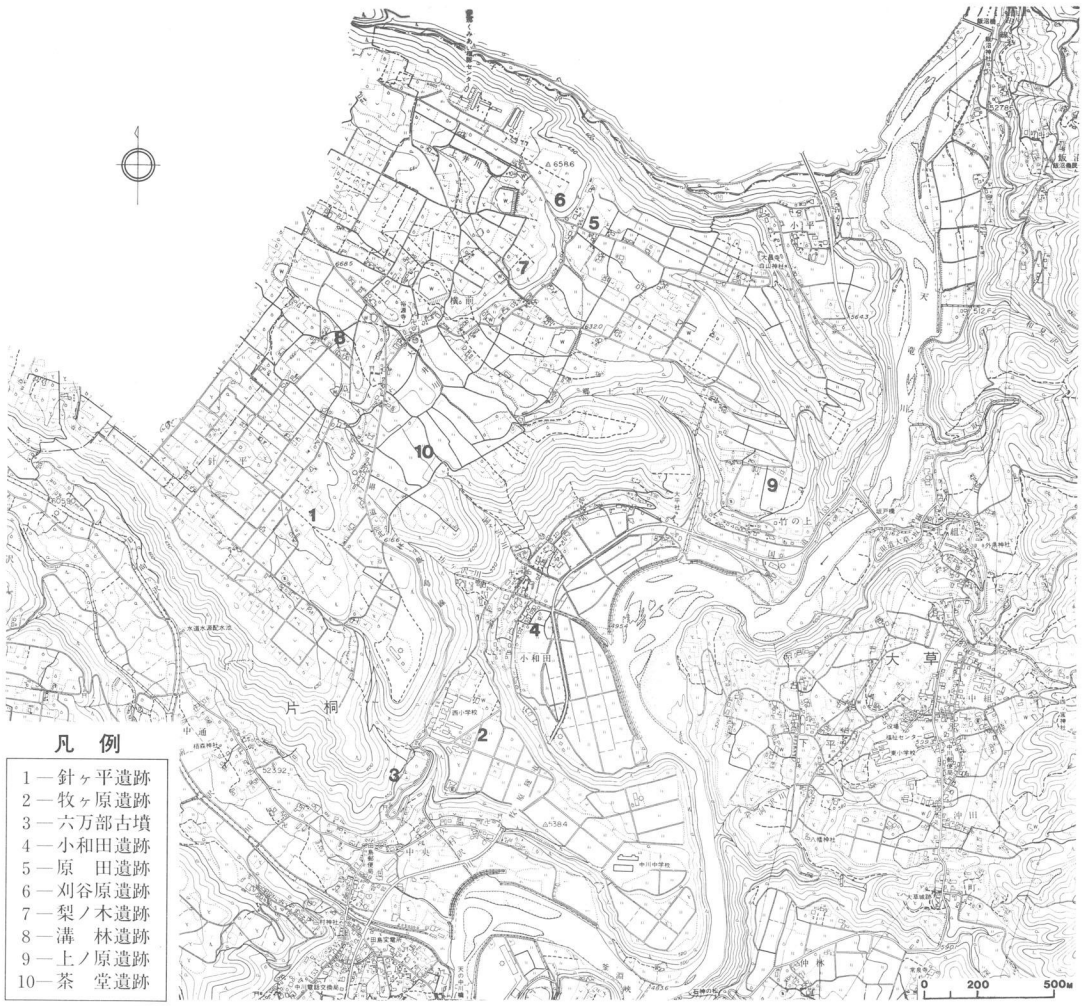
5．原田遺跡は，横前部落の北部に当る位置にあり，昭和56年度に調査された遺跡で，縄文草創期・早期・前期・後期・弥生中期初頭の庄之畑式集落址であることが確認された。

6．刈谷原遺跡は，弥生前期の水神平式の遺跡であるとともに縄文前期の主要な遺跡である。（県重要遺跡）

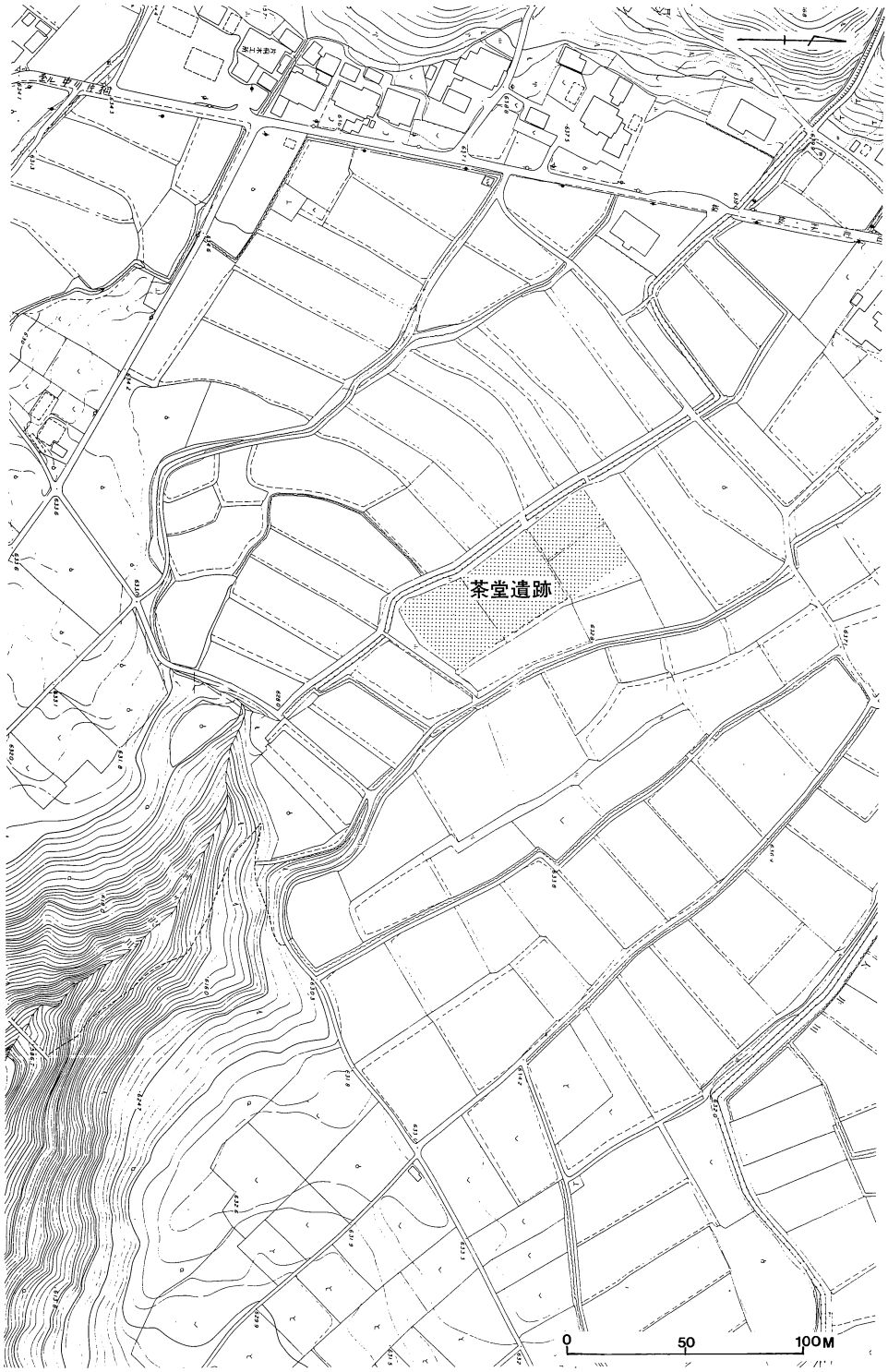
7．梨ノ木遺跡，本遺跡は刈谷原遺跡の段丘南側にある遺跡で，縄文中期の大集落址である。現在畑地となっている。

8．　溝林遺跡，茶堂遺跡の西横前段丘上にある遺跡である。本遺跡は，昭和55年に発掘され，縄文中期の住居址34軒が発見された集落址でめる。

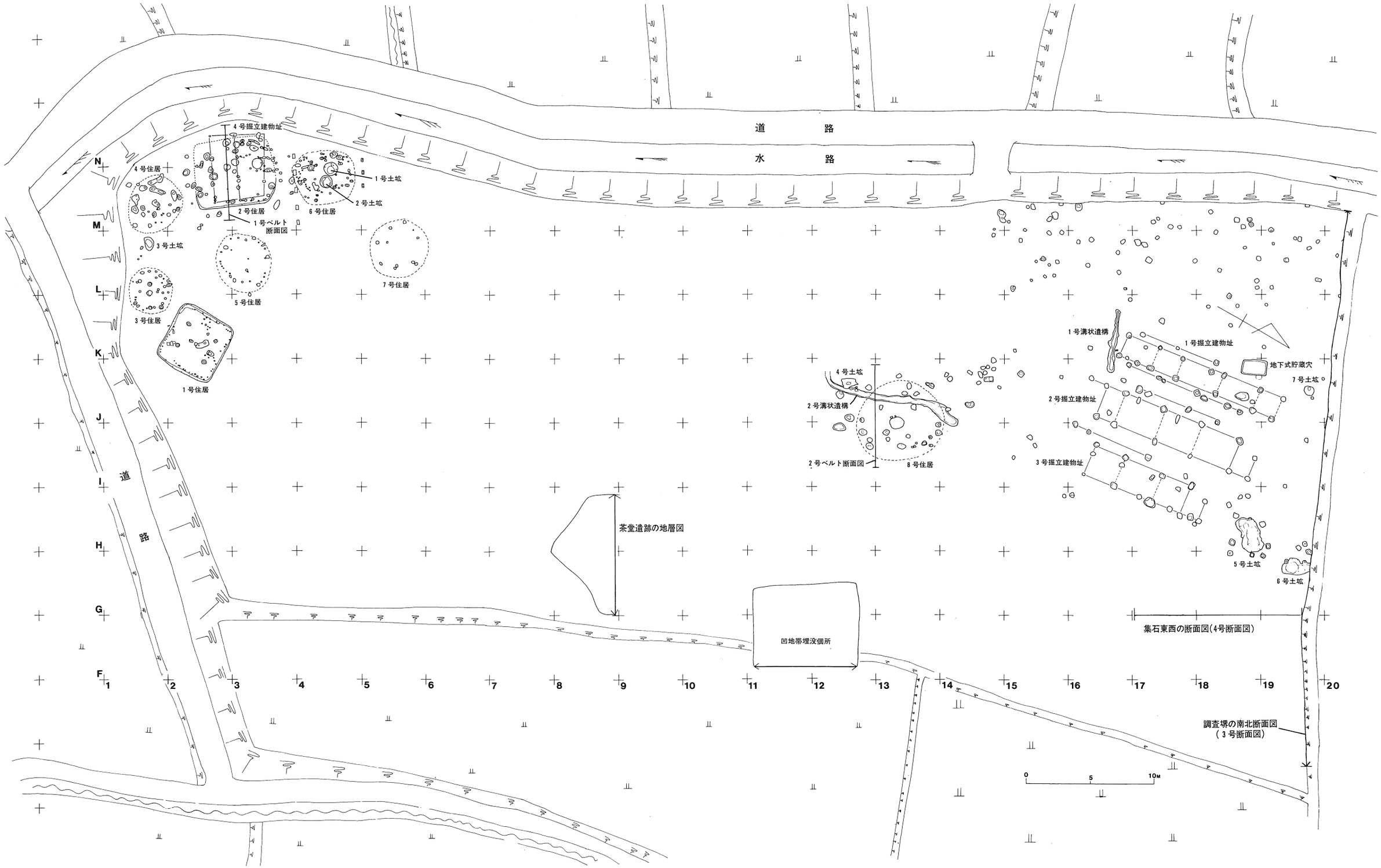
9．　上ノ原遺跡は，中川村片桐地区上の原地籍に所在している遺跡で，中川村教育委員会が圃場整備事業に合せて事前に調査したところ，縄文中期後半の住居址８軒，竪穴４基，土壙８基が発見された遺跡である。縄文中期のほかに縄文後期土器や平安時代の灰釉破片・室町時代，桃山時代から江戸時代の陶器片が検出された。



5図　茶堂遺跡附近遺跡分布図



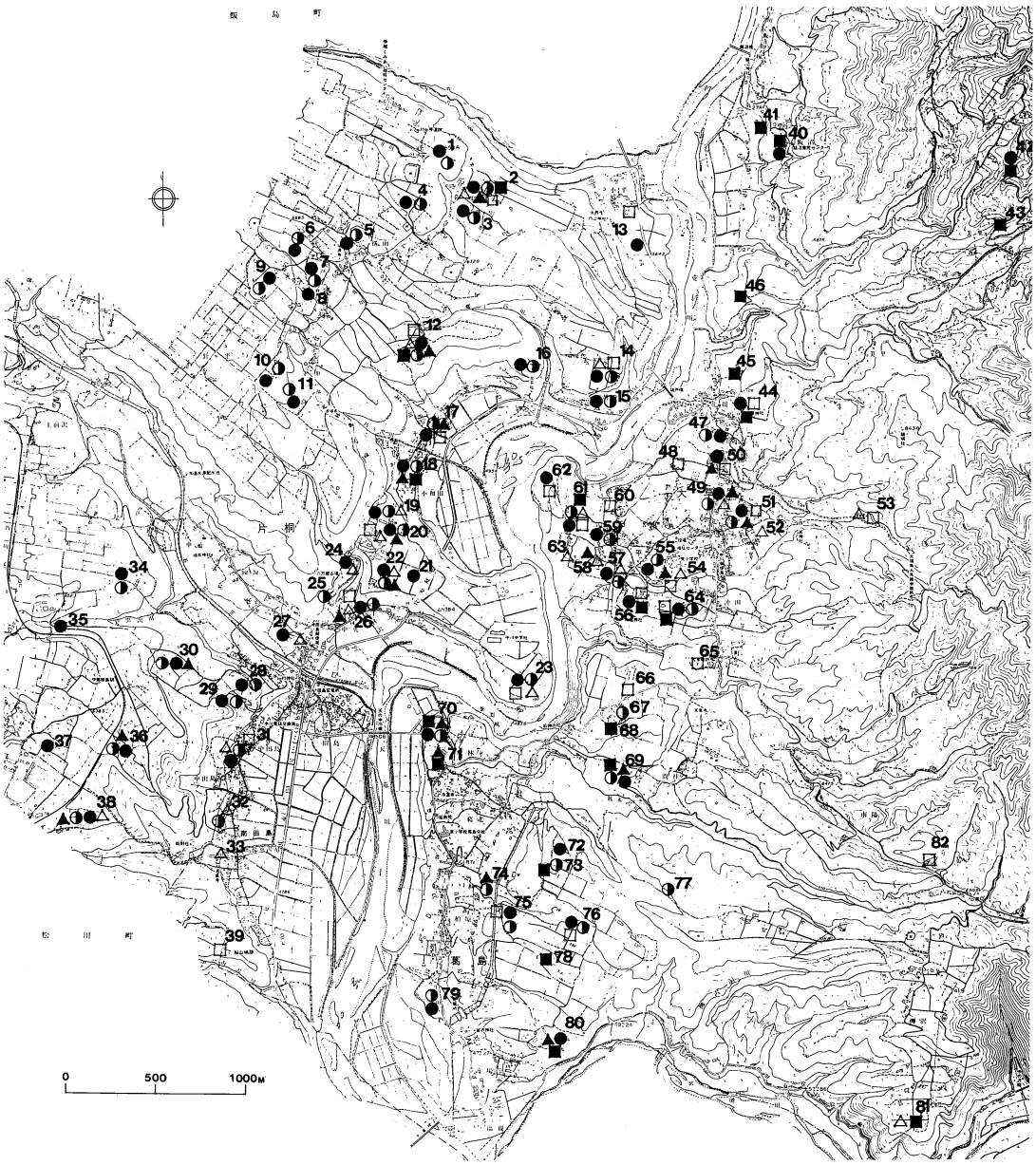
6図　茶道遺跡附近の地形・発掘区



7図　茶道遺跡遺構配置図

番号	遺跡名	18	小和田垣外	36	西原	54	東小入口南	72	池の平
1	刈谷原	19	松ノ越	37	曽利目	55	堂ヶ原	73	天伯
2	原田	20	西小学校	38	富士塚	56	下ノ坊	74	双葉園
3	原田	21	五十目	39	船山城址	57	川荒田	75	姫宮
4	梨ノ木	22	稚蚕所	40	飯沼 1	58	下り	76	ハッ手
5	寺久保	23	牧ヶ原	41	飯沼 2	59	中島	77	小町原
6	溝林	24	六万部古墳	42	美里 1	60	下平E	78	富士塚
7	横前宮北	25	天神坂	43	美里 2	61	下平F	79	下島
8	横前横山	26	中央	44	北組 1	62	西瀬	80	百田
9	上新田	27	天伯古墳	45	北組 2	63	釼光	81	大平
10	針ヶ平	28	桐山	46	北組 3	64	太子原	82	鹿養
11	針ヶ平農場	29	古城	47	下り松	65	大草城跡		
12	茶堂	30	大林	48	中組大鹿	66	殿墓跡		
13	小平	31	中田島	49	中組A	67	仲林		
14	上ノ原	32	南田島	50	中組B	68	富士塚		
15	竹ノ原	33	塚本古墳	51	中組北原	69	下ヶ原		
16	高つなぎ	34	駒ヶ頭	52	中組住宅上	70	葛島城跡		
17	小和田	35	石飛	53	中組へび石	71	大宮社		

凡例
●……縄文時代
◑……弥生時代
△……古墳時代
▲……平安時代
□……中世
■……近世



8図　中川村遺跡分布図

表1　中川村遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	先土器	縄文時代						弥生時代			土師	須恵	灰釉	中世	近世	備考
				創	早	前	中	後	晩	前	中	後						
1	刈谷原					○	○			○	○							
2	原田1			○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	
3	原田2						○				○							
4	梨ノ木						○					○						
5	寺久保						○					○						
6	溝林						○	○				○						
7	横前宮北						○					○						
8	横前横山						○											
9	上新田						○					○						
10	針ケ平						○					○						
11	針ケ平農場						○					○						
12	茶堂				○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	
13	小平						○								○			
14	上ノ原						○					○		○		○		
15	竹ノ上						○							○				
16	高つなぎ						○					○						
17	小和田						○					○			○	○		
18	小和田垣外						○					○			○		○	
19	松ノ越						○					○		○				
20	西小						○					○		○	○	○		
21	五十目						○											
22	稚蚕所						○					○		○	○			
23	牧ケ原						○					○		○		○		
24	六万部古墳						○							○				
25	天神坂											○						
26	中央						○					○		○	○	○		
27	天伯古墳						○							○				
28	桐山						○					○						
29	古城						○					○						
30	大林				○		○					○			○			
31	中田島						○					○		○		○		
32	南田島											○		○				
33	塚本古墳													○				
34	駒頭						○					○						
35	石飛						○											
36	西原						○					○			○			
37	曽利目						○											
38	富士塚						○					○		○	○			
39	舟山城址															○		
40	飯沼1						○										○	
41	飯沼2																○	
42	美里1						○										○	
43	美里2																○	
44	北組1						○									○	○	
45	北組2																○	
46	北組3																○	
47	下り松						○					○						
48	中組大鹿															○		
49	中組A						○					○		○	○			
50	中組B						○								○	○		
51	中組北原						○					○			○	○		
52	中組住宅上													○				
53	中組へび石													○		○		
54	東小入口南													○	○	○		
55	堂ケ原						○					○						
56	下ノ坊						○									○	○	
57	川荒田						○					○			○			
58	下り													○	○			
59	中島						○					○						
60	下平E																○	
61	下平F						○					○			○	○	○	
62	西瀬						○									○		
63	釼光														○			
64	太子原						○					○				○	○	
65	大草城址															○		
66	殿墓															○		
67	仲林											○						
68	富士塚																○	
69	下ケ原						○					○			○		○	
70	葛島城址						○					○			○		○	
71	大宮社														○		○	
72	池の平						○											
73	天伯											○					○	
74	双葉園											○			○			
75	姫宮						○					○					○	
76	八ツ平						○					○				○		
77	小町原											○						
78	富士塚																○	
79	下島						○					○						
80	百田						○								○		○	
81	大平													○			○	
82	鹿養															○		
計				1	3	3	56	2		2	4	44	2	21	23	24	23	

第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　調査の概要

茶堂遺跡の発掘は，南信土地改良事務所及び文化庁補助による委託事業である。本調査は，予算的措置等により58，59年度の２ケ年に分け調査を行う。本遺跡の範囲は東西約300m，南北約500mに及び調査区域の設定に苦慮したが，調査の対象となった面積は東西約30m 南北約90mの面積で，地目は水田地帯である。発掘地点の選定に当っては，地形の上から，又地主の方々から過去に遺物が発見された個所などを参考に表面採集を綿密に実施し，今回はそのうちの遺跡の中心部と思われる地域を選んで調査を実施した。

調査の手順として，調査地点が元桑畑で小高い舌状台地であった為，開田時に於て遺構等がかなり削り取られ破壊されている事を考慮しつつ，ブルトーザーを使用し，水田の耕土を除土し，５×５ｍ毎の調査グリッドを設定し，鋤連がけで固い地場の層を削り取り調査を実施した。

調査の結果，住居址８軒，中世掘立建物址４軒，柱穴群，土壙，溝状遺構が発見された。

第２節　遺　物

１．土器

今回の調査で出土した土器は，開田時にローム層迄も削り取り移動してしまった為に，住居址などは殆ど壁はなく床面まで削られ柱穴を残すのみの状態で，表採等も合せて 300点が出土したのみで，その中で復原された土器は４点にとどまった。

遺物の出土状態は主として水田の地場層からで遺構内には少なかった。又図上復原の出来る資料に乏しい事も残念なことである。調査で確認された土器を縄文時代から弥生時代及び中世に分け述べることにする。縄縄文時代，早期５点，前期８点，中期34点，後期３点。弥生時代，中期５点，後期128点。古代から中世では，土師16点，内耳12点，奈良須恵器２点，平安施釉陶器３点，中世陶器84点が発見された。

２．石器

出土した石器は全部で75点である。１号住居址をのぞいては，遺跡の破壊が著しく各時代の遺構に伴出するものがない為遺構外出土及表採等も含めて考察するにあまり明らかに分類出来ないが，縄文中期に属するものが主体であると思われる。こうした状況から一括して報告する。

その内訳は，打製石斧６，石錘３，横刃形石器７，敲打器１，摺石１，石鏃３，石匙２，スクレーパー１，黒曜石削片16，硬砂岩剝片36が出土した。

表 2　茶堂遺跡出土土器一覧表（58年分）

No.	遺物No.	出土場所	時代　時期	摩耗度	厚さmm	紋　様	長石	雲母	焼　成	備　考
1	2	N－1	弥生	少	8	無	有	無	良	
2	3	〃	〃	多	8	〃	〃	〃	不良	
3	6	H－1	縄文　早期	少	6	山型文	〃	有	良	押型文
4	7	M－1	縄文　前期	無	6	無	〃	〃	〃	
5	8	〃	縄文　中期	多	8	條　痕	〃	〃	〃	
6	11	L－1	弥生	少	6	無	〃	無	〃	
7	13	M－1	〃	多	7	〃	〃	有	〃	
8	15	L－1	不明	〃	6	〃	〃	無	不良	
9	16	〃	縄文　中期	少	10	〃	〃	〃	やや不良	底　部
10	17	〃	弥生	多	6	〃	〃	〃	良	
11	19	M－1	縄文　中期	少	9	〃	〃	〃	〃	
12	21	〃	〃	多	7	沈　線	〃	〃	〃	4号住
13	23	〃	〃	〃	6	刺突文	〃	〃	〃	〃
14	24	〃	弥生	〃	6	無	〃	〃	〃	〃
15	25	〃	不　明	〃	7	〃	〃	〃	不明	〃
16	27	M－2	弥生	〃	5	〃	〃	有	良	
17	28	〃	〃	〃	5	〃	〃	無	不良	
18	30	M－1	縄文　中期	〃	8	沈　線	〃	〃	良	
19	31	M－1	弥生	少	5	無	〃	有	〃	
20	32	〃	縄文　後期	〃	7～10	〃	〃	無	不良	
21	33	〃	縄文　中期	〃	8	刺突文	〃	有	良	
22	38	M－2	不　明	〃	8	無	〃	無	〃	
23	39	M－1	弥生	多	5	〃	〃	〃	不良	
24	40	〃	縄文　後期	少	7	沈　線	〃	〃	良	
25	41	N－1	土　師	多	4	無	〃	〃	〃	
26	42	〃	〃	〃	4	〃	〃	〃	〃	
27	43	〃	弥生　後期	〃	6	〃	〃	〃	〃	
28	44	〃	内　耳	〃	5	〃	〃	有	〃	
29	47	〃	弥生	無	6	〃	〃	無	〃	
30	49	〃	縄文　後期	少	7	〃	〃	〃	〃	
31	50	〃	弥生　中期	〃	6	條　痕	〃	有	〃	
32	51	〃	土　師	〃	6	無	〃	無	〃	
33	55	〃	縄文　中期	〃	7	沈　線	〃	有	〃	
34	56	〃	弥生	〃	5	無	〃	〃	〃	
35	57	〃	土　師	〃	5	〃	〃	無	〃	
36	58	〃	弥生	無	5	〃	〃	有	〃	
37	60	N－2	〃	少	7	〃	〃	無	〃	
38	61	M－2	弥生	多	5	〃	〃	〃	〃	
39	63	N－2	〃	〃	5	〃	〃	〃	不良	
40	64	M－2	土　師	少	5	〃	〃	〃	良	
41	66	〃	弥生中期(初)	多	7	〃	〃	〃	〃	
42	67	〃	弥生	〃	7	〃	〃	〃	〃	
43	68	〃	〃	〃	7	〃	〃	〃	〃	
44	69	〃	〃	少	5	〃	〃	〃	〃	
45	70	〃	不　明	無	6	沈　線	〃	〃	〃	
46	71	〃	縄文　中期	少	8	〃	〃	〃	〃	
47	72	〃	弥生	〃	5	無	〃	〃	〃	
48	74	〃	〃	多	5	〃	〃	〃	不良	
49	75	〃	弥生中期(初)	〃	6	條痕刺突文	〃	〃	良	
50	76	L－2	弥生	少	7	無	〃	〃	〃	
51	77	〃	〃	多	7	〃	〃	〃	不良	
52	81	N－3	〃	〃	5	〃	〃	〃	良	
53	82	M－4	縄文　中期	少	8	〃	〃	〃	〃	6号住
54	83	〃	〃	〃	6	刺突文	〃	〃	〃	〃
55	87	〃	〃	〃	7	無	〃	〃	〃	

茶堂遺跡出土土器一覧表（58年分）

No.	遺物No.	出土場所	時代	時期	摩耗度	厚さmm	紋様	長石	雲母	焼成	備考
56	88	L－1	縄文	前期	少	6～8	無	有	有	良	3号住
57	89	K－1	〃		〃	6	〃	〃	〃	〃	〃
58	90	L－3	内	耳	無	5	〃	〃	〃	〃	
59	95	H－10	縄文	中期	少	8	〃	〃	無	〃	
60	96	〃	内	耳	多	5	〃	〃	〃	〃	
61	97	〃	〃		〃	5	〃	〃	〃	〃	
62	98	〃	土	師	〃	5	〃	〃	〃	〃	
63	99	〃	内	耳	少	7	〃	〃	〃	〃	
64	102	〃	〃		多	9	〃	〃	〃	〃	
65	108	H－11	〃		〃	5	〃	〃	〃	〃	
66	111	I－11	土	師	〃	6	〃	〃	〃	〃	
67	112	H－12	不	明	〃	5	〃	〃	有	不良	
68	119	H－13	内	耳	〃	6	〃	〃	無	良	
69	127	I－12	〃		少	7	〃	〃	〃	〃	
70	129	〃	弥	生	〃	10	〃	〃	〃	〃	
71	132	J－13	〃		多	4	〃	〃	〃	〃	
72	137	I－14	縄文	中期	少	8	〃	〃	〃	〃	
73	138	I－13	〃		〃	10	〃	〃	有	〃	
74	140	〃	〃		多	8	〃	〃	無	不良	
75	142	〃	〃		少	8	〃	〃	〃	良	
76	144	〃	弥	生	無	6	〃	〃	〃	〃	
77	145	J－13	縄文	早期	少	14	有	〃	有	〃	繊維入
78	148	K－14	縄文	中期	多	6	無	〃	無	不良	
79	153	M－1	縄文	前期	少	6～8	〃	〃	有	良	
80	154	L－1	縄文	中期	多	8	〃	〃	無	〃	
81	155	〃	弥	生	〃	8	〃	〃	〃	〃	
82	156	M－1	〃		少	5	〃	〃	〃	〃	
83	158	M－2	〃		多	6	〃	〃	〃	〃	
84	160	〃	〃		少	6	〃	〃	〃	〃	
85	161	N－1	〃		〃	6	〃	〃	〃	〃	
86	163	〃	〃		〃	6	〃	〃	有	〃	
87	165	N－2	〃		多	5	〃	〃	無	不良	
88	166	〃	〃		少	7	〃	〃	〃	良	
89	167	N－3	不	明	多	7	〃	〃	〃	不良	
90	168	M－1	弥	生	〃	4	〃	〃	〃	良	
91	171	M－4	内	耳	〃	4	〃	〃	有	〃	6号住
92	172	〃	土	師	〃	7	〃	無	無	不良	〃
93	176	N－4	縄文	中期	〃	8	〃	有	〃	良	〃
94	177	〃	弥	生	〃	4	〃	〃	〃	不良	
95	182	H－12	〃		〃	6	〃	〃	〃	良	
96	183	〃	内	耳	無	7	〃	〃	〃	〃	
97	184	〃	縄文	中期	多	7	〃	〃	〃	〃	
98	185	〃	縄文	早期	〃	9	〃	〃	有	〃	繊維入
99	186	〃	内	耳	無	9	〃	〃	無	〃	
100	190	I－12	不	明	多	2	〃	〃	〃	〃	
101	191	〃	弥	生	少	6	〃	〃	〃	〃	
102	194	〃	縄文	前期	多	5	〃	〃	有	〃	
103	195	〃	縄文	中期	少	8	〃	〃	無	〃	
104	196	〃	土	師	〃	6	〃	〃	〃	〃	
105	197	〃	〃		〃	6	〃	無	〃	不良	
106	198	I－13	弥	生	多	8	〃	有	〃	〃	
107	199	I－13	縄文	中期	少	8	〃	〃	〃	良	
108	200	I－13	土	師	多	4	〃	無	〃	〃	
109	202	〃	縄文	早期	少	10	縄文	有	有	〃	繊維入

茶堂遺跡出土土器一覧表（59年分）

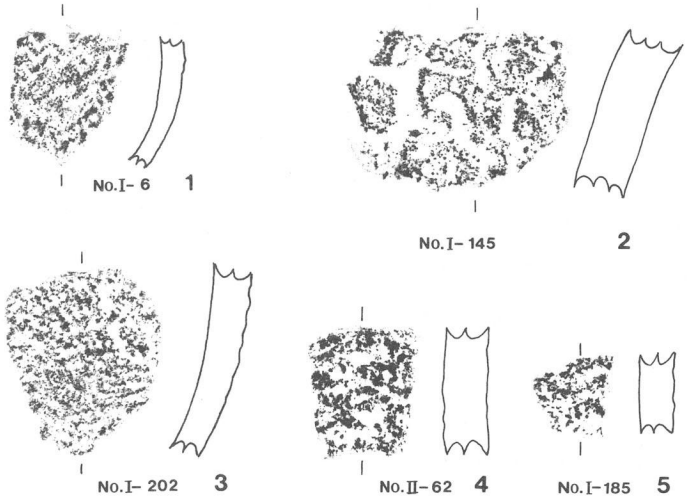
No.	遺物No.	出土場所	時代	時期	摩耗度	厚さmm	紋様	長石	雲母	焼成	備考
1	4	M－18	縄文	中期	多	7	竹管文	有	無	良	
2	9	K－18	弥	生	〃	6	無	〃	〃	〃	
3	10	〃	縄文	中期	〃	10	〃	〃	有	〃	
4	12	〃	土	師	僅少	6	〃	〃	僅少	〃	
5	25	J－18	縄文	中期	〃	7	竹管文	〃	無	〃	
6	28	〃	弥	生	多	8	無	〃	〃	〃	
7	34	L－15	縄文	前期	無	8	〃	〃	有	〃	
8	37	〃	土	師	多	6	〃	〃	無	〃	
9	45	J－14	縄文	早期	〃	10	不明	〃	〃	〃	繊維入
10	47	〃	弥	生	〃	8	無	〃	僅少	やや不良	
11	49	J－16	縄文	中期	少	8	〃	〃	無	良	
12	51	I－17	縄文	前期	無	10～9	〃	〃	有	〃	
13	58	I－13	縄文	中期	多	13	〃	〃	無	やや不良	8号住
14	61	〃	弥	生	僅少	7	〃	〃	〃	良	
15	62	〃	縄文	早期	〃	12	不明	〃	有	〃	繊維入
16	63	〃	弥	生	〃	8	無	〃	無	〃	
17	67	〃	〃		無	6	〃	〃	僅少	〃	
18	68	〃	〃		多	7	〃	〃	無	やや不良	
19	88	J－19土壙内	土	師	無	6～4	〃	〃	〃	良	
20	206	J－12	縄文	中期	僅少	7	〃	〃	〃	〃	

2号住居址附近の発掘風景

縄文時代の遺構と遺物

縄文早期の遺物　（９図）

土器，早期の遺構は検出されなかったが，グリッドＨ－１，Ｊ－13附近に早期の土器が発見されたものを一括して述べると，１は,横位と縦位に山型文が施された押型文土器，やゝ摩耗しているが焼成は良好で器厚は６mmの土器片で，胎土に長石粒と金雲母を含み色調はやゝ赤褐色を呈する。２は，粗大な隋円型の押型文を施し繊維と長石粒を含む，器厚1.4cm焼成は良好で固い，色調は赤褐色を呈し高山式土器に同定するものと思われる。３は，摩耗され一部明らかでないが縄文を施した繊維入土器で，器厚は１cm焼成は良好で胎土に石英と金雲母を含み色調は褐色を呈する。４は，早期末の繊維土器で無文で長石と雲母を含む，器厚は1.2cmで焼成は良好であるが器面が凸凹している。５は少片の土器で器面はよくわからないが，繊維長石雲母を含み，器厚は９mm無文の粗製土器で色調はやゝ黒褐色を呈する，粕畑式土器に比定するものと思われる。



９図　縄文早期の出土土器拓影（１：２）

縄文前期の遺構と遺物　（表３）

本調査によって柱穴遺構と思われる３号から７号まで５つの柱穴址を検出したが，之を柱穴址として見るか住居址として見

表３　縄文前期住居別規模一覧表

住居址No.	規（m）模	主な柱穴の数	床面の有無	炉の有無	遺物	標高
3	3.6×3.3	10	一部残存	検出されず	有(中越式)	633.491
4	4.8×3.7	10	無	〃	無	633.251
5	4.5×3.9	6	〃	〃	〃	633.411
6	4.8×4.3	5	〃	〃	〃	633.251
7	4.7×3.9	5～7	〃	〃	〃	633.471

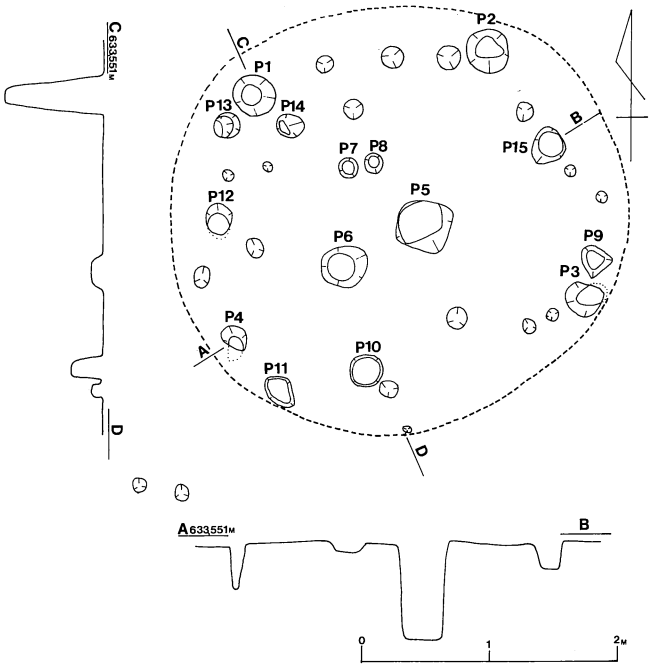
るか論議を呼ぶところであるが，これらの遺構を考察するに共通して云える事は，規模が長軸約3.6m～4.8m，短軸約3.3m～3.9mですべて隋円形を呈している。主な柱穴数は5～10で数的には立替等もあって重復した点も考えられるがほぼ隋円形に配列され，柱穴と柱穴の間には小穴が検出されている。炉は恐らく中越式住居址にも見える様に地床炉ではないかと考えられるが，開懇時に削り取られた為か何れにも検出されなかった。又之等の柱穴遺構は規模からいっても，配置状態から見ても一連の集落をなすものと考えられる。3号址からは柱穴から刈谷原遺跡にも見られる指痕のある無文の中厚手のいわゆる縄文前期中越式と云われる範ちゅうの土器片が出土した事でもあり，まだまだ住居址としての諸条件に欠けてはいるものの本調査に於てはあえて住居址と呼ぶ事にした。

3号住居址　(10図，11図，表4)

遺構　(10図　表4)

本址は，舌状台地の最南端の1号住居址の南側に位置しグリッドK－1，J－1，L－2にまたがって検出された。開懇等により破壊されローム層に掘り込んだ柱穴のみが残存する柱穴遺構であるが，柱穴の配列や，P10，P15から土器が検出された事から本址は住居址である事が確認された。

平面プランは，長径約3.6m前後，短径約3.3m前後の規模の隋円形を呈するものと思われる。主柱穴は，P1，P2，P3，P4，P5，P9，P10，P11，P12，P15と考えられるが，この中でもP1～P5は深さが35cm～77cmで比較的に深く掘り込んであり又P2，P3，P4はやゝ内に傾斜していた。一方のP9～P12及びP15は17～26cmで比較的浅くなっている。この二つのグループを比較してみると，或は立替時柱穴の残存したものか又は一方が主柱穴で，他方が補助的なものであるか明らかではない。



10図　3号住居址実測図

表4　　3号住居址ピット一覧表

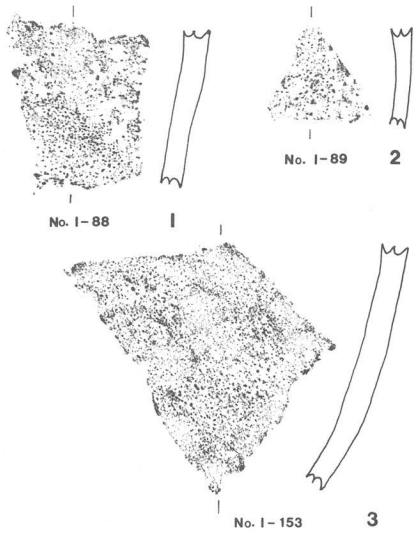
No.	径　cm	深さcm	ピットの種類	覆　土	底部の状態	壁の状態	表　面
1	28×28	77	主柱穴	黒褐色土	平で固い	固い	
2	26×30	45	〃	〃	平で内に傾く	〃	
3	26×25	36	〃	〃	〃	〃	
4	16×18	35	〃	〃	〃	〃	
5	44×42	76	〃	〃	平で直	〃	固く床面残る
6	34×33	10	小柱穴	〃	舟底で固い	〃	〃
7	15×14	4	〃	〃	丸底	〃	
8	12×13	4	〃	〃	〃	〃	
9	20×17	17	主柱穴	〃	平で固い	〃	
10	20×20	24	〃	〃	平	〃	上部土器No.88
11	21×23	13.5	〃	〃	〃	〃	
12	21×22	26	〃	〃	平で固い	〃	
13	17×18	15	小柱穴	〃	柱穴1の方向に傾く	〃	
14	17×17	15	〃	〃	外にやや傾く	〃	
15	24×24	22	主柱穴	〃	平で固い	〃	上部土器No.89

柱穴と柱穴との間には径15cm前後深さ10cm～20cmの小穴が検出されたが，恐らく壁際の施設で土留めなどの保護の為に柵とも考えられる。床面は検出されなかつたがP 5附近に固いタタキ状で貼土質部分が残存したのみで，中越の住居に見る地床炉の跡さえ検出されなかった。

遺物　（11図）

本址より出土した遺物は3点の土器のみで表面には出土せず柱穴内より検出された。

1，2，はピット10から出土し，1，は上部に2は15cm下に検出された。3はピット15の上部に検出された。1，2，3，何れも無文の指痕をのこす中厚手の土器で器形は深鉢型をなすいわゆる中越式といわれる範ちゅうの土器で本址に伴出するものと思われる。この種の土器は，近くの刈谷原遺跡にも出土している。

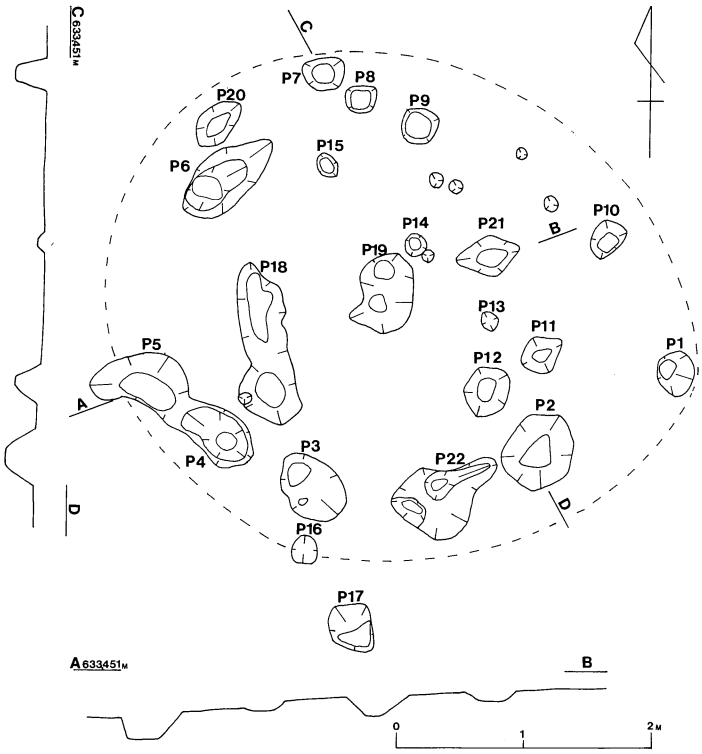


11図　　3号住居址出土土器拓影（1：2）

4号住居址　（12図　表5）

遺構（12図）

本址は，舌状台地最南端西寄り，3号住居址の南西に隣接し，グリッドM—1，M—2にまたがってローム層上に検出された。耕土から地場まで重機で除土し，15cm前後のロームからなる埋土及15cm～10cm位の黒褐色土層を鋤連がけで掘り下げるとローム層に達し初めて柱穴遺構が検出された。本址附近はやゝ傾斜になつていて3号住居址より約40cm位低くなつている。



12図　4号住居址実測図

平面プランは，確認が困難であったが，柱穴の配置等により推定し，長径4.8×3.7mの規模をもつ隋円形を呈するものと思われる。主柱穴はP1からP10と考えられ，P1とP6が相対して東西に柱穴の配置を見ると，P2とP10，P3とP9，P4とP8，P5とP7の様に対象的な配置になっている。P11，P12，P18は住居内の補助的柱穴で，P16，P17は住居外の補助的柱穴であると思われ，P17，P19，P21は土坑の類と思われるがP20，P22は溝状になっている。P13，P14，P15は小柱穴は一線にならび附近の表面は固くなっていた。床面は検出されなかったが表面はやゝ傾斜し東西の比高差は22cmで，全体的には軟弱気味になり炉も検出されなかった。

遺物

本址に伴出される遺物は開懇のかく乱等によって削り取られた為か検出されなかった。遺構内のローム上には小片で磨耗のひどい縄文中期と思われる無文の土器片3点，弥生後期の無文の土器片1点，不明の土器片1点，黒曜石の剝片3点，鉄宰1点，江戸時代の鉄釉陶器の小片1点が出土されたが，これらは本址に伴わないものである。

表５　　４号住居址ピット一覧表

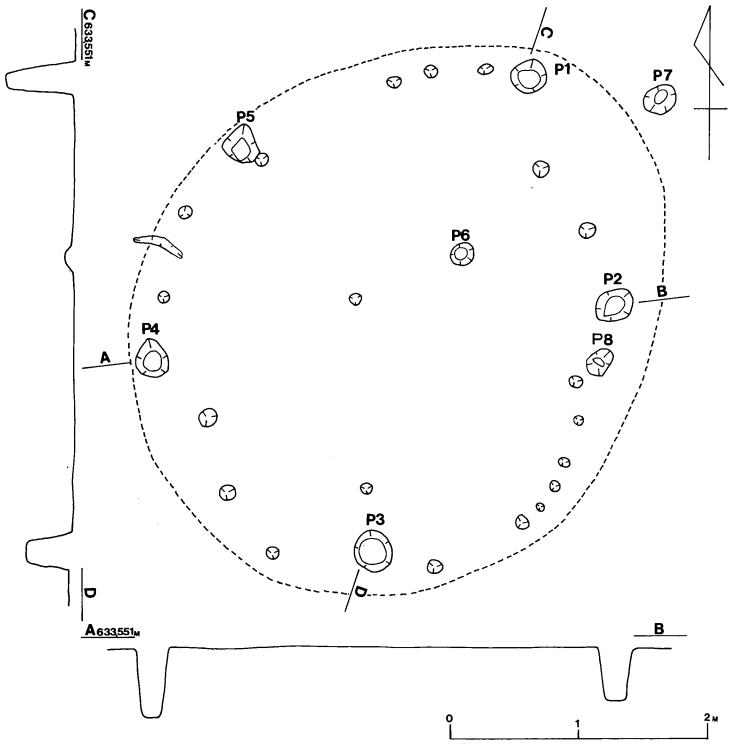
No.	径　cm	深さcm	ピットの種類	覆　土	底部の状態	壁の状態	表面
1	30×34	72	主　柱　穴	黒褐色土	平　で　固　い	固　い	固い
2	54×61	24	〃	〃	舟底で固い	〃	軟弱
3	43×68	23	〃	〃	平らでやや軟か	軟　弱	〃
4	40×65	35	〃	〃	丸底で固い	固　い	〃
5	43×80	25	〃	〃	平らでやや軟弱	軟　弱	〃
6	43×86	27	〃	〃	平　で　固　い	固　い	〃
7	26×33	23	〃	〃	〃	〃	〃
8	25×26	16	〃	〃	丸底で固い	〃	固い
9	28×31	11	〃	〃	舟底で固い	〃	軟弱
10	23×32	11	〃	〃	平　で　固　い	軟　弱	〃
11	28×35	11	小　柱　穴	〃	舟底で固い	〃	〃
12	35×42	17	〃	〃	スリ鉢状	固　い	〃
13	19×23	9	〃	〃	丸底で固い	〃	〃
14	17×18	15	〃	〃	〃	〃	〃
15	22×25	18	〃	〃	平　で　固　い	〃	〃
16	20×23	12	〃	〃	丸底で固い	〃	〃
17	38×43	24	遺構外柱穴	〃	平で内に傾斜	〃	〃
18	45×13	31	柱穴ピット	〃	舟底でやや軟か	軟　弱	〃
19	40×65	13	土　　壙	〃	丸底で軟弱	〃	〃
20	25×45	13	溝　　状	〃	舟底形で軟か	〃	〃
21	32×50	8	土　　壙	〃	〃	〃	〃
22	60×88	22	溝　　状	〃	〃	〃	〃

５号住居址　（13図　表６）

遺構

本址は，１号住居址の西側に位置し，グリッドＬ－２，Ｌ－３にまたがって検出された。水田の造成時に破壊され地場下に柱穴遺構のみが残存した。ローム層に掘り込んだ柱穴の覆土がやや薄い黒褐色を呈し，表面よりやや軟弱の為容易に検出する事が出来た。平面プランは，柱穴の配置状態から推定し，長径約4.5m，短径約3.9m前後を測る規模をもつ隋円形を呈するものと思われる。主柱穴は６ケと考えられ，Ｐ１，Ｐ２，Ｐ３，Ｐ４，Ｐ５，Ｐ６である。Ｐ６は住居址の中心よりやや北寄りに位置し，３号住居址のＰ５，４号住居址のＰ10の例に適合するものと考えられる。Ｐ７は遺構の外の補助的な柱穴と思われるが，やや内側に傾斜している。Ｐ８も同様補助的な柱穴であると思われる。柱穴と柱穴との間に直径13～６cm，深さ24～４cm

の規模をもつ小穴が20個程検出されすべての穴が直に掘られている。これらは恐らく壁際の柵に用いられたくいの跡で壁の保護の為に作られた施設ではないかと思われる。ロームの表面は平らで固くなってはいるものの床面とは異るもので炉の跡などは検出されなかった。



13図　　5号住居址実測図

遺物

本址には遺物は全く出土しなかった。

表6　　5号住居址ピット一覧表

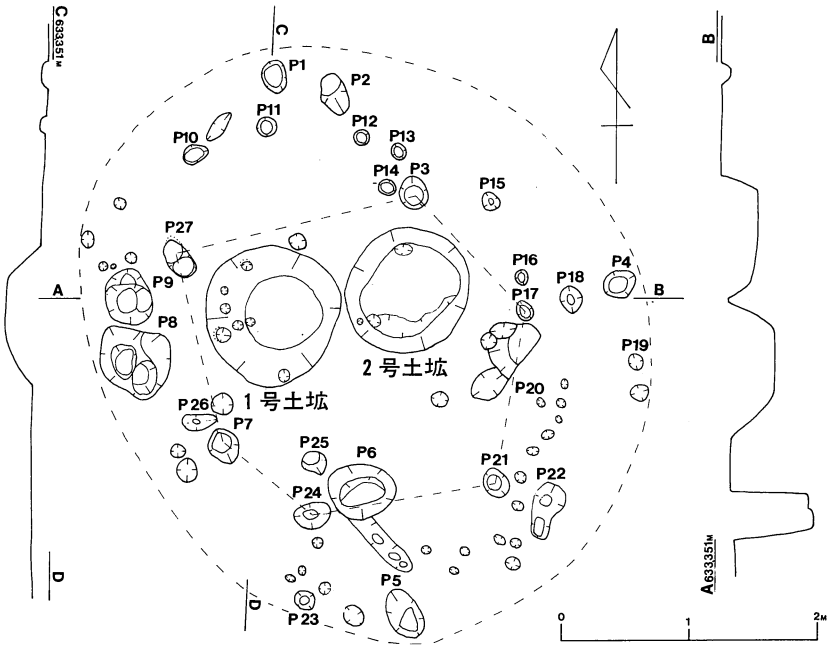
No.	径　cm	深さcm	ピットの種類	覆　土	底部の状態	壁の状態	表　面
1	18×18	53	主　柱　穴	やや黒褐色土	平　で　固　い	直で固い	固いローム層
2	22×26	40	〃	〃	〃	〃	〃
3	30×29	32	〃	〃	〃	〃	〃
4	24×24	44	〃	〃	〃	〃	〃
5	21×24	34	〃	〃	〃	〃	〃
6	15×15	5	〃	〃	〃	〃	〃
7	18×15	18	補 助 柱 穴	〃	平でやや内に傾斜	〃	〃
8	19×16	16	〃	〃	平　で　固　い	〃	〃

6号住居址　（14図　表7）

遺構

本址は，５号住居址の南側に位置し，２号住居址の北西側に隣接して検出された。

４号住居址と同様重機によって地場まで除土し，埋土及びその下層にある黒褐色土を鋤連がけで掘り下げると，ローム上に柱穴遺構が検出され，表面は北東部がやや高く，反対側の南西部が低くその比高差は22cmの傾斜になっていた。



14図　　6号住居址実測図

平面プランは，推定長径約4.8m，短経約4.3m前後の規模を有する隋円形を呈するものと思われる。主柱穴は，Ｐ１，Ｐ４，Ｐ５，Ｐ６，Ｐ８でＰ２，Ｐ９，Ｐ25は主柱の補助的なものと考えられ，Ｐ６は５号住にも見る，中に設けられた柱穴であろうと思われる。プランの内側をめぐらすＰ３，Ｐ17，Ｐ21，Ｐ24，Ｐ７，Ｐ23は規模及び配置の状態から別の建物にも考えられ時期的にはやや古いとも考えられるが，附近から出土した遺物関係は水田造成時の埋土及びかく乱から多様で，この２組の柱穴址の関係を証明出来る証拠は検出されなかった。Ｐ10～Ｐ16，Ｐ18およびＰ23は内部施設の小柱穴と考えられＰ19の様に径が15～６cm深さ３～８cm位の小穴が不規則に検出されたが，いずれの遺構に伴うか明らかでない。Ｐ20は，土壙の様に見えるが又かく乱の跡にも考えられ，Ｐ22は，溝状をなしていた。床面は検出土されなかったが，東側半分はやや固く西側になる程軟弱になり，炉は検出土されなかった。なお１号土壙，２号土壙は出土遺物から本址に関係ないので別項で述べる。

遺物，本址に伴う遺物は検出されなかったが，表面には磨耗した縄文中期の突刺文土器片１，無文の土器片１，江戸期鉄釉陶器片１が出土した。

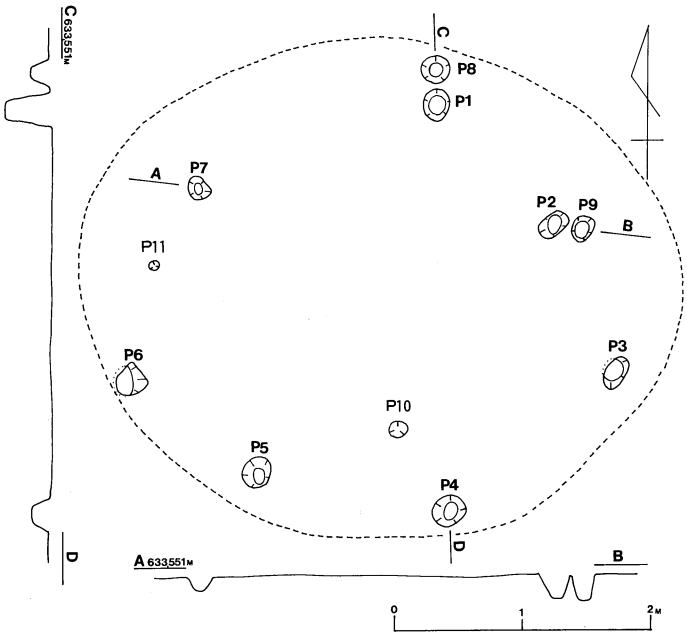
表７　　６号住居址ピット一覧表

No.	径　cm	深さcm	ピットの種類	覆　土	底部の状態	壁の状態	表面
1	19×26	55	主　柱　穴	黒褐色土	平　で　固　い	固　い	軟弱
2	22×34	75	補助的柱穴	〃	やや傾斜で固い	〃	〃
3	22×36	48	〃	〃	平　で　固　い	〃	〃
4	22×27	55	外側の柱穴	〃	〃	〃	〃
5	26×42	30	主　柱　穴	〃	〃	〃	〃
6	44×54	50	〃	〃	やや平で固い	〃	〃
7	24×29	30.5	〃	〃	平　で　固　い	〃	〃
8	55×63	62	〃	〃	平　で　固　い	やや軟か	〃
9	36×43	60	〃　２ケ	〃	〃	〃	〃
10	15×20	8	小　柱　穴	〃	丸底で固い	固　い	〃
11	15×15	4	〃	〃	〃	〃	〃
12	12×13	5	〃	〃	〃	〃	〃
13	12×14	35	〃	〃	〃	〃	〃
14	12×14	34	〃	〃	〃	〃	〃
15	14×15	4	〃	〃	〃	〃	〃
16	10×12	5	〃	〃	〃	〃	〃
17	12×17	20	主　柱　穴	〃	〃	〃	〃
18	17×22	7	〃	〃	〃	〃	〃
19	12×14	6	〃	〃	〃	〃	〃
20	35×72	8	ピットの集り	〃	丸底で軟か	軟　弱	〃
21	18×25	14	補助的小柱穴	〃	丸底で固い	固　い	〃
22	25×43	8	溝　　状	〃	舟底で固い	〃	〃
23	14×18	10	小　柱　穴	〃	丸底で固い	〃	〃
24	20×29	8	〃	〃	〃	〃	〃
25	15×20	13	〃	〃	〃	〃	〃
26	13×28	8	〃	〃	舟底で軟か	軟　か	〃
27	19×33	25	〃　２ケ	〃	丸底で固い	固　い	〃

７号住居址　（15図　表８）

遺構，本址は，６号住居址の北側に位置し，グリッドＬ－５，Ｍ－５にまたがって検出された。５号住居址と同様地場下に遺構が検出されたが，５号住居址より高所に位置したため柱穴等から見てかなり削り取られたものである。平面プランは，推定で長径約4.7m，短径約3.9m前後の規模で隋円形を呈するものと思われる。主柱穴はＰ１～Ｐ７で，Ｐ８，Ｐ９は補助的なものか，又は立替時のもののように考えられる。しかし，Ｐ１，Ｐ８及びＰ６は，やや内側に

傾斜しているところを見ると主柱穴からはづれる事も考慮しなければならない。5号住居址に見られる中央部の柱，柱の中間にある小穴も検出されなかったのも前述した如く住居址が高所に構築されたため，その高い分だけ開田時に削り取られたものと考えられる。床面は，検出されなかったもののロームの表面は比較的固く，炉は検出されなかった。



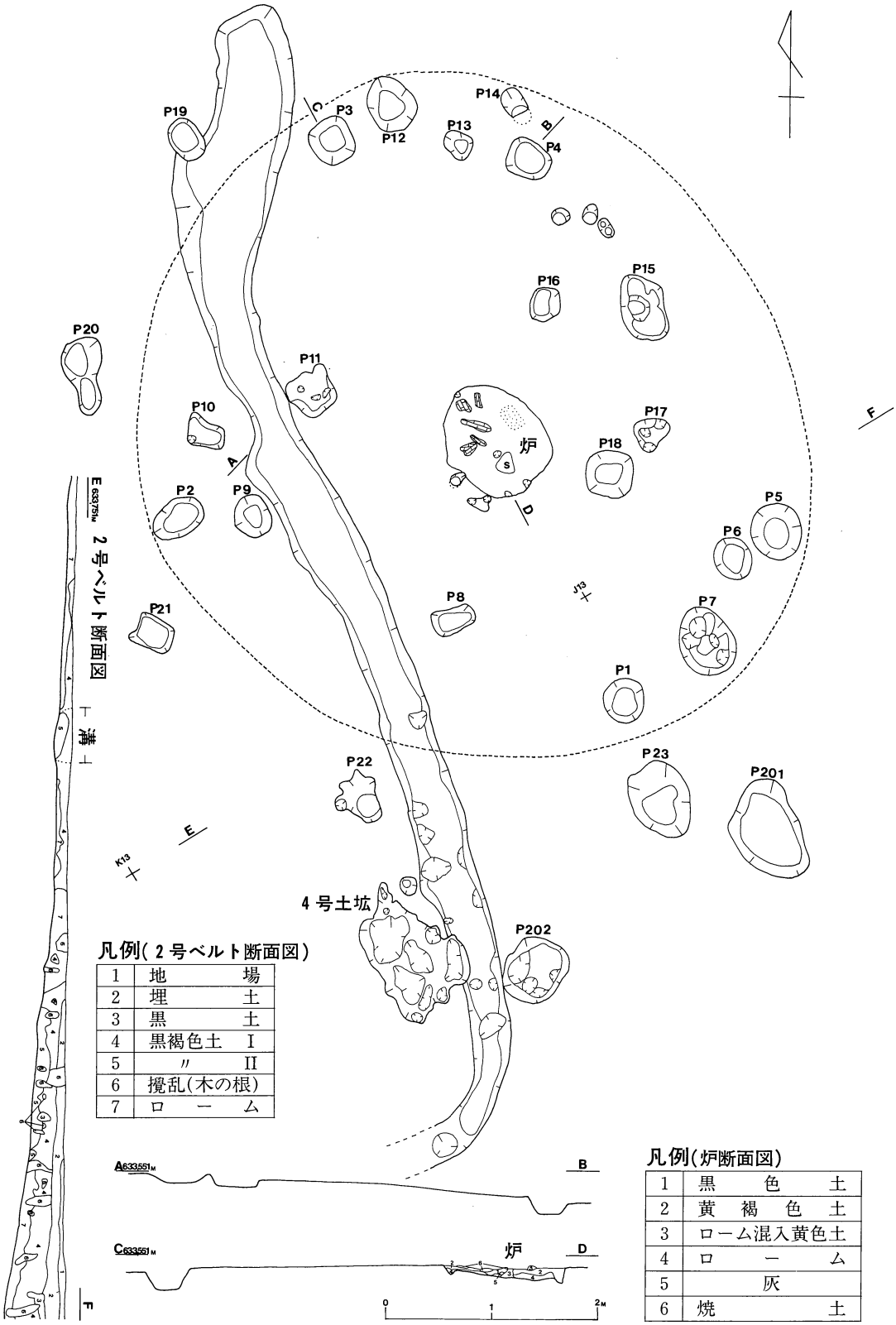
15図　　7号住居址実測図

遺物

本址には遺物は全く検出されなかった。

表8　　7号住居址ピット一覧表

No.	径　cm	深さcm	ピットの種類	覆　土	底部の状態	壁の状態	表　面
1	23×18	36	主　柱　穴	黒褐色土	平で固く内にやや傾く	固　い	固いローム層
2	22×18	19	〃	〃	不　明	〃	〃
3	17×20	26	〃	〃	〃	〃	〃
4	23×24	13	〃	〃	平で固い	〃	〃
5	21×23	41	〃	〃	〃	〃	〃
6	23×20	15	〃	〃	平で固くやや内に傾く	〃	〃
7	15×14	9	〃	〃	平	〃	〃
8	21×19	16	〃	〃	平で固くやや内に傾く	〃	〃
9	18×18	21	〃	〃	〃	〃	〃
10	13×15	7	小　柱　穴	〃	丸　底	〃	〃
11	10×10	5	〃	〃	〃	〃	〃



16図　8号住居址実測図

縄文中期の遺構と遺物

8号住居址　(16図　表9)

遺構，本址は舌状台地の中央やや北寄りに位置し，グリッドI12，13，14，J12，13，14,J12，13，14にまたがって検出された。重機により地場土まで除土し，黒褐色土をローム層まで掘り下げていくと炉がかろうじて少し残る程度で壁および床面まで開田によって削り取られていた。表面は傾斜になっていて西側が高く，東側が低くその比高差は36cmである。平面プランは，推定するに長径約6.7m，短径約6.1m前後の規模をもつ隋円形の竪穴住居址と思われる。主柱穴は，P 1～P 5と考えられるがかく乱によって一部検出されなかった事も考えられる。P 7，P 9，P 10，P 12，P 14は補助的柱穴とも思われるが確かなものとは思われない。P 8，P 11，P 16，P 17，P 18は内部施設のものと考えられる。炉は，上部を削り取られてはいるが，住居

表9　　8号住居址ピット一覧表

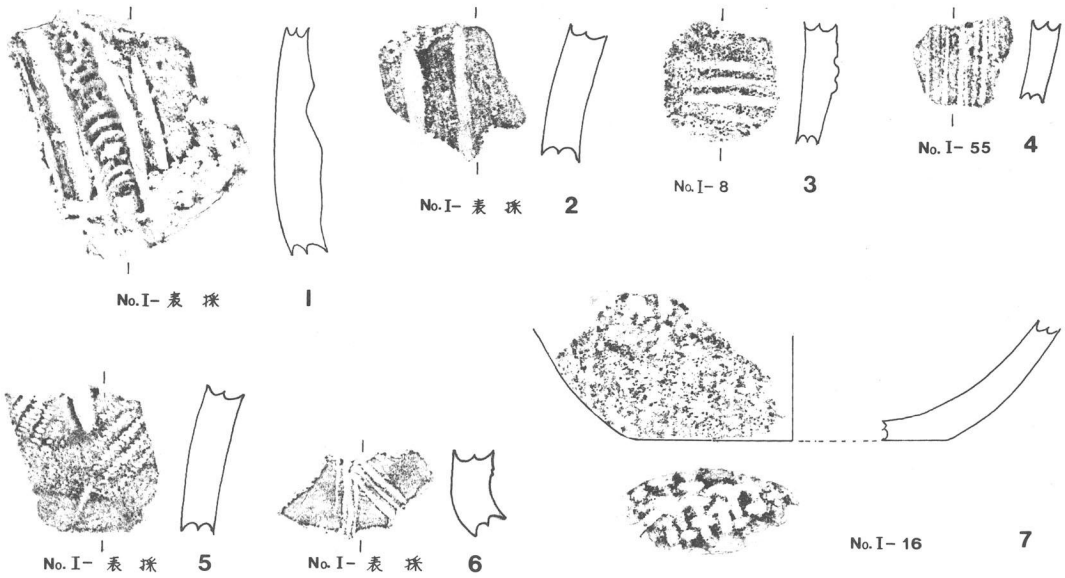
No.	径　cm	深さcm	ピットの種類	覆　土	底部の状態	壁の状態	表面
1	39×42	23	主柱穴	黒褐色土	丸底で固い	固い	軟弱
2	35×52	10	〃	〃	〃	〃	〃
3	40×42	17		〃	〃	〃	〃
4	33×41	16		〃	〃	〃	〃
5	47×50	25		〃	〃	〃	〃
6	37×41	14	柱穴(補助)	〃	〃	〃	〃
7	52×67	14	柱穴？	〃	木の根が入っている	軟か	〃
8	23×42	13	柱穴	〃	平で固い	固い	〃
9	35×40	10	補助柱穴	〃	丸底で固い	〃	〃
10	21×35	9	柱穴	〃	平で固い	〃	〃
11	41×50	12	〃	〃	平で木の根あり	〃	〃
12	42×55	13	〃	〃	丸底で軟か	軟か	〃
13	21×28	14	〃	〃	〃	固い	〃
14	20×21	31	〃	〃	平で固く外に傾く	〃	〃
15	41×68	16	〃	〃	丸底でやや軟か	軟弱	〃
16	30×32	10	〃	〃	丸底で固い	固い	〃
17	28×38	10	〃	〃	木の根入不明確	軟弱	〃
18	46×48	13	〃	〃	丸底で軟か	〃	〃
19	38×41	19	住居外の柱	〃	平で固い	固い	〃
20	42×72	15	〃	〃	丸底で固い	〃	〃
21	28×36	10	〃	〃	平で固い	〃	〃
22	45×49	39	〃	〃	木の根入不明確	軟弱	〃
23	60×73	28	〃	〃	丸底で固い	〃	〃

址のほぼ中央に位置し，その平面プランは長径114cm，短径92cmを測り，深さは14cmのみである。上部に半割れの20×16×15cm大の焼けた花崗岩が残存していたが恐らく石囲み炉ではなかったかと思われる。覆土はかく乱されていないと見え木炭の焼け残り５～６個程残り，一部に焼土も残存した。覆土は６層からなっていて，一点ではあるが上部から縄文中期と思われる土器片が出土した。Ｐ19，Ｐ20，Ｐ21，Ｐ22，Ｐ23は住居址外に設けられた柱穴で住居址の平面プランに平行に2.3m～2.7mの間隔で一列に湾曲に並んでいる。

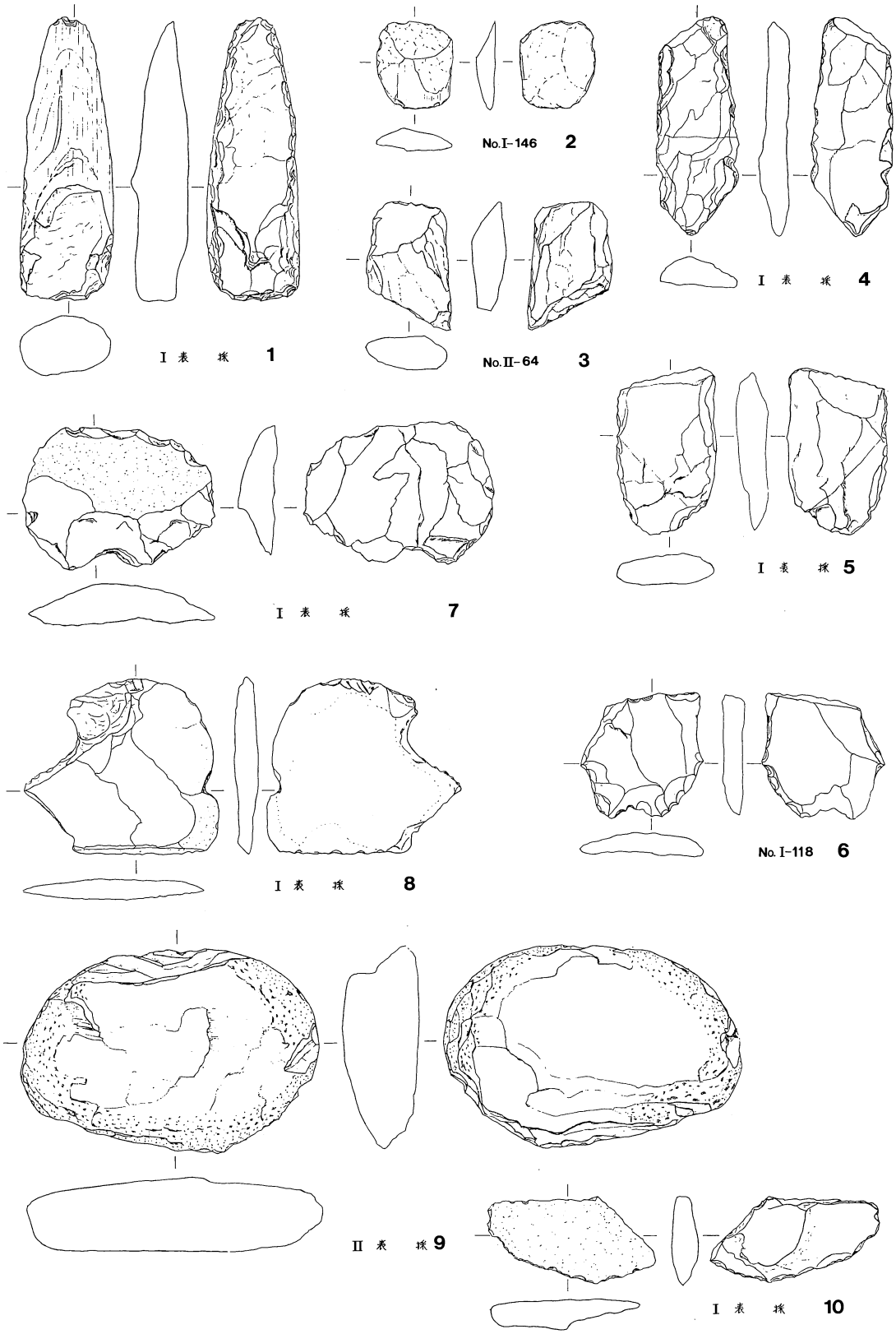
遺物，本址に伴う遺物は前述したが，炉の中から出土した土器は小片で無文であるが磨耗しているので確認は困難であるが胎土から見て縄文中期に属するものと思われる。

遺構外遺物　（17図　18図　19図）

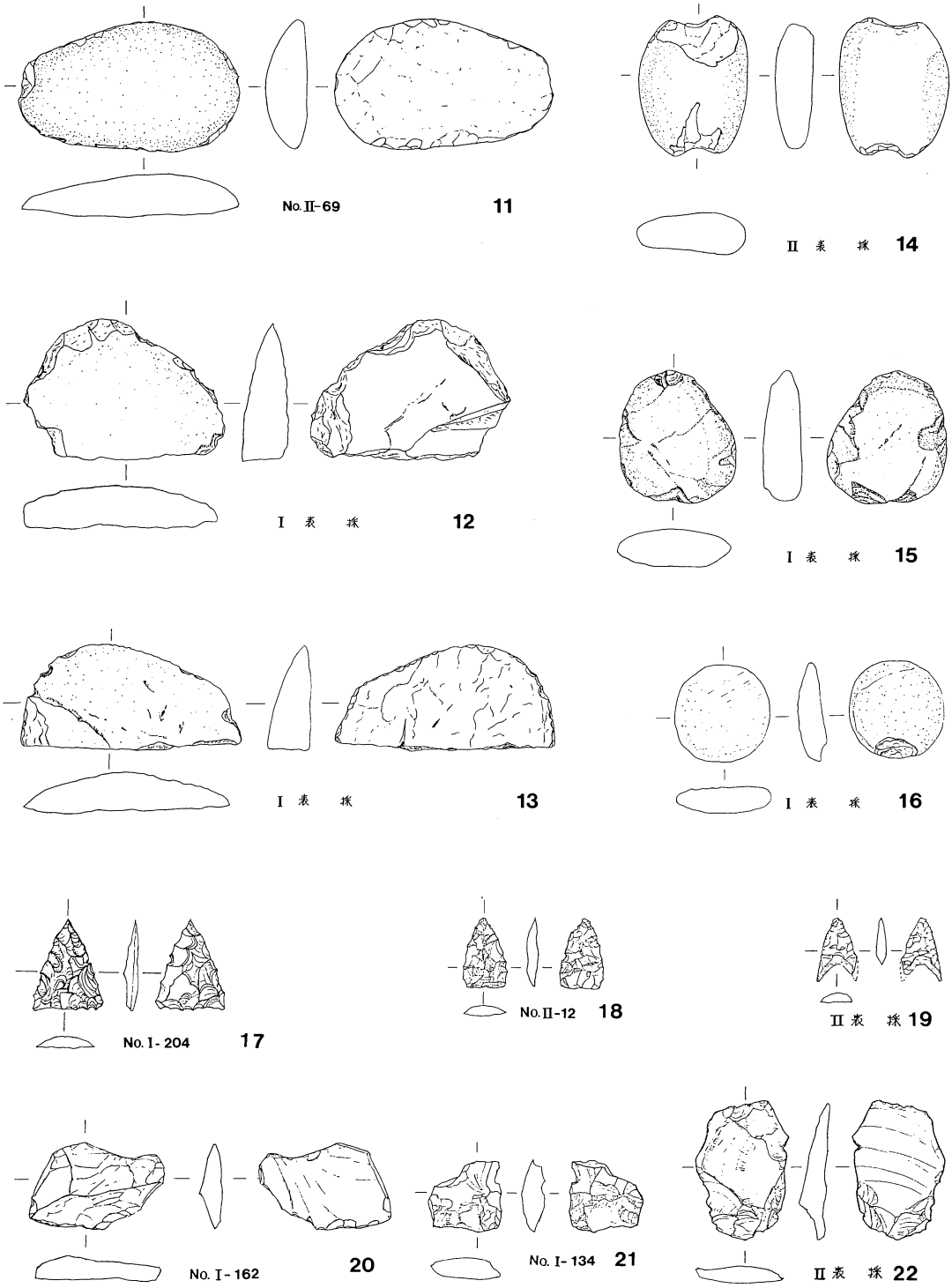
本遺跡には今回の調査で縄文中期の遺構で住居址と確認されたものは１軒で遺物も殆ど検出されなかったのは開田時の土の移動で高所より低い所に埋められたものであると考えられる。表採及びグリッドから出土した土器は34点で中期中葉のものと思われ，主として舌状台地の最南端部及び西側の低い埋土したところ又は黒褐色土層で，地場土の中からは全般に出土した。



17図　　遺構外出土土器拓影（1：2）



18図　　遺構外出土石器実測図（1：3）



19図　　遺構外出土石器実測図（11～16 1：3，17～22 1：2）

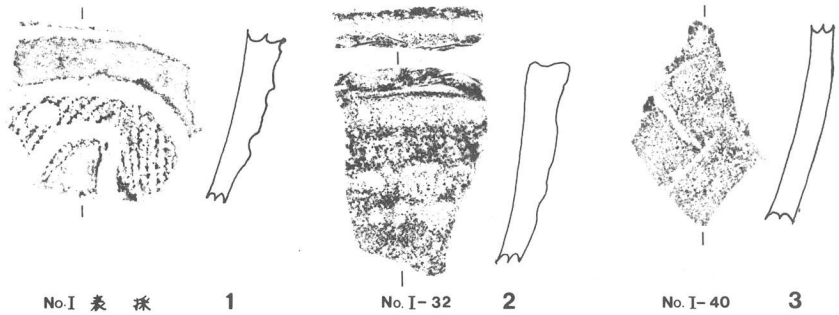
1は，やゝ縦位に湾曲した隆帯に爪形文を施してあり器厚は1㎝長石を含み焼成は良好である。2は，縦位に隆帯を施すもので器厚は1㎝長石雲母を含み焼成は良好である。3は，横位に竹管による條痕を施し器厚は0.8㎝長石雲母を含み磨耗している。4は，櫛状施文具による沈線文を施す器厚は0.7㎝小量の細い長石を含む。5は竹管による深い沈線文と斜縄文を施す器厚は1㎝長石を含み焼成は良好である。6は，篦描沈線文を施す器厚は1.1㎝細い長石を含み焼成は良好。7は，粗製の甕形土器の底部で無文，底は網代底。

石器は全部で75点出土したがその中で中期に伴出されるものの中から主なものを抽出し記述する事にする。1～6は打製石斧，7.8は胴部に抉入の横刃形石器，9は敲打器，10～13は横刃形石器，14～16は石錘，17～19は石鏃，20,21は横刃形の石匙，22はスクレーパー。

縄文後期の遺物　(20図)

遺物，今回の調査で後期の土器は3点出土した。出土地点は舌状台地の南端部で埋土になっている低い所に当り出土土器の時代は，縄文後期前半の掘の内式に比定されるものと思われる。

1は,随円形に施された竹管による沈線文と縄文の擦り削文が施されている,器厚は0.9㎝長石を含み焼成は良好。2は，鉢の口縁部で磨耗して器表は明らかでないが横位の條痕が施されている器厚は1㎝長石を含み焼成は不良である。3は，無文帯に沈線が縦横に施され器厚は0.7㎝細い長石を含み焼成は不良である。

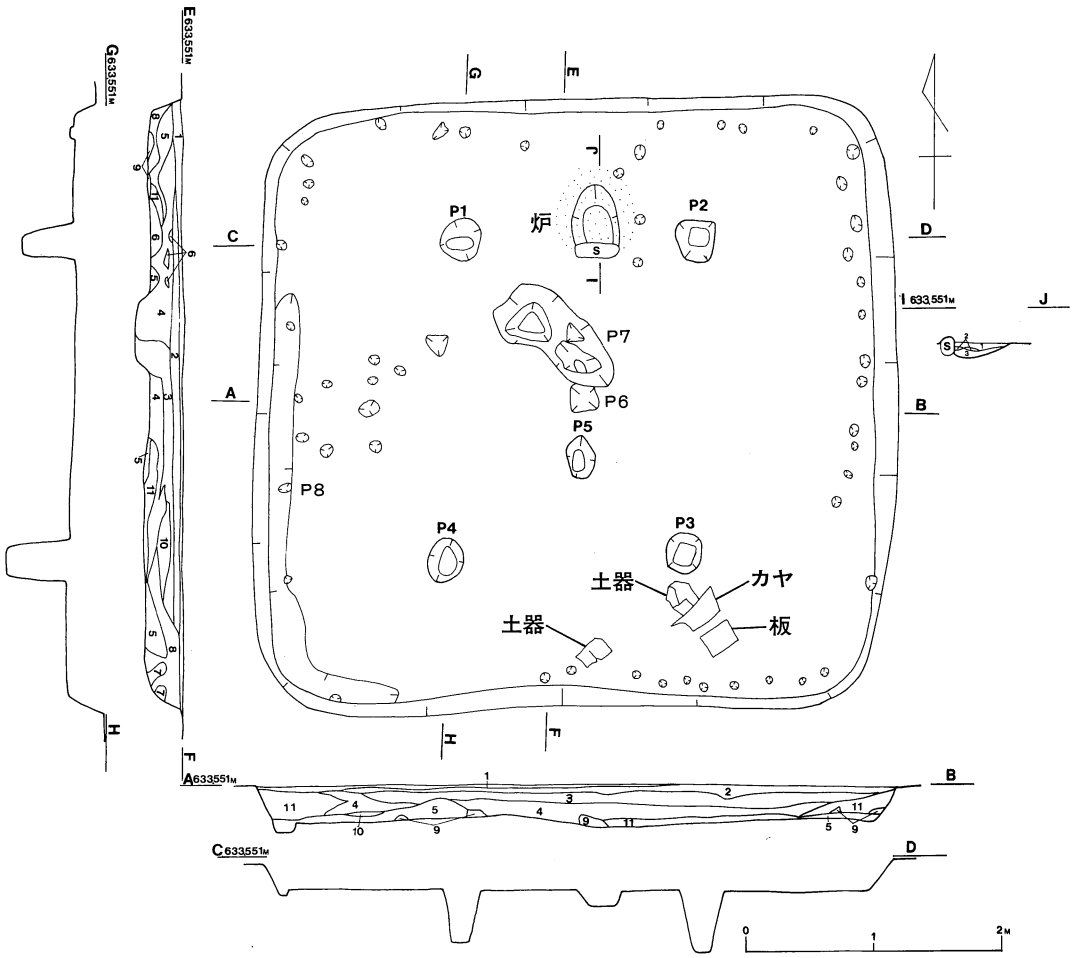


20図　　遺構外出土土器拓影　(1：2)

弥生時代の遺構と遺物

弥生後期の遺構と遺物

1号住居址　（21　22　23　24図，表10）



凡　例（南北、東西ベルト断面図）

1	耕　　土	5	赤褐色土Ⅱ(焼土混り)	9	木　　炭
2	地場混り黒褐色土	6	赤褐色土ブロック混り	10	木炭混り黒色土
3	黒　褐　色　土	7	黒　　土	11	木炭混り赤褐色土
4	赤褐色土　Ⅰ	8	黒色土混り赤褐色土		

凡例(炉断面図)

1	炭混り黒褐色土
2	焼　　土
3	ロ　ー　ム

21図　　1号住居址実測図

遺構，本址は，舌状台地の中央最南端に位置し，グリッドＪ－１，Ｊ－２，Ｋ－１，Ｋ－２にまたがり地場下に検出され，ローム層を掘り込んで構築された竪穴式住居址である。平面プランは，東西５ｍ，南北4.75mを測る隅丸方形を呈する。火災で焼け落ちた為に覆土中に木炭焼土が多量に残存していた。遺物が比較的に少ない事から不時の火災に遭ったとも思えない点もある。火災時に良く焼け炭化物の少ないのは住居の南側半分で壁際はプランの確認すら困難な位覆土まで焼土化し，床面上にはカヤや板の炭化物が圧縮された形で広く分布している点では火災時に土を投げ込み消火に当ったものと考えられる。覆土は11層からなり復雑している。壁高は北側で19cm～24cm，南側は25cm～32cm，東側中央部で30cm，西側中央部で深い所で40cmを測る。壁は直に立っているが東側がややゆるやかに外湾している。特に南側の壁は火力が強かった為かロームが赤く焼けていた。

主軸の方位はNを示す。主柱穴は，４個でＰ１，Ｐ２，Ｐ３，Ｐ４でローム層に掘り込んである。Ｐ１は30×30cm深さ41cmの規模で上部はやゝ円形，中間より底までは隋円形を呈している，底は固くしまっていた。Ｐ２は35×35cm深さ47cmの規模でやゝ四角形を呈し底部まで直に掘られている。底はやゝ四角形で平らで固くなっていた。Ｐ３は30×28cm深さ56cmの規模で上部はやゝ円形を呈し，底は四角ばって平らで固く壁も固くしまっていた。覆土は簿黒褐色で細かい木炭が混入されていた。Ｐ４は26×35cm深さ49cmの規模でやゝ隋円形を呈し直に掘り込んである。覆土は簿い黒褐色をなし木炭が混入されていた。底は平らで固くほぼ隋円形をなし壁は固くしまっていた。Ｐ５，Ｐ６は補助的柱穴と考えられ，西側のＰ８は周溝でその規模は長さ約４ｍ，巾は26cm～14cmで深さは3.5cm～８cmを測る。

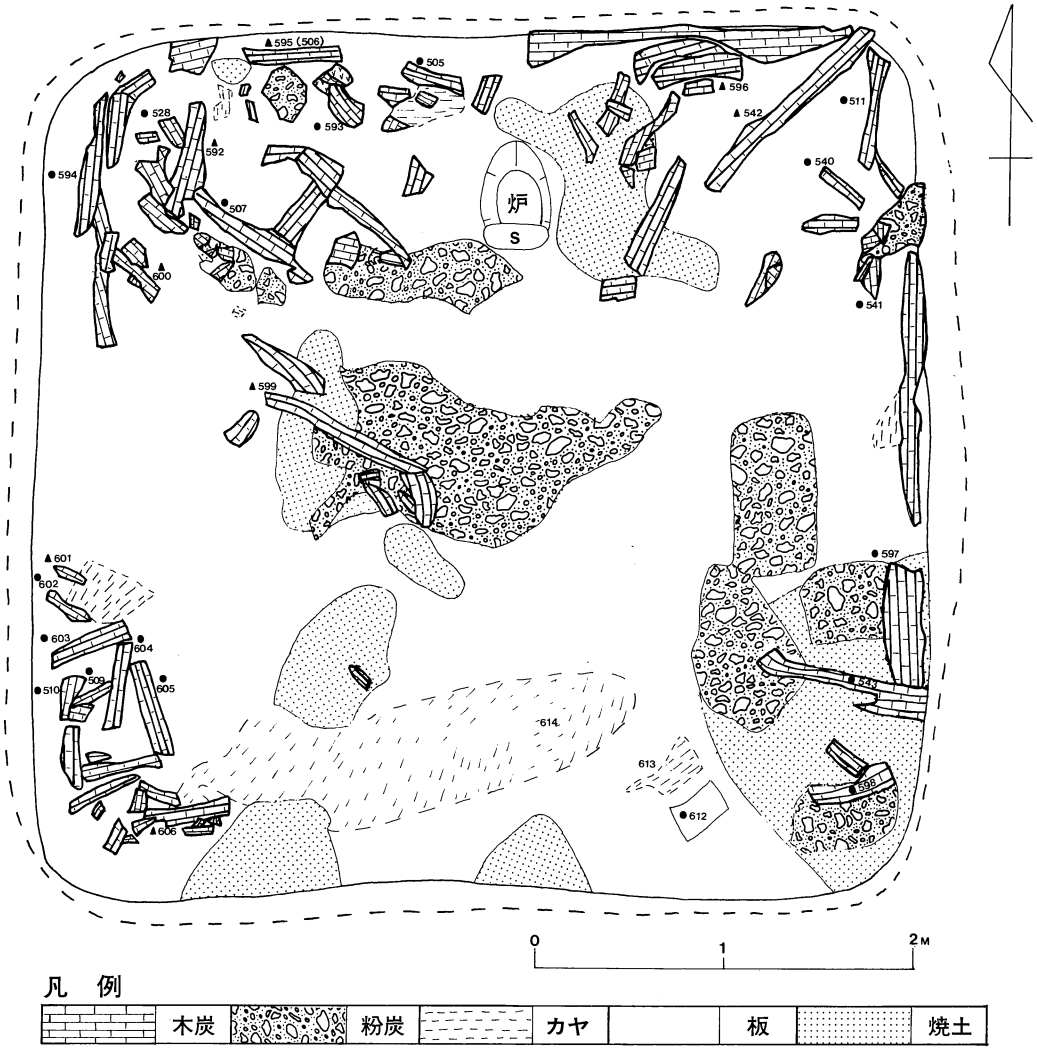
床面は，木炭と焼土でおおわれていた。北側がやゝ高く，南側が低くなっていて，北側半分と西側は固いダタキになっていたが，Ｐ３附近から南東の壁にかけ軟弱気味になっている。壁際には径５～12cm，深さ５～14cmの小穴47個が不規則ながら20～30cm間隔で検出され，覆土に

表10　　１号住居址ピット一覧表

No.	径　　cm	深さcm	ピット・種類	覆　　土	底の状態	壁の状態	表　面
1	30×30	41	主　柱　穴	黒褐色土	四角平で固い	固い	固　い
2	35×35	47	〃	〃	〃	〃	〃
3	30×28	56	〃	〃	円形平で固い	〃	〃
4	26×35	49	〃	〃	隋円平で固い	〃	
5	22×30	8	補助柱穴	〃	すり鉢状固い	〃	〃
6	25×25	11	〃	〃	〃	〃	〃
7	48×107	23	弥生中期土坑	〃	丸　底　固　い	〃	〃
8	14～26×400	3.5~8	周　　溝	〃	〃	〃	〃
炉	38×57	14	炉	焼土あり	〃	〃	〃

は木炭焼土が混入していた。この施設は壁の保護柵ではないかと思われる。炉は中央北寄りに位置し38×57cm深さ14cmの規模で，南側に33×11×14cmの表面の焼けた花崗岩が据えてあり，覆土は３層で中間に２～４cmの厚みに焼土が検出された。埋甕もないところを見ると炉は石囲み炉ではないだろうか。炉の東側に径８cm前後の深さ８cm前後の小穴は内部施設で木炭が充満していた。西側中央にもこれと同じ小穴が検出されたがこれらも内部施設のものと思われる。

残存炭化物　（22，23図　　表11）



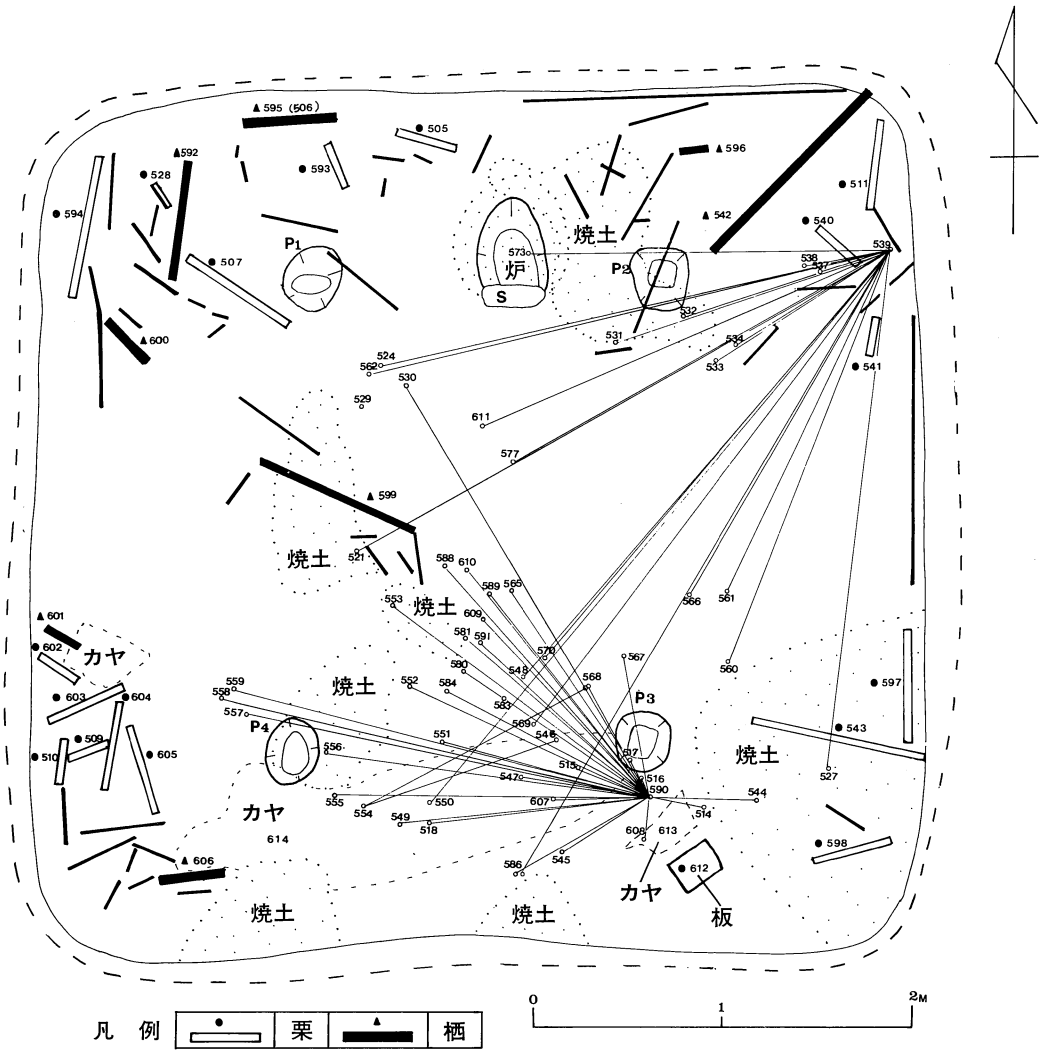
22図　　１号住居址木炭の分布図

残存した木炭の数は大小合せて７５点を数え，その内比較的大きく木質のわかるもの26点を抽出し分類した，この総体積は0.73立方米で全部含めるとかなりの数になる。木炭は上からの圧力で多少押し潰されているので原形のものとは係数的には若干差がある。中には焼土混りとなって原形を把握出来ないものもある。木炭の木質については中川村美里の50有余年の炭焼きの経験をもつ工藤喜広氏（80才）に依頼して分類し，その結果26点中栗の木18点（69％）楢８点（31％）であることが明らかになった。

木炭は北側に多く残存し，東側は壁際に南西ではコーナーに多く残存し，焼け落ちた用材が大

表11　主な木炭の大きさと種類別一覧表

No.	台帳番号	木　質	木炭の横径cm 太　～　細	縦径cm	長さcm	木炭の体積cm³	備　考
1	505	栗	10 ～ 8	5	35	225	床　面
2	507	〃	14 ～ 9	2	64	3.536	〃
3	509	〃	5 ～ 4	3	27	405	〃
4	510	〃	8 ～ 5	5	15	525	〃
5	511	〃	12 ～ 9	6	60	3.960	〃
6	528	〃	14 ～ 8	6	20	1.320	〃
7	540	〃	7 ～ 6	2	28	326	〃
8	541	〃	15 ～ 10	8	20	2.000	〃
9	542	楢	13 ～ 10	2	123	2.824	〃
10	543	栗	17 ～ 8	9	150	18.900	〃
11	592	楢	13 ～ 7	5	62	2.170	〃
12	593	栗	14 ～ 9	3	26	936	〃
13	594	〃	10 ～ 7	6	78	4.212	〃
14	595	楢	8 ～ 7	9	54	3.888	〃
15	596	〃	15 ～ 13	2	50	1.400	〃
16	597	栗	20 ～ 17	7	65	8.645	〃
17	598	〃	15 ～ 11	8	46	4.992	〃
18	599	楢	9 ～ 7	3	45	1.080	〃
19	600	〃	9 ～ 6	2	30	480	〃
20	601	〃	5 ～ 4	5	20	500	〃
21	602	栗	8 ～ 5	7	28	1.372	〃
22	603	〃	10 ～ 8	8	45	3.240	〃
23	604	〃	7 ～ 7	4	48	1.344	〃
24	605	〃	12 ～ 9	4	53	2.420	〃
25	606	楢	9 ～ 8	10	47	4.230	〃
26	612	栗	巾　18	2	27	972	板〃
27	613	カヤ	巾　20	1	30		〃
28	614	〃		5			〃
						計　73.917	



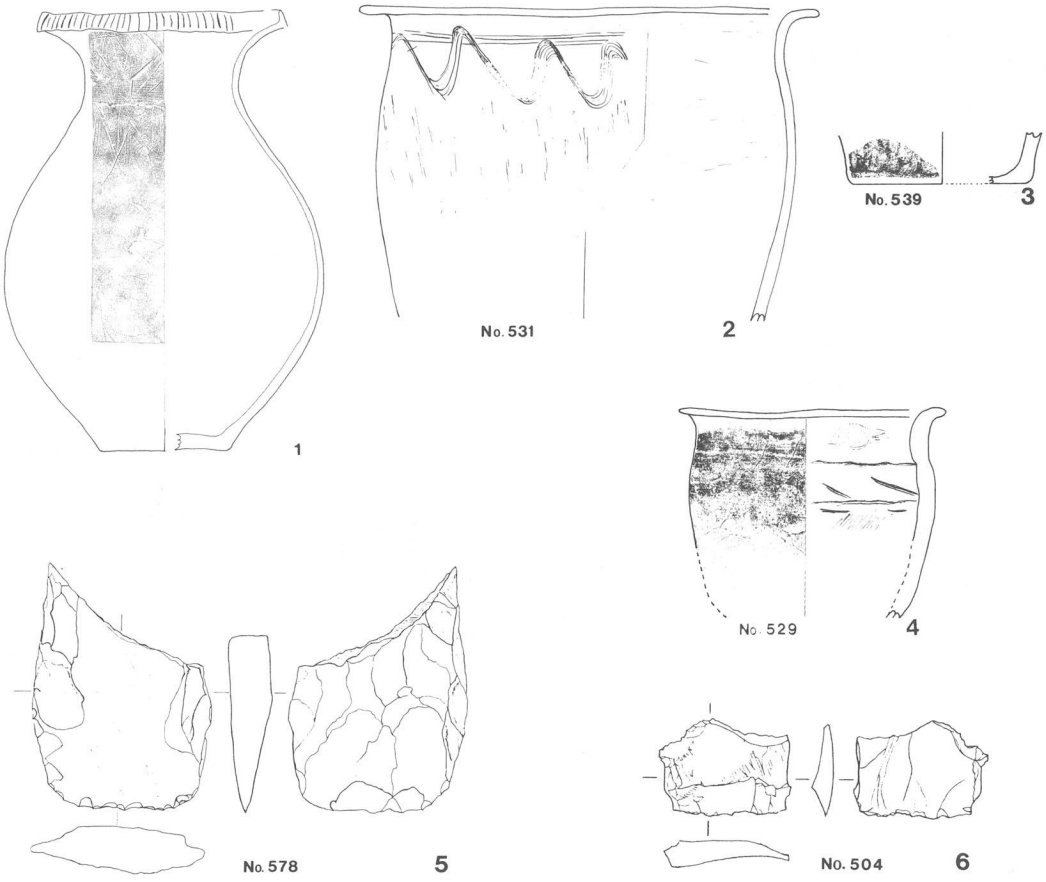
23図　残存木炭の倒れた方向と種別分布及び土器の分布と結合状態図

半中心部に向って倒れているのが注目される。中心部は木炭と焼土が混ったものが多く15cm前後推積しているところもある。カヤの炭化物は全般的に広がっていたが特に床面上の南側には250×55cmの広さに厚さ５～１cm位押し潰した様に１本１本が南北の方向にきれいにそろえ様に重って存在した。このカヤは壁や屋根にあったものではなく，もともと床面にあったものが消火のための土によって埋められたものと考えるのが妥当と思える。入口にも当る南側は最も火の強かったところに当るので，焼け残りのカヤは何に用いられたのか，火消しの方法にも論議されると同時に，住居内に土器が少く４個体でも満足でない壊れたものが散っている状態を見る時，火災の原因は，失火か，放火か，結論を急がず課題にしておきたい。

遺物　（23・24図）

土器，本址から出土した土器は少なく点数で80点，復原されたもの３個体であるが満足出来るものではなく欠けているもの，一部分しかなかったものである。土器の分類から見ると住居内には火災時満足のものはなに一つなく器形にして４個体の種類の土器片が南側半分から東側半分の床面上に散在した。これから土器片は火災以前から在つたのか，火災時に持ち出した残物か，又は火災消火のために土と一緒に投込んだか，いずれかである。

１は，壺形土器で器高は3.95cm，口縁の径21.5cm，胴巾28.2cm，器厚は7mmで頭部に横位に擂目の沈線帯を施し，その上下に擂描文を大きく波状に描いてある。口縁には縦位に沈線が施されている。焼成は良好で下半分の器面にはヘラ調整痕が残る。本器に属する土器片は34片で一部強い打撃に合ったためか小片になり結合されたのは15片である。２３図の結合表は底部No.590を



24図　１号住居址出土土器及び石器実測図（1.1：6　2～5.1：3　6.1：2）

基部として線引した。2は，深鉢型土器で下半部は欠損している。頸部下に櫛措文を波状に施し器表にはヘラ調整痕が縦位に残る又同器に属する土器片は16片で衝撃等によって破損がひどく剝がれたものが多い。3は2の底部と思われるが復原までには至らなかった。口径17.8cm器厚5mm焼成は良好。23図の線引きは底部No.539を基部として結んだ。4は，小形壺型土器で口径10.4cm器厚6mmの無文の粗製土器である。4点の内のもう1点は本文にはのせないが深鉢型土器と思われる口縁部3片で器厚は5mm，長石雲母を含み器表はやゝざらざらしている。

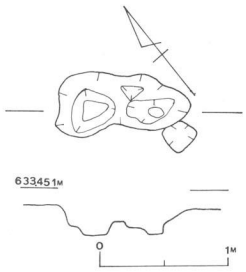
出土したものは以上4種にとどまったが，本址の時代決定は1，2，3の遺物に代表される弥生後期中島式に比定されよう。

石器，本址に出土した石器は，2点のみで，5は打製石斧で粗材は縁泥変岩を用い，一面は自然面を利用してある。先は簿手になり横の部分は包丁型の如く片方が厚く反対側が簿手になっている。6はチャートを粗材とした横辺の石匙で大半が欠損している。

1号住居址内土壙（P 7）　（25・26図）

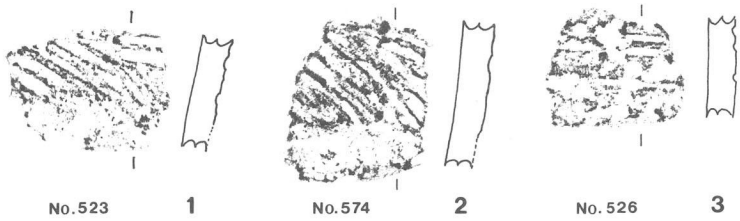
遺構，本遺構は，1号住居址の中央やや北寄りの床面に検出された長径105cm，短径52cm，深さ23～21cmの規模を有する細長の土壙である。壁は固く南西側の壁は急傾斜になり，反対側はやゝゆるやかになっている。覆土は黒褐色土で埋っており土器3片が北側の覆土中より出土した。

土器，本址の出土遺物は土器3片で，1，2は條痕を施した簿手の土器で器厚は7mm長石を含み焼成は良好である。3は，磨耗した焼成不良の土器で横位に條痕が施され器厚は6mmである。



25図　1号住居址内土坑実測図

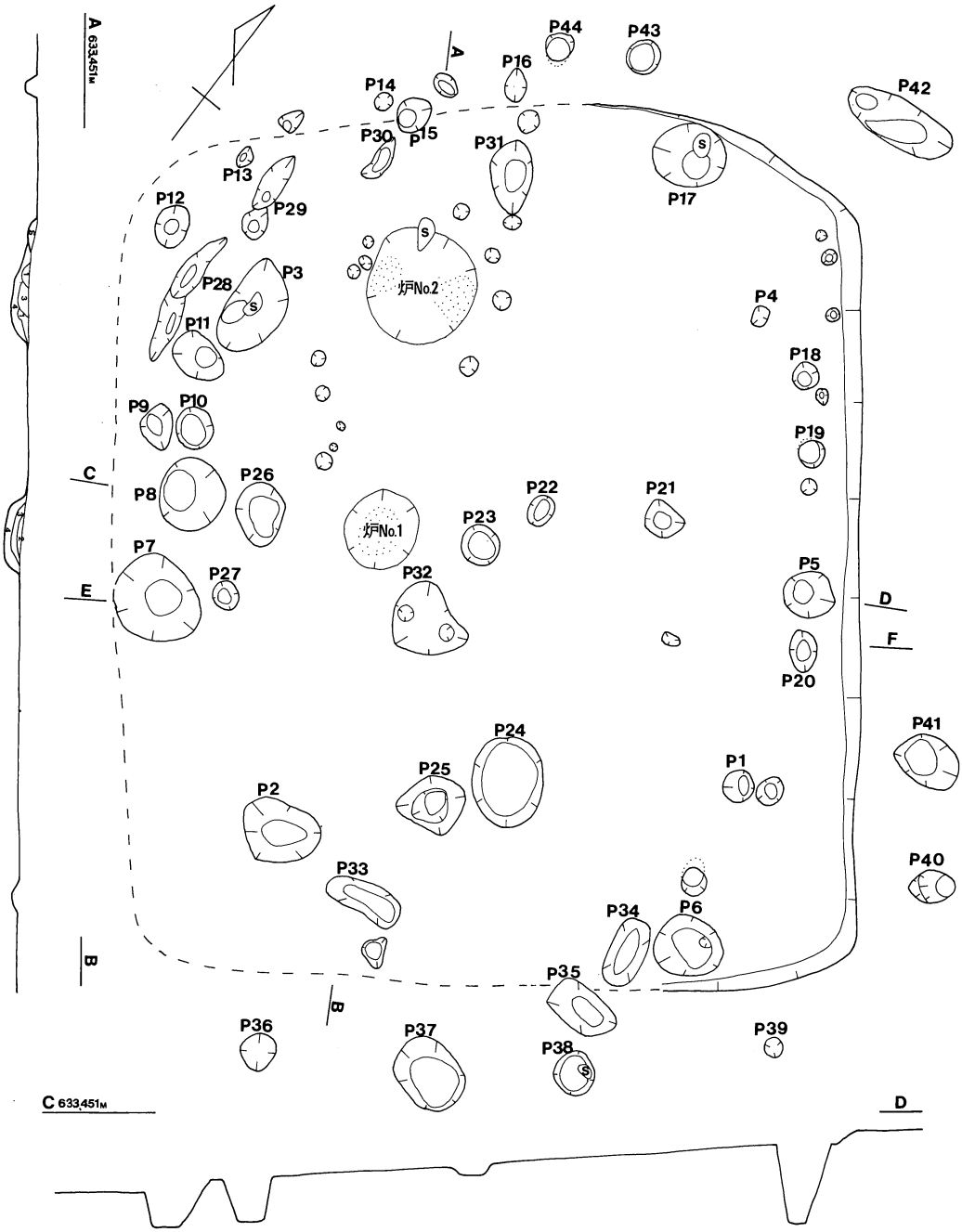
本址の時代決定は1，2，より弥生中期初頭の庄之畑式に比定できるものと思われ，附近の原田遺跡にも出土している。

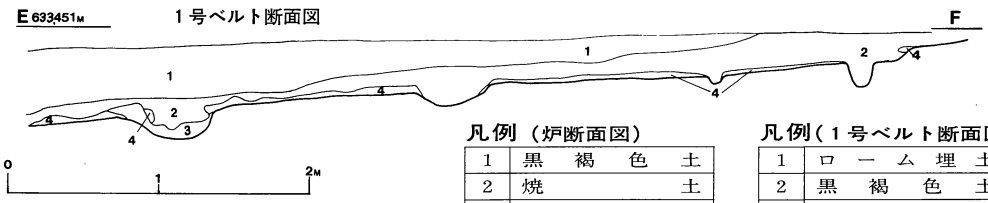


26図　1号住居址内土坑出土土器拓影（1：2）

2号住居址（27，28図，表12）

遺構





凡例（炉断面図）

1	黒褐色土
2	焼土
3	黄赤褐色土
4	黄色土

凡例（1号ベルト断面図）

1	ローム埋土
2	黒褐色土
3	ロームへ黒褐色土混り
4	ローム

27図　2号住居址実測図

本址は，４号住居址及び６号住居址の間に位置し，グリッドＭ２，Ｍ３，Ｎ２，Ｎ３にまたがって検出された。地形的には４号６号住居址と同じ立地条件のやや傾斜面で，東側と西側との比高差は約40cm前後である。埋土及び黒褐色土を除土すると，ローム上に多数のピットを検出し，更に，４号掘立建物址との腹合によって調査は一層復雑化した。

平面プランは，長径約6.2m，短径約5.4m前後の規模を呈する長方形の竪穴式住居であると推定される。主軸の方位は，W40°－Sである。壁は東側に僅か検出され，壁高は８～14cmでやや外に傾斜していた。主柱穴は，Ｐ１，Ｐ２，Ｐ３，Ｐ４と思われる。Ｐ５～Ｐ20及びＰ－30，Ｐ31，Ｐ34，Ｐ35は壁の内側にあって恐らく壁の保護的施設と考えられる。Ｐ21～Ｐ27及びＰ33は，内部施設の柱穴と見られる。Ｐ32は，小さな土壙と考えられ，Ｐ28，Ｐ29は溝状の舟底になっているが周溝の一部かも知れない。Ｐ36～Ｐ44までは住居外の柱穴でタルキ又は柵の施設の跡とも考えられる。

床面は北側約半分が固いタタキになっていて良好で僅か西に傾斜気味になっているが，西側約半分は床面は検出されず軟弱なローム層であった。従って柱穴の表面も軟弱で掘り過ぎの点も見受けられた。

炉は，２ケ所に検出されたが，本址に伴う炉は１号炉で中央やや西寄りに位置し，57×50cm深さ14cmのほぼ円形の地床炉で覆土は３層になっており上部に焼土が固くなって約４cm程堆積していた。２号炉は，１号炉の北側に位置し，上部がかく乱され上部に焼土が残り，北側には24×12×５cmの花崗岩が検出されたがこれは恐らく石囲み炉と考えられる。２号炉は本址に於ける位置から適当とは考えられないので，本址の立替，改造以前のものではないかと思われる。

表12　　２号住居址ピット一覧表

No.	径　cm	深さcm	ピットの種類	覆　土	底部の状態	壁の状態	表　面
1	22×25	12	主　柱　穴	黒褐色土	平で直立	固　い	固　い
2	45×55	25	〃	〃	丸底固い	やや軟弱	軟　弱
3	39×73	26	〃	〃	〃	〃	固　い
4	15×12	17	〃	〃　石あり	平で固い	固　い	〃
5	32×38	53	壁側の柱穴	〃	〃	〃	〃
6	47×50	29	〃	〃	丸底やや軟弱	軟　弱	〃
7	58×60	20	〃	〃	平で固い	〃	軟　弱
8	45×54	26	〃	〃	平で軟弱	〃	〃
9	23×34	30	〃	〃	〃	〃	〃
10	28×30	22	〃	〃	平で固い	固　い	〃
11	28×40	26	〃	〃	丸底軟弱	軟　弱	〃
12	24×32	16	〃	〃	丸底やや軟弱	〃	〃

No.	径　cm	深さcm	ピットの種類	覆　土	底部の状態	壁の状態	表　面
13	13×17	20	壁側の柱穴	黒褐色土	丸底やや軟弱	軟　弱	軟　弱
14	13×14	20	〃	〃	平で固い	固　い	やや軟弱
15	25×28	38	〃	〃	〃	〃	〃
16	14×26	41	〃	〃	〃	〃	〃
17	45×53	20	〃	〃	〃	軟　弱	固　い
18	18×19	24	〃	〃	〃	固　い	〃
19	18×20	15	〃	〃	〃	〃	〃
20	20×30	19	〃	〃	〃	〃	〃
21	24×27	13	内部施設の柱穴	〃	丸底固い	〃	〃
22	17×23	9	〃	〃	〃	〃	〃
23	27×30	7	〃	〃	〃	〃	〃
24	50×65	26	〃	〃	丸底軟弱	軟　弱	〃
25	48×40	17	〃	〃	〃	〃	〃
26	35×46	30	〃	〃	平で固い	〃	やや軟か
27	18×21	13	〃	〃	〃	〃	〃
28	16×103	7	溝　　状	〃	舟底軟弱	〃	〃
29	19×65	25	〃	〃	〃	〃	〃
30	13×35	21	壁側の柱穴	〃	丸底軟弱	〃	〃
31	32×54	18	〃	〃	〃	やや軟弱	〃
32	53×55	11	小　土　壙	〃	舟底固い	〃	固　い
33	25×60	9	内部施設の柱穴	〃	舟底軟か	〃	軟　か
34	26×50	14	壁側の柱穴	〃	〃	〃	固　い
35	30×52	7	〃	〃	〃	〃	やや軟か
36	24×28	20	住居の外の柱穴	〃	平で固い	固　い	〃
37	43×55	22	〃	〃	丸底固い	〃	〃
38	29×33	17	〃	〃	平で固い	〃	〃
39	14×14	7	〃	〃	丸底固い	〃	〃
40	24×34	61	〃	〃	平でななめ	〃	〃
41	35×46	19	〃	〃	丸底固い	やや軟か	〃
42	33×83	27	〃	〃	丸底軟か	〃	〃
43	23×24	25	〃	〃	平で固い	〃	〃
44	20×20	25	〃	〃	〃	〃	〃

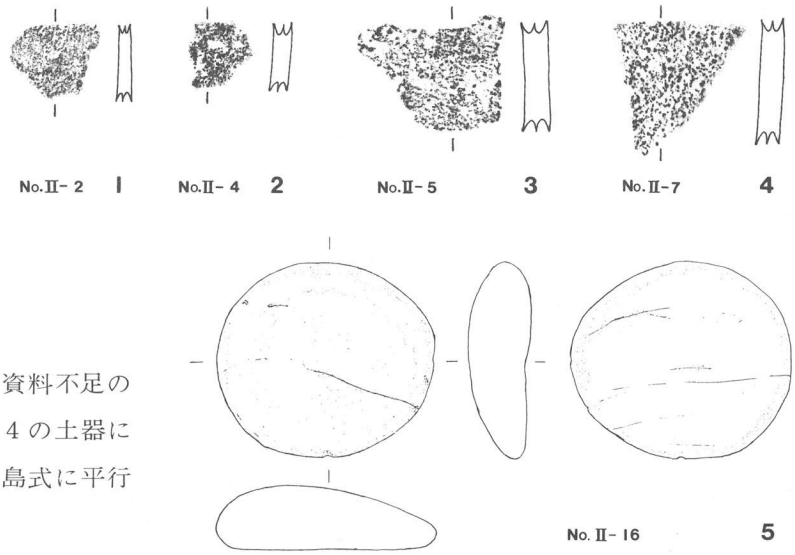
遺物

土器　本址の床面から検出された土器は僅か4片で，開田時に床面まで削り取られ又掘立建物址の腹合もあって本址に伴うものは3点にすぎない。1は，無文の土師器の破片で飛び込

んだものと思われる。２，３，４は無文の土器で器厚は７mm長石雲母を含み焼成は良好であるが少し焼けていて器面が荒れている。

本址の時期決定には資料不足の点もあるが，２，３，４の土器に代表される弥生後期中島式に平行されると思われる。

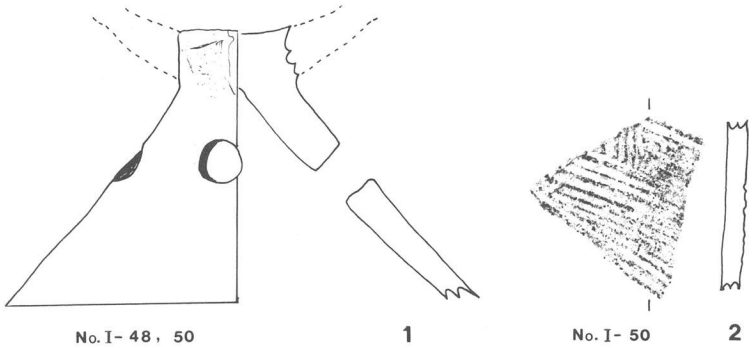
石器，本址から出土した石器は摺り石１，硬砂岩剝片２である。５は，粘板岩質の固い自然石を使った丸型の摺り石で殆ど全周囲に使用痕が認められた。



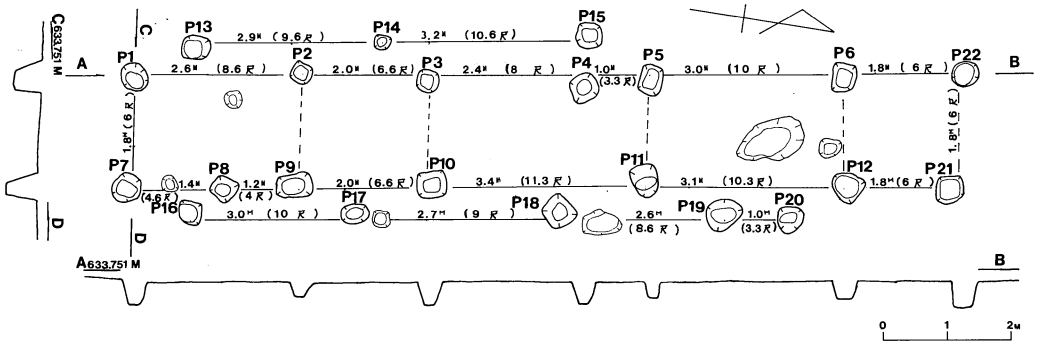
28図　２号住居址出土土器拓影及び石器実測図（１～４，１：２　５　，１：３）

遺構外遺物　（29図）

１は，高杯で上部欠損，Ｎ１グリッドより出土する。２は，１同様Ｎ１グリッドローム上より出土し竹管による横位の條痕を施し上部には格子目状に施してある器厚は６mm焼成は良好である。１は弥生後期に２は弥生中期初頭の庄之畑式に比定出来るものと思われる。



29図　遺構外出土土器実測図及び拓影（１：２）

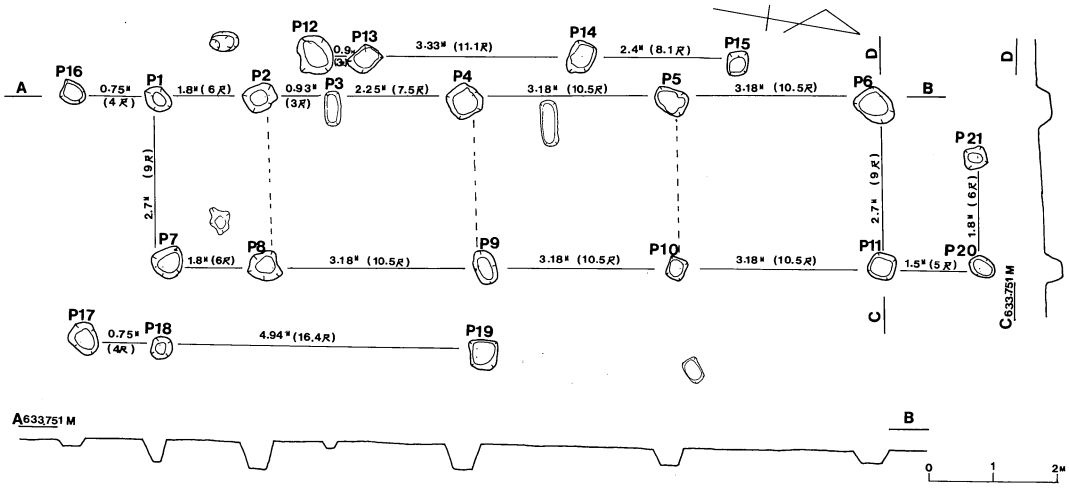


30図　　1号掘立建物址実測図

中世の遺構と遺物

掘立建物址（30図　7図，図版12，表14）

1号掘立物址，Aa型，調査地点では西側区域に当り，K16～J18グリッドに発見された掘立建物址である。この建物址は，1×4間で南側と北側に廂が配された建物址で，分類ではAa型に分類した。柱間寸法は，TD—1—1桁行2.6m梁行1.8m。TD—1—2は桁行2.0m・梁行1.8m。TD—1—3桁行2.4m梁行1.8m。TD—1—4は桁行3.0m，梁行1.8mと1棟を4区画に間じ切したものではないかと考えると，本建物址は倉庫的な性格をもった建物址と思われる。遺物No.19，21，22，23が出土した。



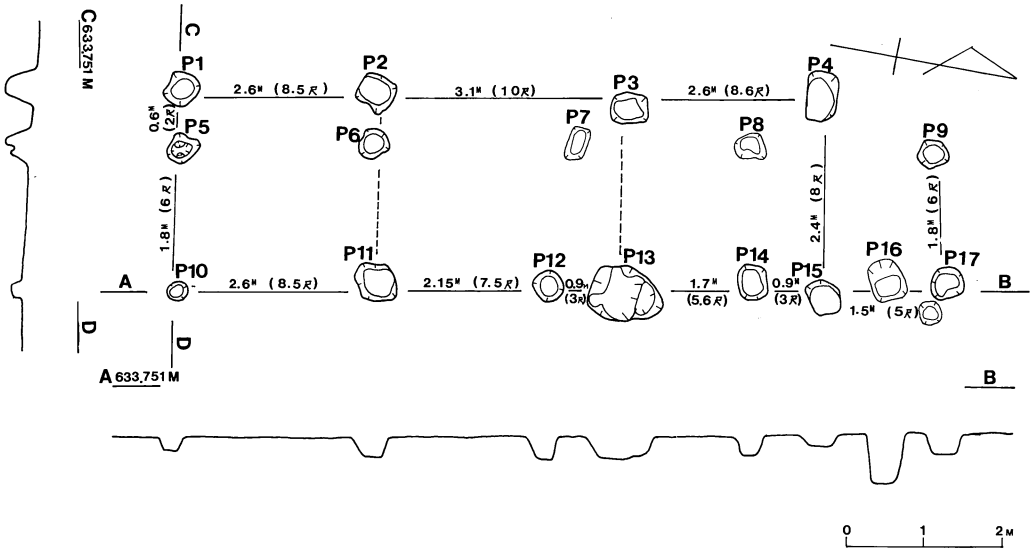
31図　　2号掘立建物址実測図

2号掘立建物址　（31図　7図，図版12，表14）

本址は1号掘立建物址の北側に接して発見されたもので，Ab型，位置はJ—16～I—18グリッドにまたがって分布する。桁行1×梁行4間の掘立建物址である。柱間間隔はＴＤ－２－１桁行1.62，梁行2.70ｍ。ＴＤ－２－２は桁行3.3ｍ，梁行2.7ｍ。ＴＤ－２－３は，桁行3.1ｍ梁行2.7ｍ。ＴＤ２－４は，桁行3.2ｍ，梁行2.7ｍの4間が主屋である。そのうち，TD2－1は桁行が1.62ｍと他の間じ仕切の間の2分の1にすぎないので物置様の間であると考えられる。江戸時代のこの地方の廐は，梁行2.7ｍ，桁行3.6ｍのものが基本型であるところより，本建物は廐と考えたのである。主屋の南側に廂かと思われる柱列がある。また，東と北側にある柱列は，下屋的なものではないかと推察され，Ab型，「廐」と考えたい建物址である。

3号掘立建物址（32図　7図，図版12，表14）

本址は，2号掘立建物址の北側に設けられていた建物址で，1・2号址と合せ「廐」の経営につながる一連の施設とも解せられ，分類上Ab型とした。位置はＩ16～Ｈ18グリッドに発見され，桁行3間，梁行2間の掘立建物址である。各柱間は，ＴＤ－３－１桁行2.6ｍ，梁行2.4ｍ。ＴＤ－３－２は，桁行3.1ｍ，梁行2.4ｍの「廐」状の建物址と考えられる。



32図　　3号掘立建物址実測図

4号掘立建物址　（33図，7図，表14）

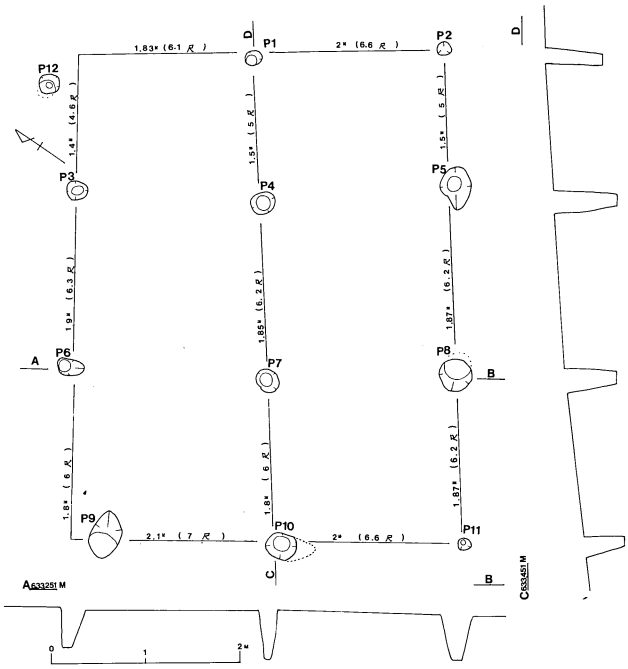
本址発見された位置は東側のＮ２・３グリッドに2号住居址内に検出された建物址で，分類

上Ba型とした。建物址はM－２～３，N－２～３グリッド内，２号住居址に検出した遺構である。建物は桁行３間，梁行２間の総柱建物址で，その規模は桁行5.1m，梁行3.83mである。そのうちP－12とP－３の柱間間隔は1.4m，P－３とP－６の柱間は1.9m，P－６とP－９の柱間1.8m。中央P－１とP－４の柱間は1.5m，P－４とP－７は1.85m，P－７とP－10の柱間は1.8m。西側の柱間間隔は，P－２とP－５の柱間は1.5m,P－５とP－８の柱間は1.87m，P－８とP－11の柱間は1.87mを測る建物で，倉庫型の建物と考えられる建物と思う。No.58－７の室町時代の陶器片が出土している。

土　　壙　（34図，表13）

表13　土壙一覧表

番号	図版番号	プラン		大きさ(cm)			状態
		平面	断面	長軸 m	短軸 m	深さ m	(上部，内部など)
1号		不整円形	ナベ底	1.10	1.05	0.46	
2号		不整円形	ナベ底	1.00	0.95	0.30	
3号		楕円形	ナベ底	1.08	0.70	0.17	
4号	16(下右)	不整楕円形	舟底	1.40	0.70	0.35	
5号	16（上）	不整楕円形	舟底	2.70	1.40	0.37	一部２段
6号	16（中）	不整楕円形	袋状	1.30	1.28	0.40	一部西側溝となる
7号	16(下左)	不整円形	袋状	0.77	0.70	0.40	小形の土壙である



33図　４号掘立建物址実測図

土壙は全体で７基発見された。１号土壙は６号住居址内に検出された遺構で，遺構内には木炭片が多量に出土した。規模及び形態は土壙一覧表に示したようである。

２号土壙，２号土壙も１号土壙と同じように６号住居址内に発見された遺構である。土壙内からは遺物台帳番号No.171，鎌倉～室町時代の内耳鍋の破片が出土した。

３号土壙，３号土壙は３号住居址と４号住居址との間に発見された遺構で，規模・形態など一覧表に示してある。遺物は検出されなかった。

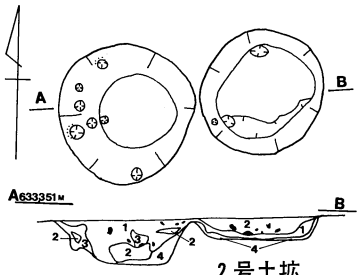
４号土壙，本土壙は８号住居址の南に発見された遺構である。遺物を伴わないので時期は不明である。

5号土壙，本土壙は3号掘立建物址の北西H18～H19グリッドに発見され遺構で，今回発見された土壙中最規模の遺構である。土壙の附近からNo.52の鎌倉期の陶器片が出土しているが，遺構内からは遺物は発見されなかった。

7号土壙，本址は1号掘立建物址の西側に発見された土壙である。土壙内からは土師の破片が出土している。時期は奈良～平安時代と考えられる。

表14　掘立建物址一覧表

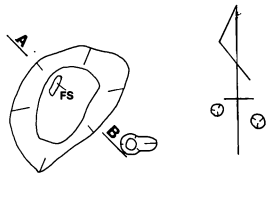
発掘番号	図版番号	規模（間）	桁行（m）	梁行（m）	棟方向	柱間寸法 桁行（m）	柱間寸法 梁行（m）	柱間寸法 床目梁行（cm）	型	柱列内出土遺物
1	12	4×1	11.10		N51° E	TD-A1- 2.60	1.82	0.5	Aa	
〃						TDA-1-2 2.00	1.82	0.5 40		
〃						TDA-1-3 3.50	1.82	50 40		
〃						TDA-1-4 3.00	1.82	40		
2	12	4×1	11.22		N51° E	TD-2- 2.72	1.62	60 1.20	Ab	
〃						TD-2-2 3.30	2.72	60 1.20		
〃						TD-2-3 3.10	2.72	1.20 1.20		
〃						TD-2-4 3.20	2.17			
3	12	4×1	10.4	2.7	N51° E	TD-3 2.50	1.82	60	Aa	
〃						TD-3-2 2.50	1.82	60		
〃						TD-3-3 2.30	1.82	60		
〃						TD-3-4 2.40	1.80			
4		2×3	10.30	3.90 4.20	N51° E	TD-4-1 6.95	8.10		Ba	
〃						TD-4-2 3.35	5.10			



1号土坑　2号土坑

凡例

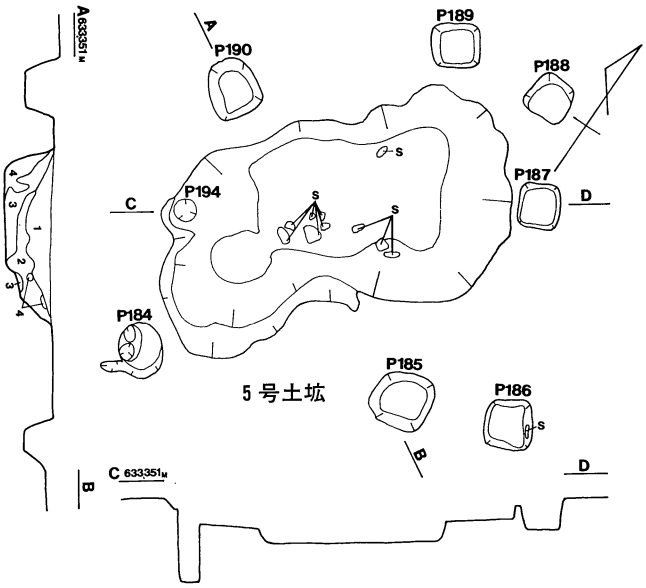
1	褐　色　土
2	黒　褐　色　土
3	1へローム混入
4	ロ　ー　ム
■	木　炭



3号土坑

凡例

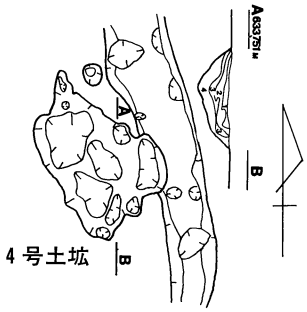
1	褐　色　土
2	黒　褐　色　土
3	やや黒い褐色土



5号土坑

凡例

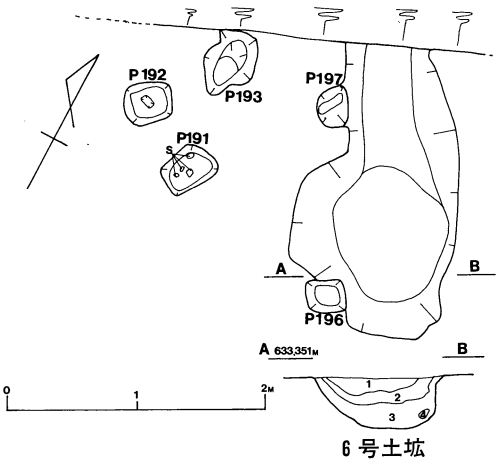
1	黒　土	3	ロームへ褐色土混入
2	黒褐色へローム混入	4	ロ　ー　ム



4号土坑

凡例

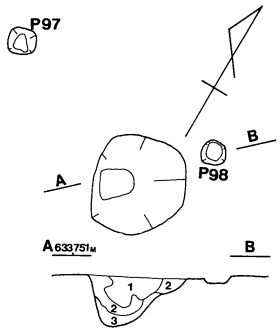
1	黒　褐　色　土
2	黄　褐　色　土
3	ローム、ブロック混入黄褐色土
4	ローム混入黄褐色土



6号土坑

凡例

1	黒　土
2	黒褐色へローム混入
3	ロームへ褐色土混入
4	ロ　ー　ム



7号土坑

凡例

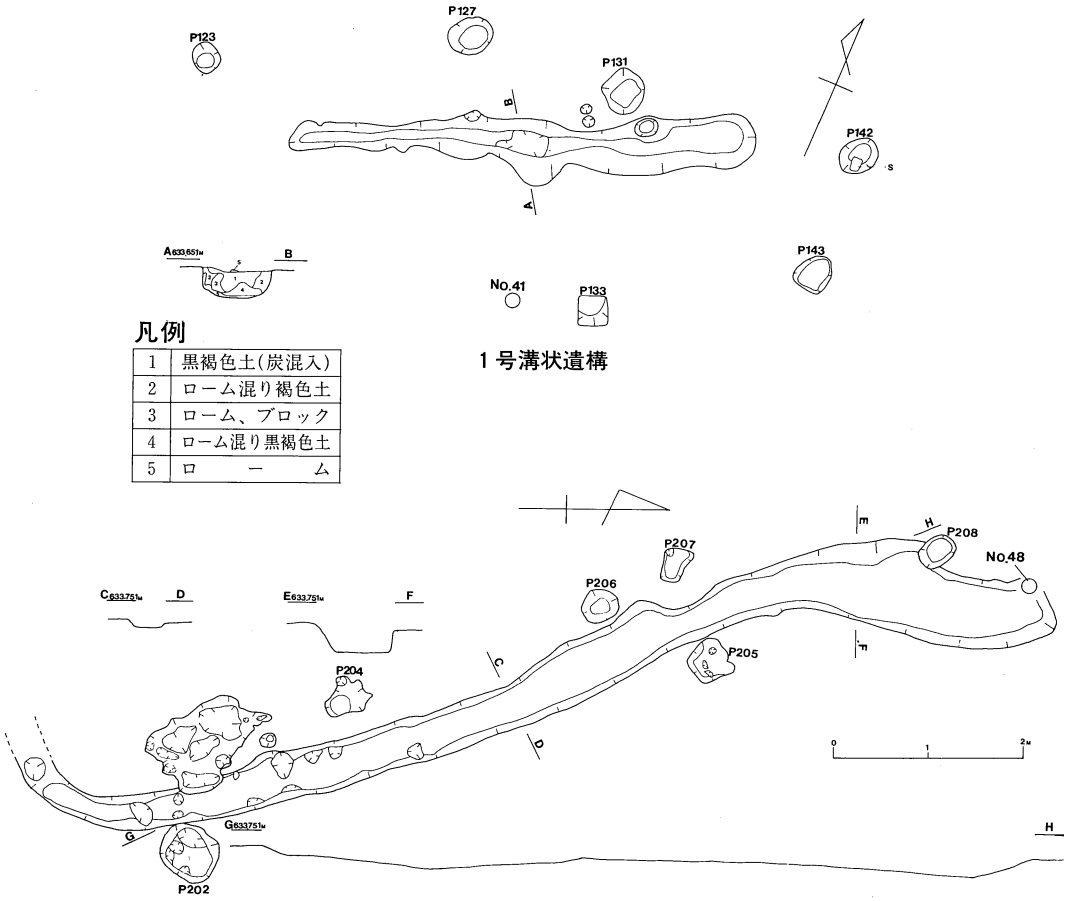
1	黒　土
2	黒　褐　色
3	褐　色　土

34図　土坑実測図

溝　状　遺　構（35図，7図，図版13・14）

1号溝状遺構，本遺構はK-16～J-16グリッドに発見された遺構である。その規模は，長さ4.9m，幅50cm，深さ30cmを測る。出土遺物はNo-41で，鎌倉時代の陶器である。時代的には，鎌倉頃の遺構と考えられる。

2号溝状遺構，本遺構はK-16～J-16グリッドに検出された遺構である。この遺構は6号住居址を東西に切って作られたものである。遺構の長さについては明かでないが，計測できる範囲では長さ10.5m，幅40～60cm，深さ10cm内外とわりあい浅い溝状遺構である。出土遺物はNo-48で室町時代の瀬戸天目茶碗の破片が検出された。



35図　溝状遺構実測図

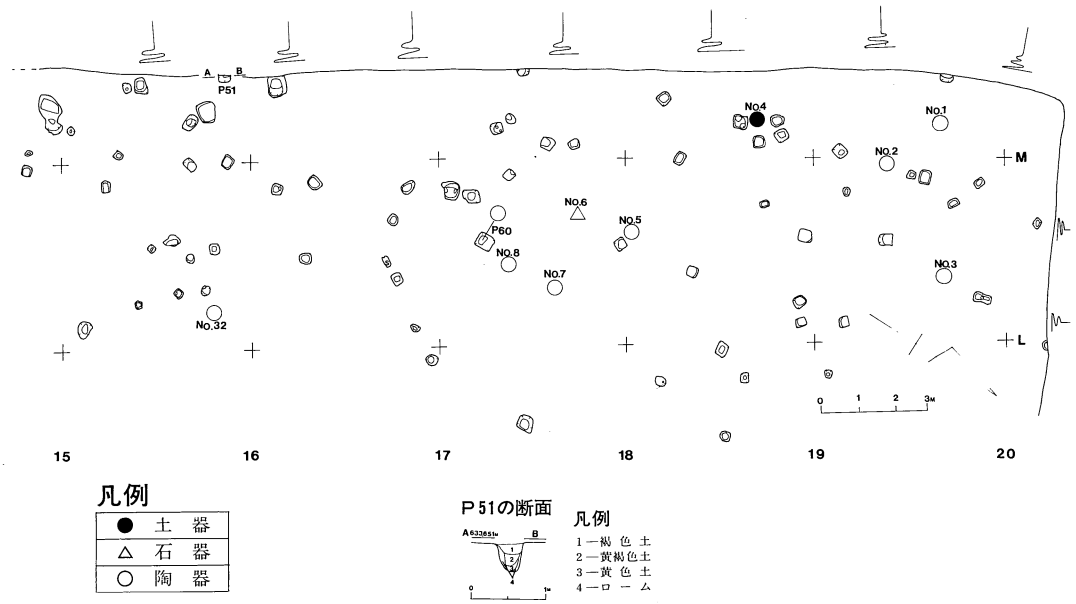
その他のピット群　（36図，７図）

１）ピット群，今回調査された地点では西南の土手よりに分布するピット群である。このピット群は今度調査された区域より南に広がっているようであるので，ピット群の全体にわたっての調査でないので，ピット群の性格を明かにすることができなかった。この１群はM-14～M-16から，L-14～L-16内を１)ピット群とした。ピットの形態は円形・楕円形・方形など様々である。

ピットの大きさは20～50cm，深さは27～69cm内外である。出土遺物はNo.32中国青磁室町時代が出土している。

２）ピット群は，M-16・L-16の西方M-18・L-18までの区域とした。ピット数は16個で，ピットの形状は円形・楕円形・方形等で，その大きさは20～40cm内外，深さは32～70cm内外である。ピットNo.-60内からは平安時代末東濃系灰釉陶器が出土した。

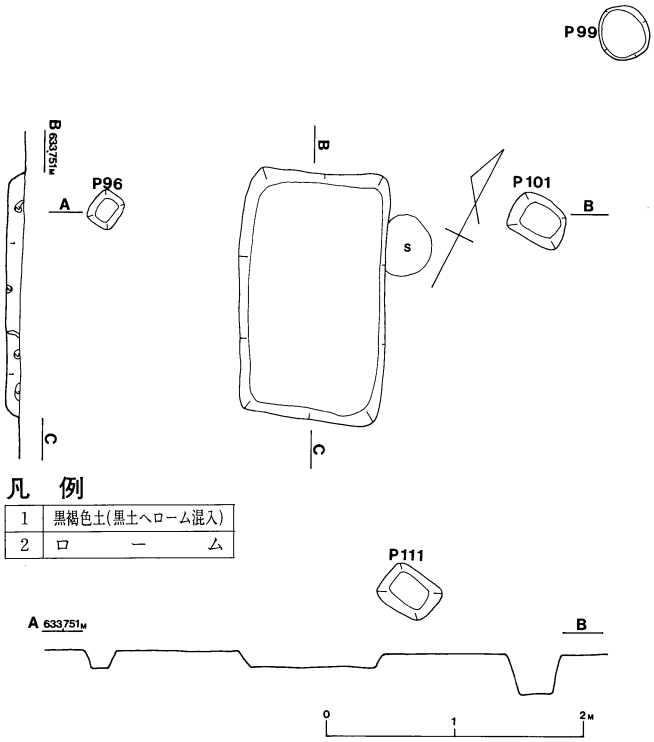
３）ピット群は，M-18・L-18～M-20・L-20グリットに分布しているピット群である。調査したピット数は19個である。特に3)ピット群は方形の形状をもったピットが約半数の10個に達していることは，他のピット群と性質を異している建物址であったかもしれない。出土遺物は，No.１・No.２が検出された。遺物は平安末と室町時代のものである。



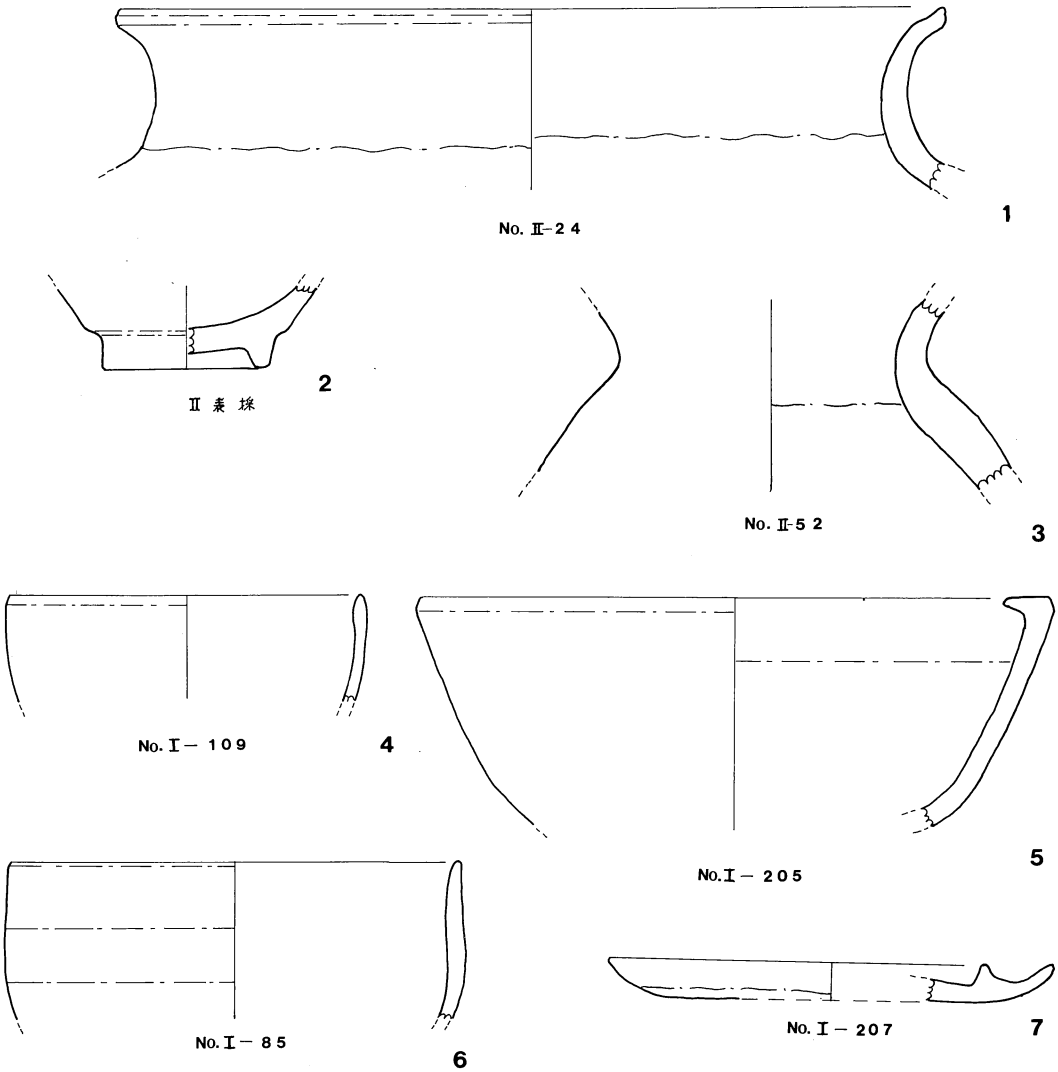
36図　その他のピット群実測図

地下式貯蔵穴　（37図，図版15—中・下）

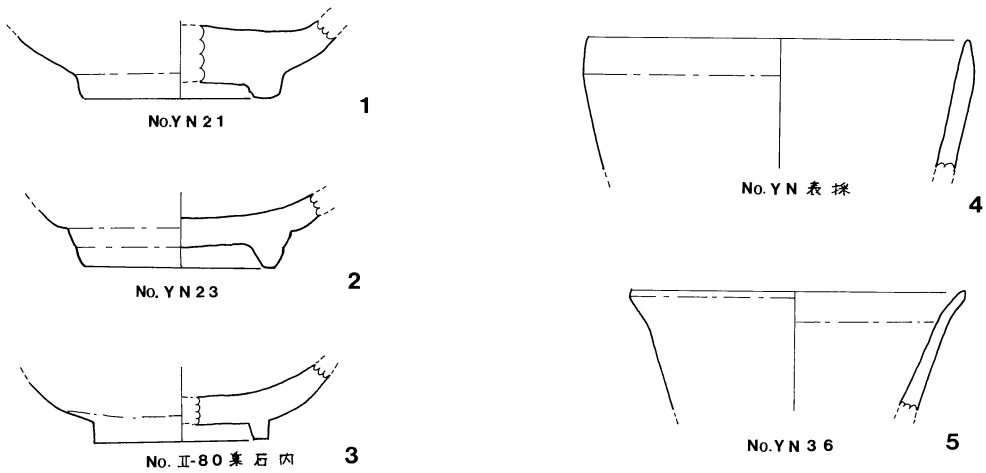
地下式貯蔵穴は，１号掘立建物址の西端の位置に発見された遺構で，J-18～19グリッドにわたる位置にあたる。遺構の規模は南北1.88m，東西1.18m，深さロームの発見面より下層に13～15cm掘込まれて検出されているが，水田造成の事点で上部が取り去られたと土地所有者から聞ていることから，この地方の中世層館址に発見される種類の貯蔵穴と推測される。



37図　地下式貯蔵穴実測図



38図　茶堂遺跡出土　陶磁器実測図（表15参照）（1：2）



39図　茶堂遺跡附近出土　陶磁器実測図　1・2・4　口絵4　3　表15　5　青磁（1：2）

表15　茶堂遺跡出土陶磁器一覧表

No.	遺物No.	図 No.	産地	器 種	時 代	備 考
1	Ⅰ－表採			甕	奈 良	須恵
2	Ⅱ－7				奈 良	須恵
3	Ⅱ－1				平 安	自然釉
4	Ⅱ－3	口絵1		皿	平 安	灰釉　11C
5	Ⅰ－147	口絵2	瀬戸	甕	鎌 倉	無釉
6	Ⅱ－19		常滑	甕	鎌 倉	常滑1号建物
7	Ⅱ－21	口絵2		甕	鎌 倉	常滑1号建物
8	Ⅱ－22	口絵1			〃	自然釉常滑1号建物
9	Ⅱ－23			甕	〃	常滑
10	Ⅱ－24	38－1		甕	〃	常滑　口絵1
11	Ⅱ－27	口絵2		甕	〃	自然釉常滑1号建物
12	Ⅱ－41	口絵2	瀬戸	甕	〃	灰釉
13	Ⅱ－44		瀬戸	甕	〃	自然釉
14	Ⅱ－46	口絵2	瀬戸	甕	〃	
15	Ⅱ－52	38－3	瀬戸	壺	〃	自然釉．口絵1
16	Ⅱ－55	口絵1	常滑	甕	〃	
17	Ⅰ－79		美濃		室 町	鉄釉
18	Ⅱ－104		瀬戸	摺 鉢	〃	
19	Ⅰ－120		瀬戸		〃	鉄釉
20	Ⅰ－133	口絵3	中国		〃	青磁
21	Ⅰ－180		瀬戸		〃	鉄釉
22	Ⅰ－181		瀬戸		〃	鉄釉
23	Ⅰ－189		瀬戸		〃	鉄釉
24	Ⅱ－2				〃	鉄釉
25	Ⅱ－5	口絵3	瀬戸	鉢	〃	鉄釉
26	Ⅱ－8		瀬戸	鉢	〃	鉄釉
27	Ⅱ－11		瀬戸	鉢	〃	鉄釉
28	Ⅱ－14	口絵3	瀬戸	甕	〃	灰釉
29	Ⅱ－17		瀬戸		〃	鉄釉
30	Ⅱ－29	口絵3	瀬戸		〃	鉄釉
31	Ⅱ－32		中国		〃	青磁
32	Ⅱ－42		瀬戸		〃	鉄釉
33	Ⅱ－48		瀬戸		〃	天目
34	Ⅱ－56	口絵3	瀬戸	摺 鉢	〃	
35	Ⅱ－79	口絵3	常滑	甕	〃	
36	Ⅱ－表採		瀬戸		〃	天目
37	Ⅱ－表採		瀬戸	甕	〃	自然釉
38	Ⅰ－表採		中国		〃	青磁
39	Ⅱ－26		美濃	皿	桃 山	鉄絵
40	Ⅰ－46		美濃	碗	江 戸	
41	Ⅰ－54			茶 碗	〃	
42	Ⅰ－62				〃	天目
43	Ⅰ－85	38－6	瀬戸		〃	黄瀬戸
44	Ⅰ－92		瀬戸		〃	鉄釉
45	Ⅰ－100		瀬戸		〃	灰釉
46	Ⅰ－103		瀬戸		〃	染付
47	Ⅰ－110		瀬戸		江 戸	染付
48	Ⅰ－116		瀬戸		〃	染付
49	Ⅰ－122		瀬戸		〃	灰釉
50	Ⅰ－164		瀬戸	碗	〃	瀬戸黒
51	Ⅰ－187		瀬戸		〃	鉄釉
52	Ⅰ－188				〃	灰釉
53	Ⅰ－205	38－5	瀬戸	小 鉢	〃	鉄釉
54	Ⅰ－207	38－7	瀬戸	燈 明	〃	
55	Ⅱ－55		美濃		〃	志野釉調
56	Ⅰ－503		美濃		〃	灰釉
57	Ⅱ－33		瀬戸		〃	染付
58	Ⅱ－39			皿	〃	灰釉
59	Ⅱ－50		瀬戸	茶 碗	〃	染付
60	Ⅱ－57		瀬戸		〃	灰釉
61	Ⅱ－70		瀬戸	皿	〃	高台付
62	Ⅱ－71				〃	灰釉
63	Ⅱ－74		瀬戸		〃	鉄釉
64	Ⅱ－202		瀬戸	碗	〃	鉄釉
65	Ⅱ－204		美濃	皿	〃	鉄釉
66	Ⅱ－80	39－3	瀬戸	碗	〃	灰釉集石内
67	Ⅱ－表採		瀬戸		〃	染付
68	Ⅱ－表採		瀬戸		〃	灰釉
69	Ⅱ－表採				〃	鉄釉
70	Ⅱ－2号住6		美濃	摺 鉢	〃	鉄釉
71	Ⅱ－表採		美濃		〃	灰釉
72	Ⅱ－表採		瀬戸		〃	染付
73	Ⅰ－表採		美濃		〃	灰釉
74	Ⅰ－表採		瀬戸		〃	鉄釉
75	Ⅰ－105		瀬戸		〃	染付
76	Ⅰ－表採		瀬戸		〃	灰釉
77	Ⅱ－85		瀬戸	碗	明 治	染付
78	Ⅱ－86		美濃	摺 鉢	〃	鉄釉
79	Ⅱ－200		瀬戸	碗	〃	灰釉
80	Ⅱ－76		瀬戸		〃	灰釉
81	Ⅱ－表採		瀬戸	徳 利	〃	染付
82	Ⅰ－109	38－4	瀬戸		大 正	灰釉
83	Ⅰ－123		瀬戸	鉢	〃	銅縁釉
84	Ⅰ－148		瀬戸		〃	染付
85	Ⅰ－206				〃	白釉
86	Ⅱ－表採				〃	染付
87	Ⅰ－117		瀬戸		時期不明	灰釉
88	Ⅰ－149				時期不明	灰釉
89	Ⅱ－15			甕	時期不明	

参考文献

奈良国立文化財研究所		「年　報」	1973
奈良国立文化財研究所		「年　報」	1976
奈良国立文化財研究所		「年　報」	1977
中央道報告書		上伊那郡箕輪町	1973
瀬戸市史（陶磁史編）			1980
日本考古学協会		日本考古学年報　24	1971
日本考古学協会		日本考古学年報　26	1973
日本考古学協会		日本考古学年報　33	1980
日本考古学協会		日本考古学年報　34	1981
千曲川水系古代文化研究所編		旧石器・縄文・弥生	1980
東京都清瀬市下宿内山遺跡調査団		下宿内山No.— 4	1980
東京都清瀬市下宿内山遺跡調査団		下宿内山No.— 5	1981
中川村教育委員会		西ケ原	1979
中川村教育委員会		溝林遺跡	1980
中川村教育委員会		上ノ原遺跡	1982
中川村教育委員会		原田遺跡	1981
日本考古学協会		日本考古学辞典	1982
河出書房		日本の考古学Ⅱ	1966
ＮＨＫブックス	365　安田　喜憲	環境考古学事始	1980
有斐閣	大塚初重・戸沢充則・佐原真	日本考古学を学ぶⅠ	1978
南向村誌編纂委員会		南向村誌	1966
片桐西公民館		片桐村誌	1966

所　　見

茶堂遺跡の調査の結果については前章で詳細に述べてあるので，ここでは，調査及び整理中を通して知り得た二・三の問題点について記しまとめとしたい。

1．茶堂遺跡は，中川村横前耕地の東端天竜川の右岸の河成段丘上にあり，その標高は630～633ｍにわたって分布している遺跡である。この遺跡は土地台帳面ではさほど広い範囲でわないが，一般的に言われている遺跡地は茶堂を取りまく一帯を指している。

遺跡の所在する地理的な環境をみると，東側は天竜川の段丘になっていて，天竜川の現河床面495ｍの湿田より弥生時代後期と考えられる木柵が発見された小和田遺跡があり，茶堂遺跡とは比高135ｍ直巨離300ｍの位置にあって，しかも時期が同時期であるという点，我々もいささか抵抗を感ずるが，中川村の諸遺は天竜川はんらん原と，茶堂遺跡と同様な高位段丘上に分布している遺跡の現況は何時も問題になる点の一つである。

横前台地は，古い天竜川によって形成さされた段丘面である。この段丘の面を西方に300～400ｍ登ると洪積世に作られたと考えられる比高6～10mぐらいの段丘が梨ノ木遺跡あたりより，深堤をへて針ケ平まで南北にのびている。このゆるやかの段丘上の丘の辺が中川村と飯島町七久保との境が通っている。この西方七久保地籍からの凹地がこの段丘を幾筋かに区切り，その凹筋が針ケ平，横前新田，溝林の上深堤の凹地・梨ノ木・刈谷原の湿地帯となり，その末流に溜池が作られている。弥生時代には溜池は作われなかっただろうが，古代・中世・近世には堤を作り水田を増していったと思われる。現存する横前の堤は森脇の堤(800㎡)・上新田堤(800㎡)深堤(7200㎡)，さがみ(300㎡)県営圃場整備で消滅した堤であるが，古い時代に重要な堤であったろう。さがみ堤の北小沢に大井沢堤があり面積は(1000㎡)あったが，現在農免道路の下側に横前の堤が新しく作られたので埋られてしまった。この堤もさがみの堤と同様古い時代には重要な堤であったものであろう。梨ノ木の南横前段丘上に久保畑の堤がある。広さは700㎡である。この堤も農免道の辺から久保地になり佐々木正一氏宅附近から湧水があり，これらの水と貯水した堤である。

この久保畑堤の下段丘下に北新田の堤がある。現在は小規模の堤となったが，溜池台帳には(900㎡)と広い，おそらく北新田の水田を潤した堤であろう。梨ノ木の北に竹ノ上整理の堤が新しく作られた。面積は(7,500㎡)と横前の堤のうちでは最大の堤である。この堤を作る時縄文時代中期の「**土偶**」が発見されている。刈谷原の南には原新田新堤がある(800㎡),原田旧堤は段丘下にあって，面積(200㎡)と小規模であるが，古い時代には主要な堤であったと思われる。横前東寄りに竹ノ上堤がある。面積(7000㎡)と大きい堤である。この堤は竹ノ上の用水を溜る堤で，横前の水田には関係がない堤である。横前の大小の堤の数は11基を数え，その面積は26,500㎡となる。これら堤の起原が明かでないが，中世以降の研究には欠せない問題の一つであろう。

2．遺　構

今回の発掘では，縄文早期の押型文土器や早期末の繊維土器が検出されたが，これに伴なう遺構はつい確認することができなかった。おそらく，開墾時に破壊されたものであろう。

発掘された遺構は縄文前期の住居址５軒で，住居址の形態は惰円形で，その規模は3.3～4.8mの竪穴住居である。柱穴は３・４号住居址が10穴と多柱穴の構造である。５号住居址が６穴，６号住居址では５穴，７号住が５～７穴の柱穴構造をもっている住居形である。前期初頭の住居形は，こうした，多柱穴の住居址が多いようで，前期前半の関山・神ノ木式の時期になると，４柱穴が全体の半数に達するようになってくる。主柱穴のなかに小穴が検出されるのが前期前半の特徴でもある。早期末の住居址には主柱穴とも小穴とも区別のつかない穴が方形又は長方形に掘られている例がある。宮田村元宮神社東遺跡の早期末の住居址にそうした例がある。

炉址について，今回発見された住居址には総て炉址が検出されなかったので問題であるが，前期初頭の住居には時折り住居内に焼址を認めない住居址があるが，今回の様に炉址が認められなかったことには住居址としての条件として問題を残すことになり、今後の研究にまちたい。

遺物，出土した遺物のほとんどが，薄手指痕の無文土器で，前期初頭の土器編年上の位置について今日問題のある土器であるが，今回は中越式の分類の中の中越Ⅱ式後半に分類して処理した。現在縄文前期初頭遺跡は中川村附近では，宮田村中越遺跡・仝向山遺跡，仝駒ケ原南遺跡下伊那郡豊丘村伴野原遺跡等がある。最近駒ケ根市伊那火山青木城から，この種の土器が発見されている。中川村では刈谷原遺跡・原田遺跡・茶堂遺跡と次第に数を増してきている。

弥生時代の遺構。今回発見された弥生時代の住居址は１・２号住居址の２軒である。住居址の形態は方形で，その規模は4.75～6.2mの方形竪穴式住居址である。柱は４本柱，上屋架構はおそらく入母屋造りであったろう。特に１号住居址は火災にかかっているので，建築残存資材について詳細に記録がなされ，当時の建築に使用された木材の種別，焼残りの木材の量等や，屋根材などの研究記録が得られたことは今調査の収獲の一つである。出土土器は少なく，壺形土器・甕形土器３個体で，時期は中島期である。

掘立建物址。今回の調査であきらかになった掘立建物は，桁行・梁行の寸法から倉庫的なものと，畜舎関係に使用された建物址ではないかと考えたのであるが，今後の研究にまちたい。

陶器，今回の調査で得られた陶磁器の主なものは88点を数える。そのうち奈良時代では須恵器，平安時代では灰釉陶器，中世は施釉陶器として分類を試みた。

今回の調査で得られた主要な点は以上であるが。横前地籍では縄文・弥生時代の文化は論じられてきたが，奈良時代・平安時代・中世については問題として取り上げられなかったが，調査の結果古代・中世の遺構・遺物が発見されたことにより，今まで問題にされなかった古代・中世の研究の一端をうかがうことができ，古代・中世の研究に光をあたえてくれた。

図　　版

図版 1

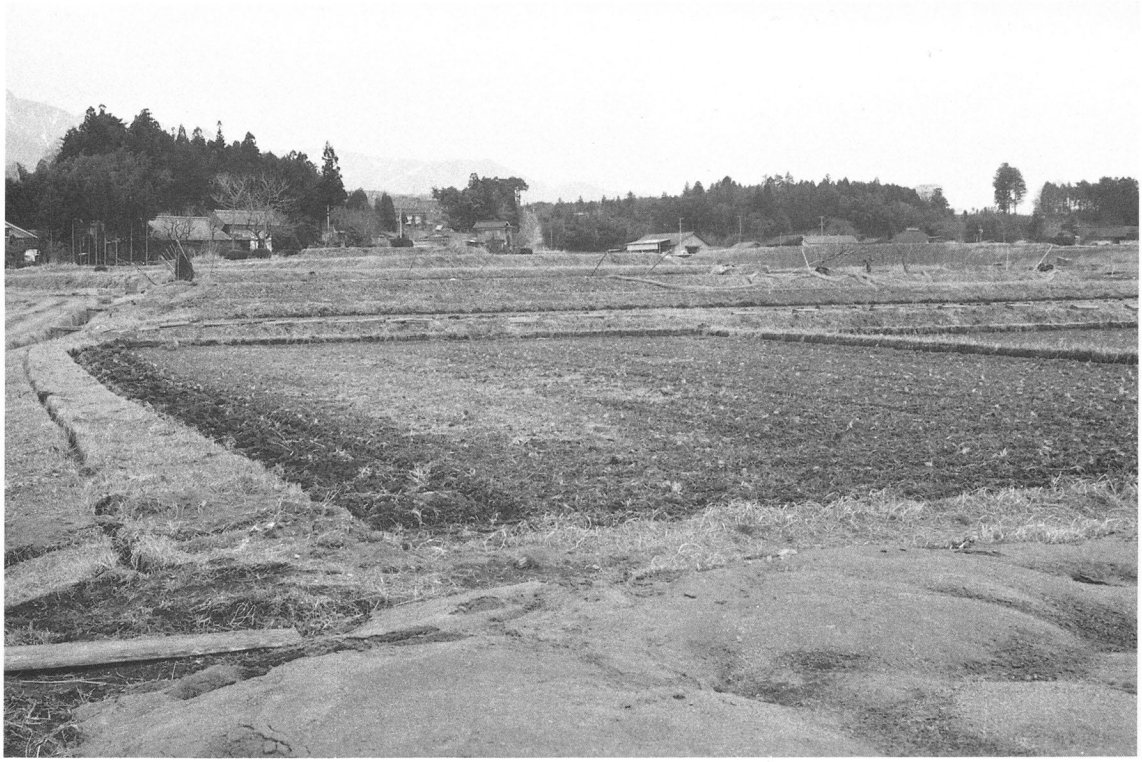
中川村長宮崎昌直

鍬入式参加者

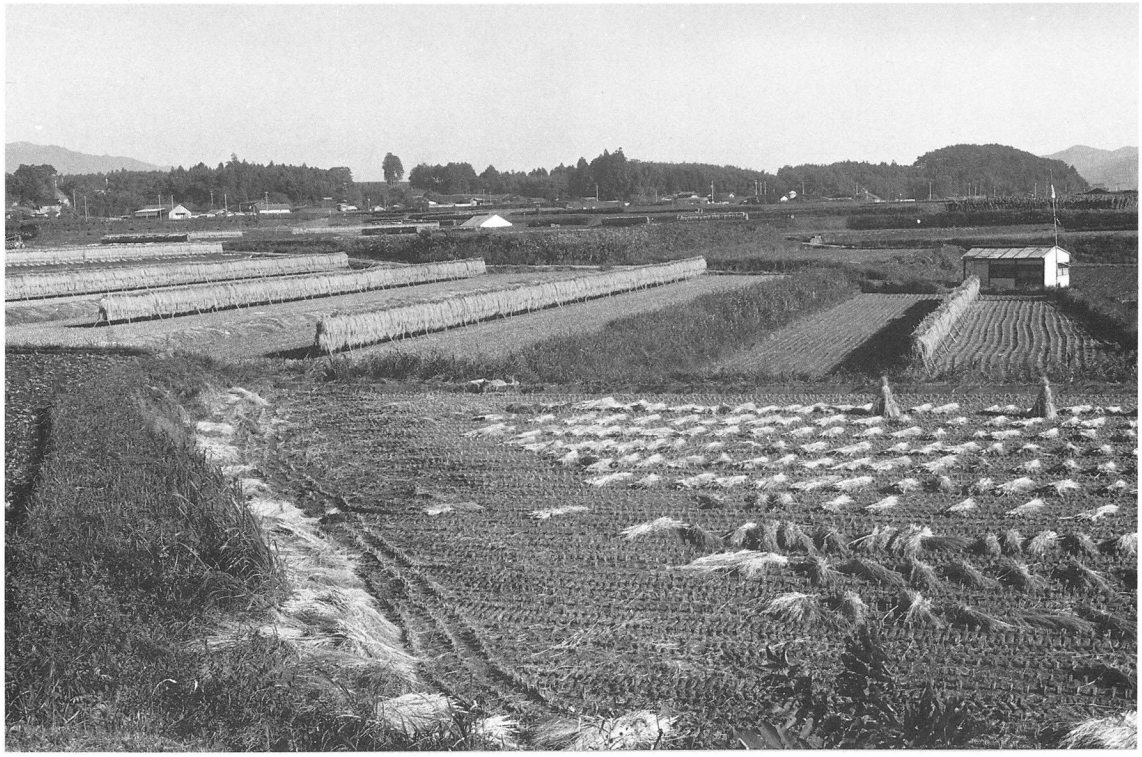
鍬入

遺跡発掘の説明

図版 2



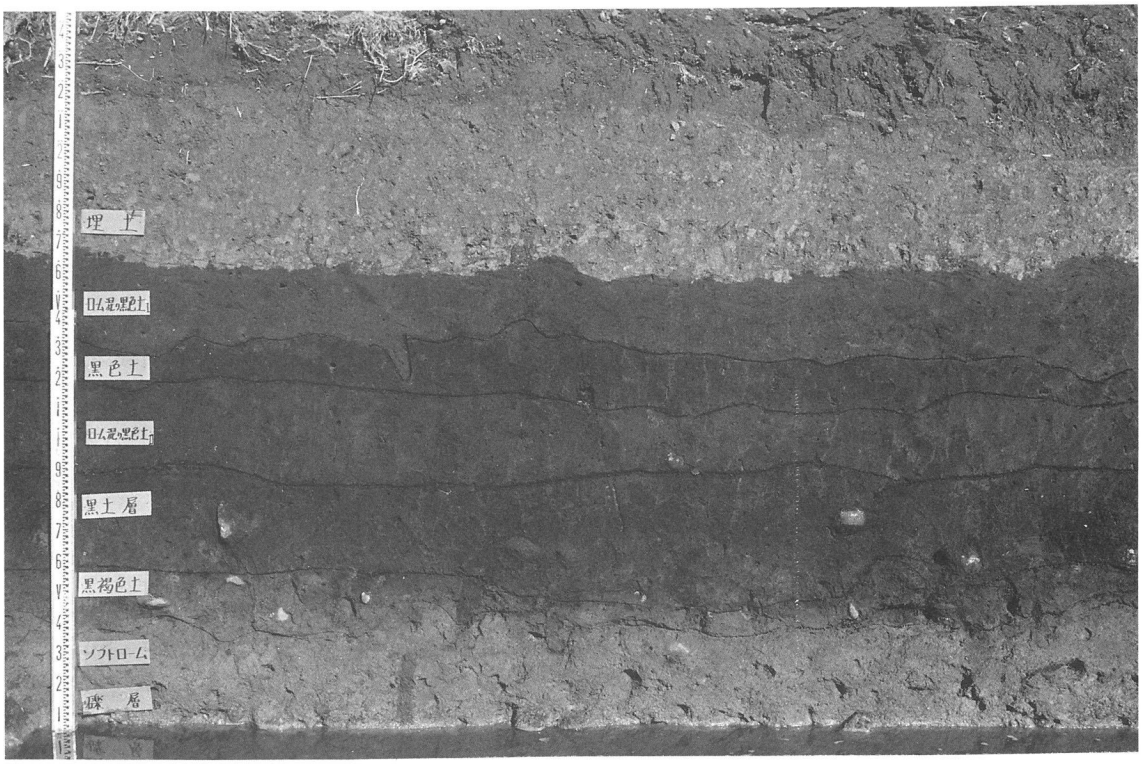
東より見た遺跡



南から見た遺跡

図版 3

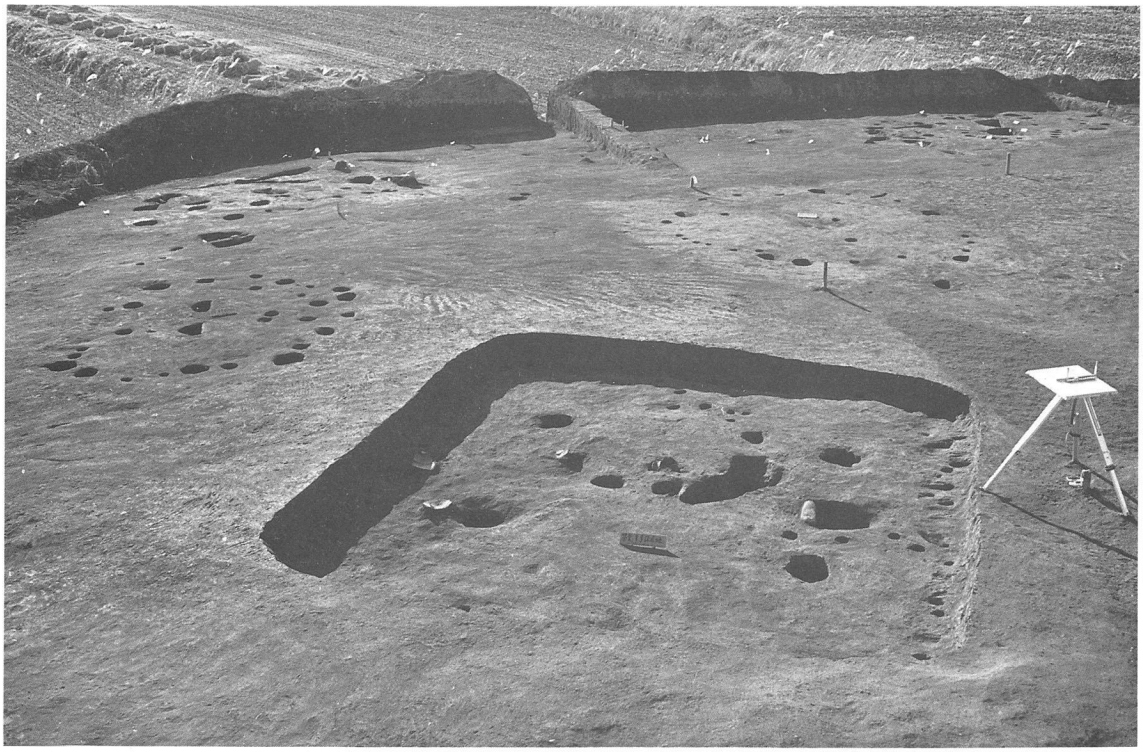
遺跡の地層



凹地帯の層序

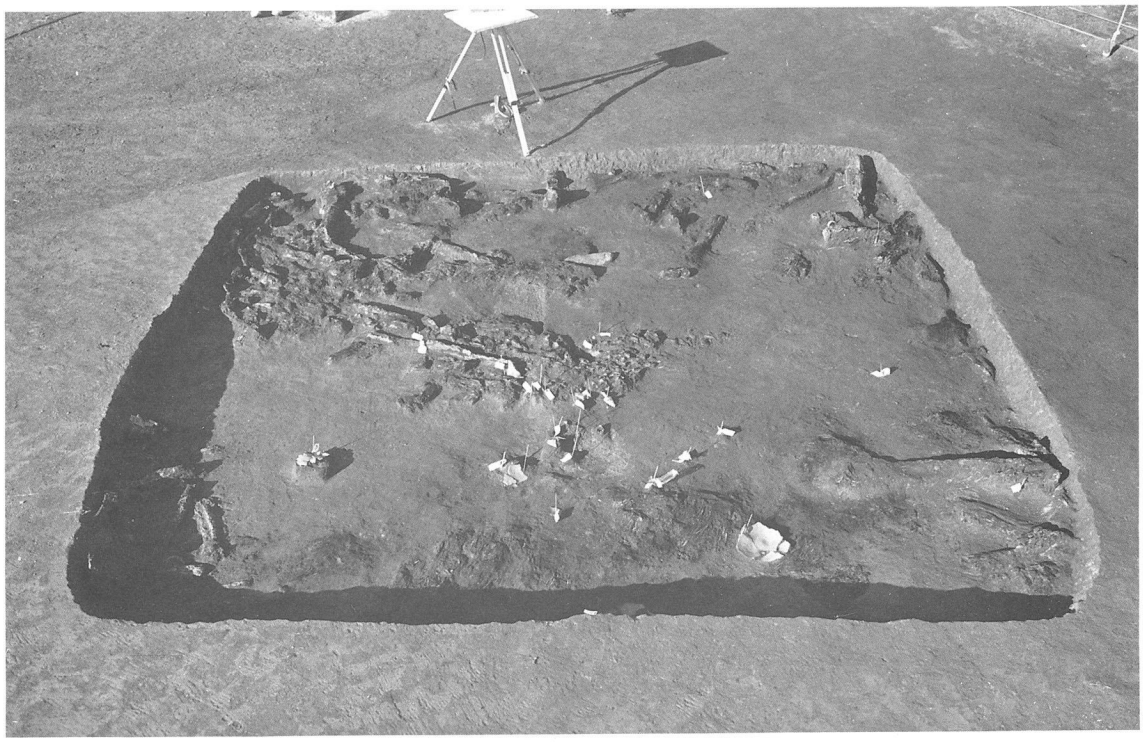
図版 4

西方から見た遺跡

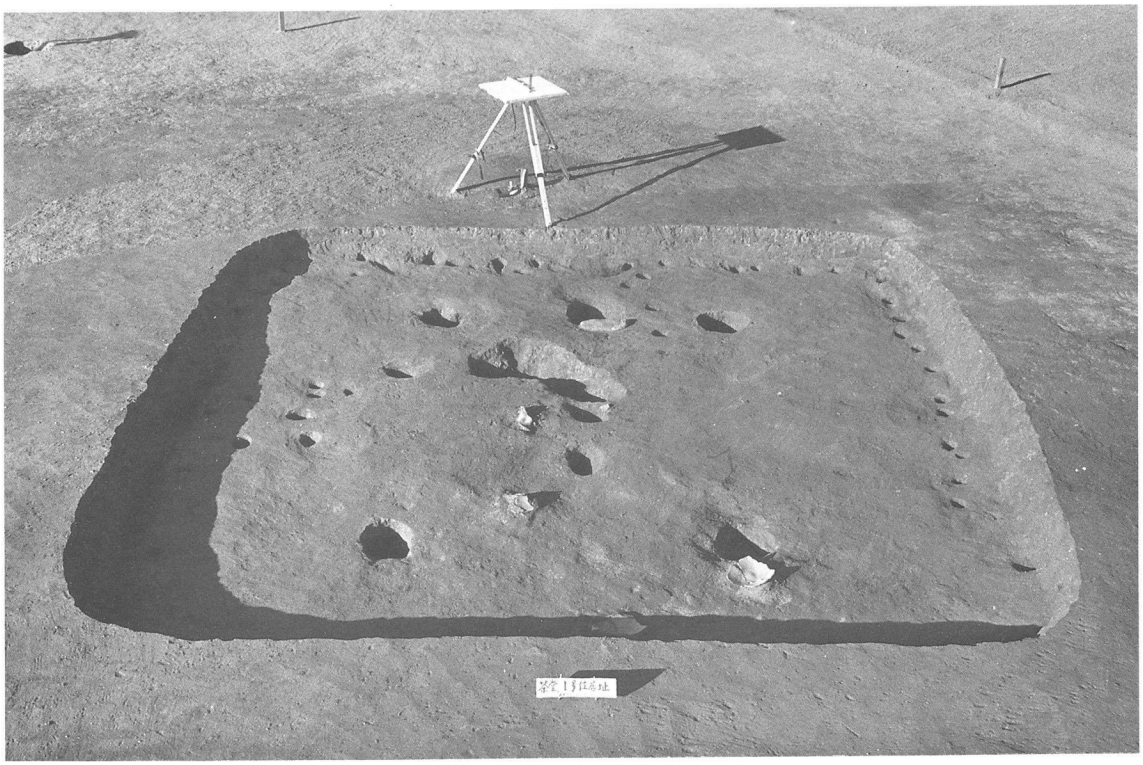


1号住居址とその附近の遺構

図版 5



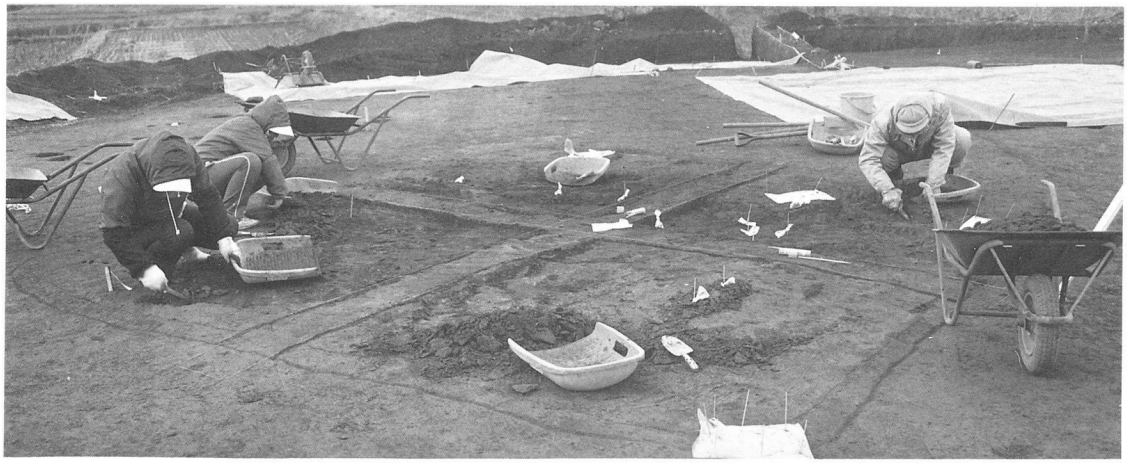
1 号住の遺物出土状況



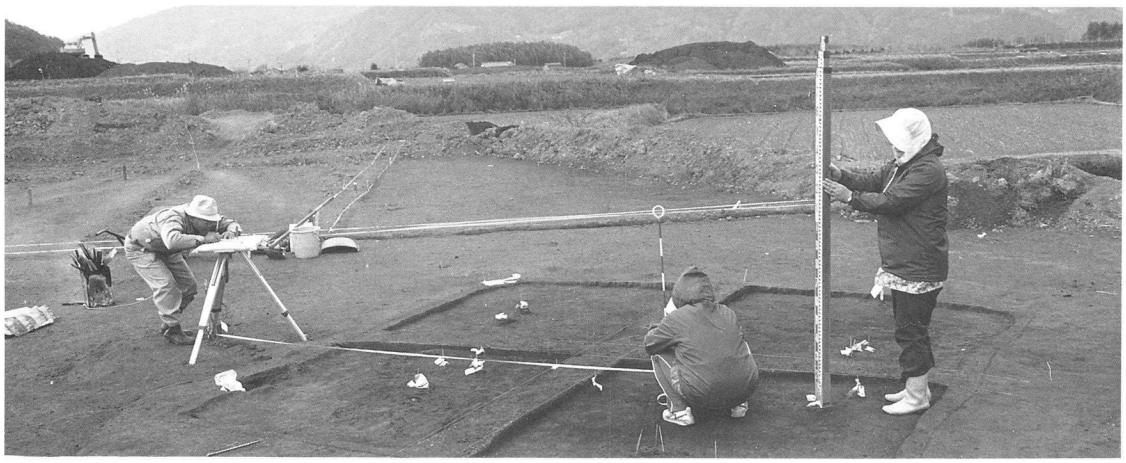
1 号住居址

図版 6

1 号住居址の発掘前



1 号住居址発掘状況



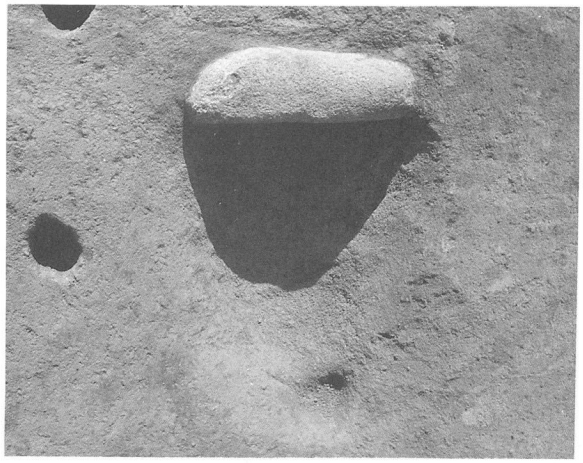
1 号住居址遺物の記録

図版 7

1 号住居址の木炭出土状態

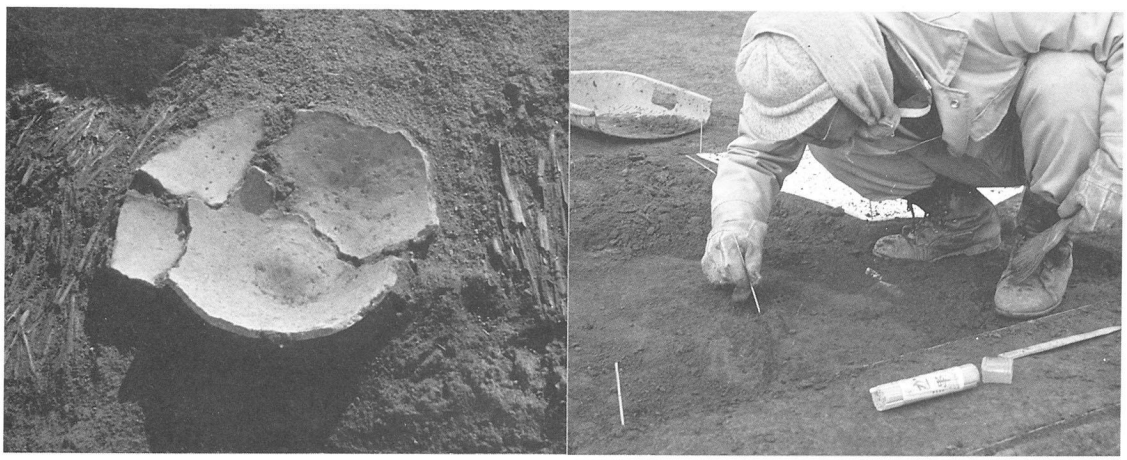
1 号住居址の木炭出土状態

図版 8



1号住居址炉址

木炭出土状態

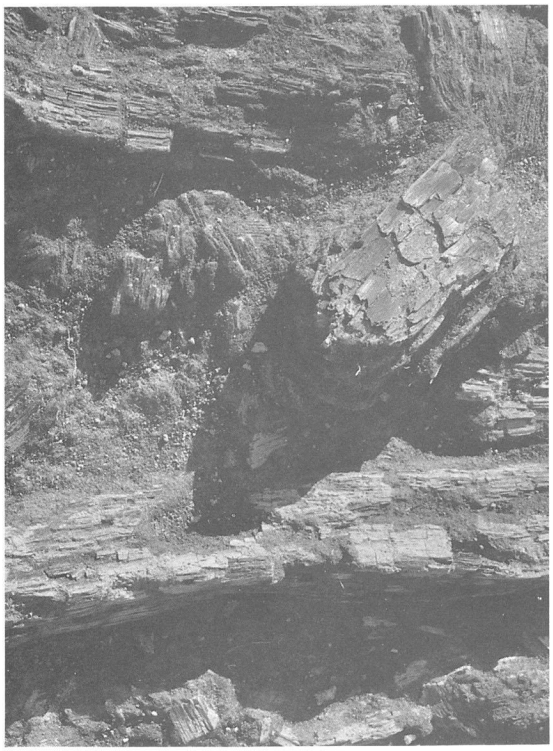


(左)土器と炭化したかや　(右)遺物調査状態

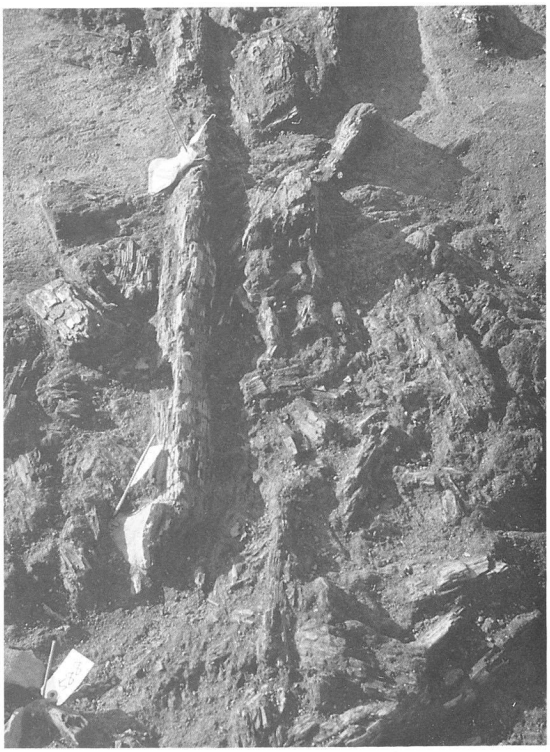
図版 9

板状木炭

炭化したかや

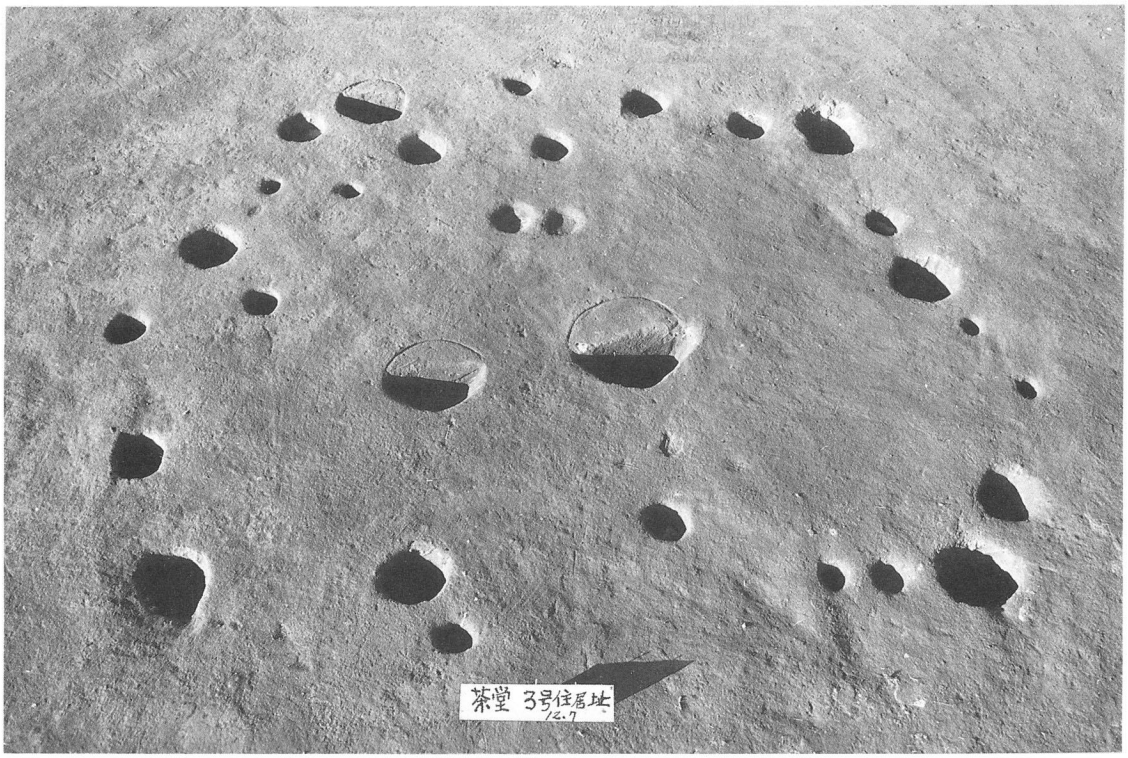


建築材が重なって出土した状況

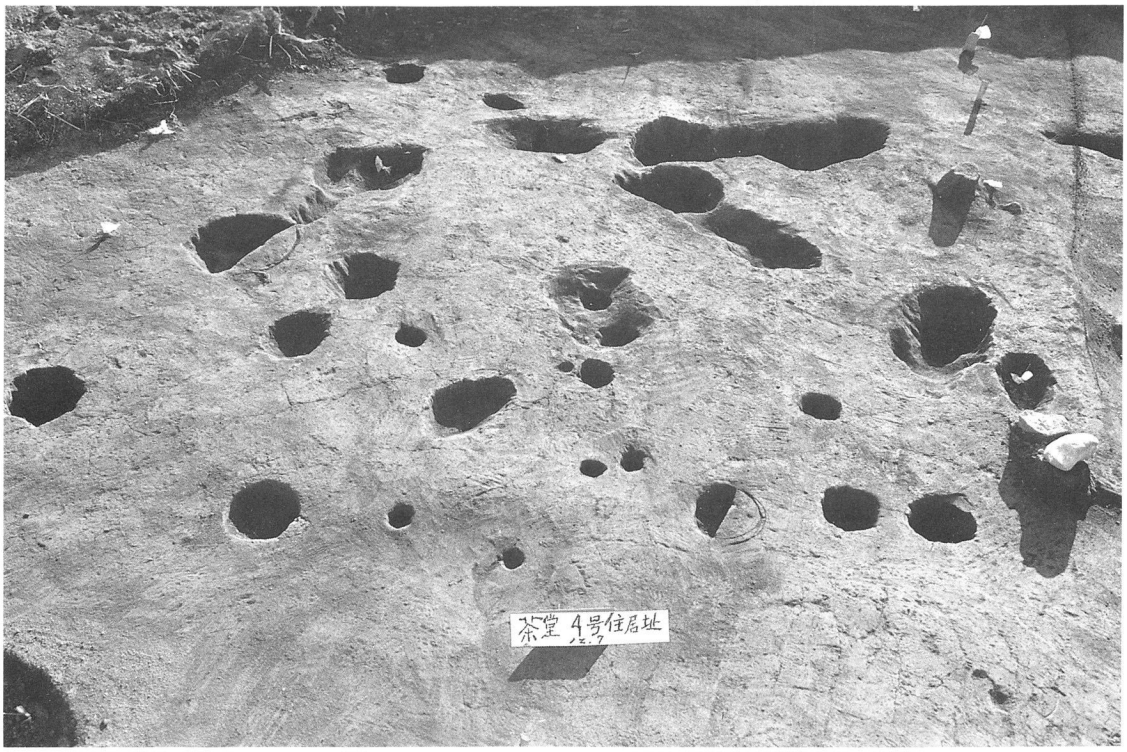


仝上

図版10

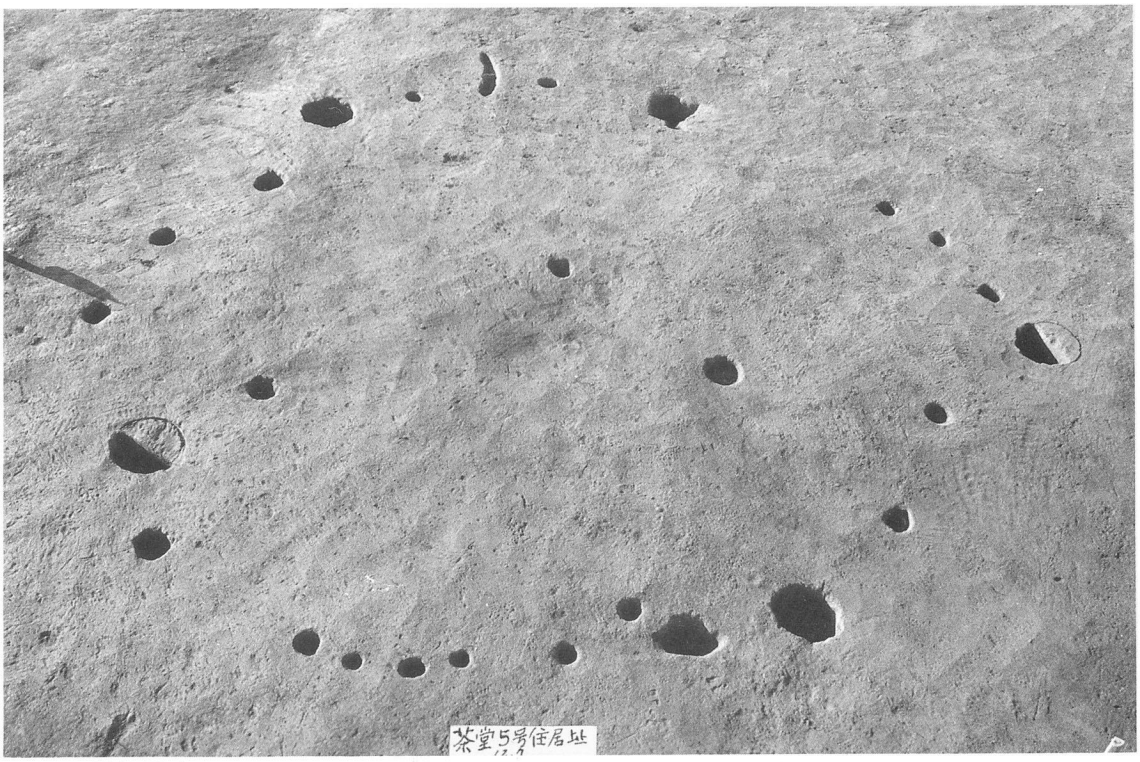


3 号住居址

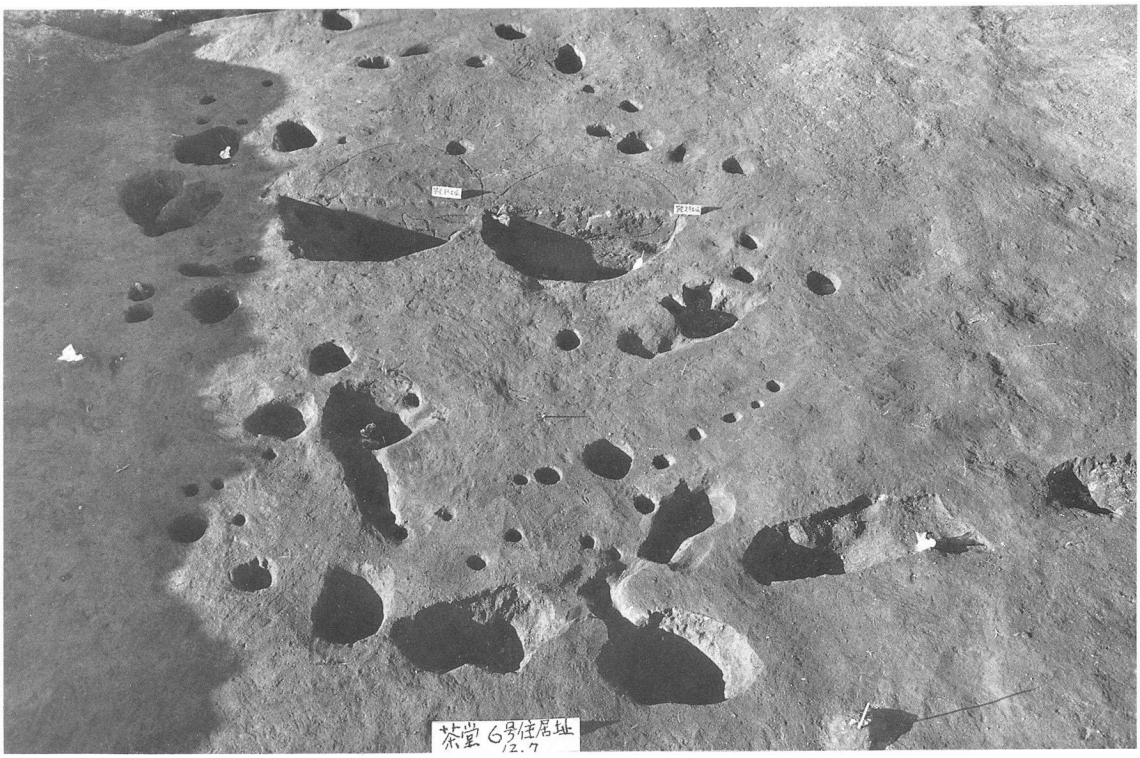


4 号住居址

図版11



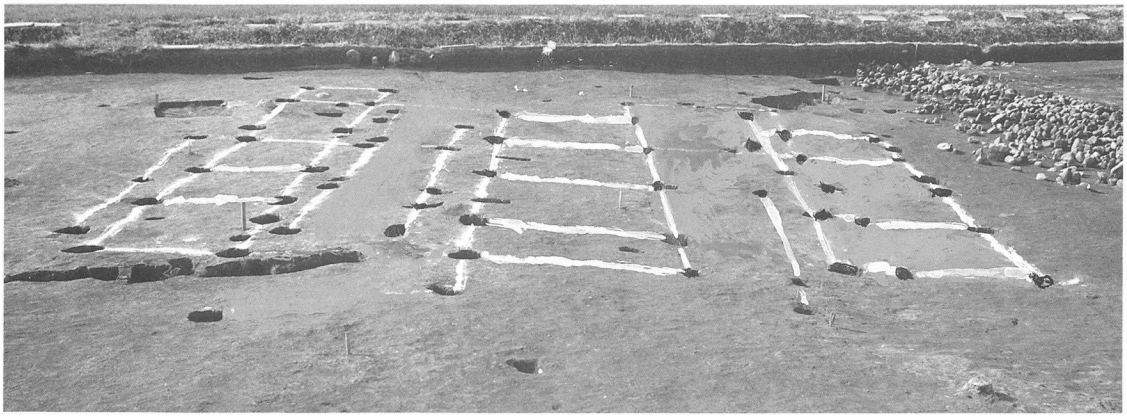
5号住居址



6号住居址

図版12

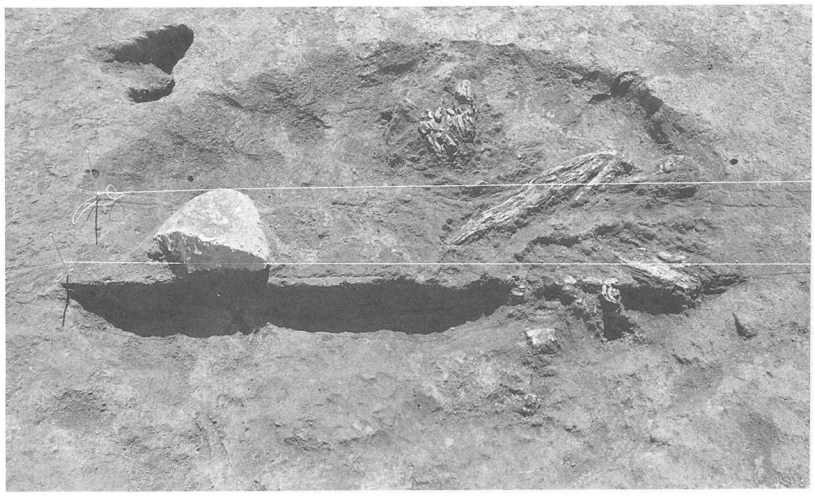
掘立建物址



掘立建物址

掘立建物址

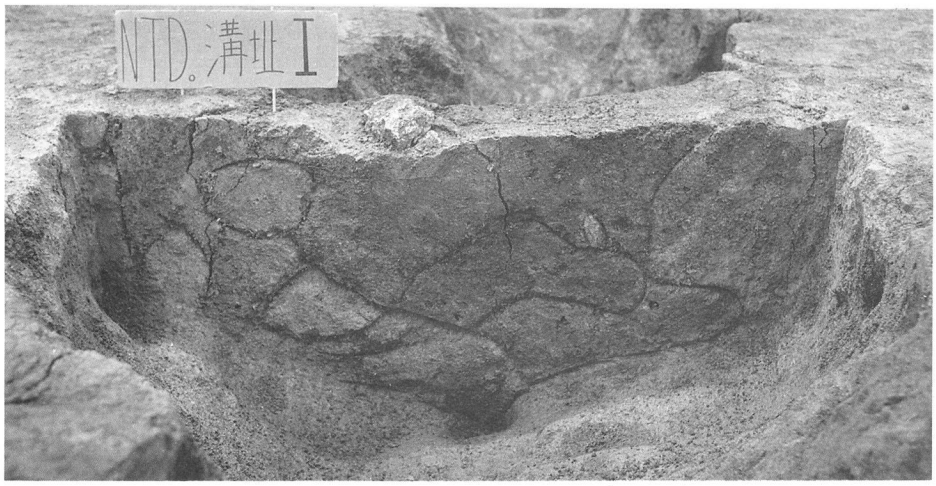
図版13



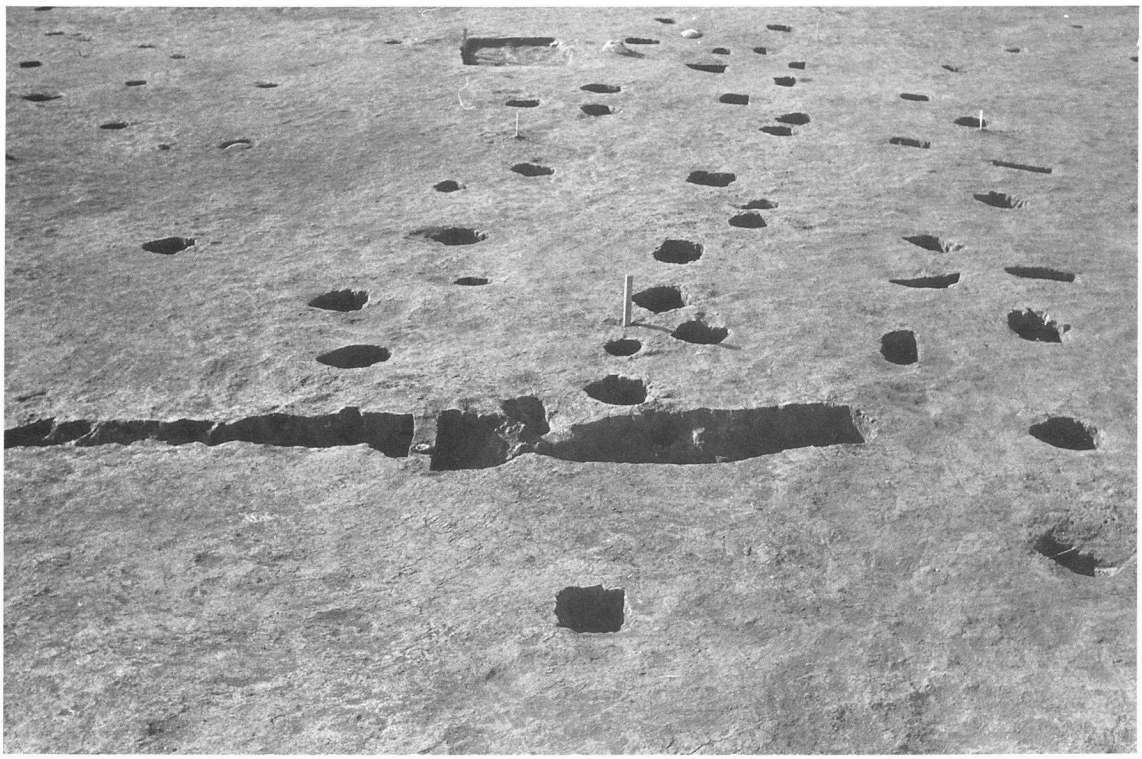
8 号住居址炉址

2 号溝状遺構と 8 号住居址

図版14



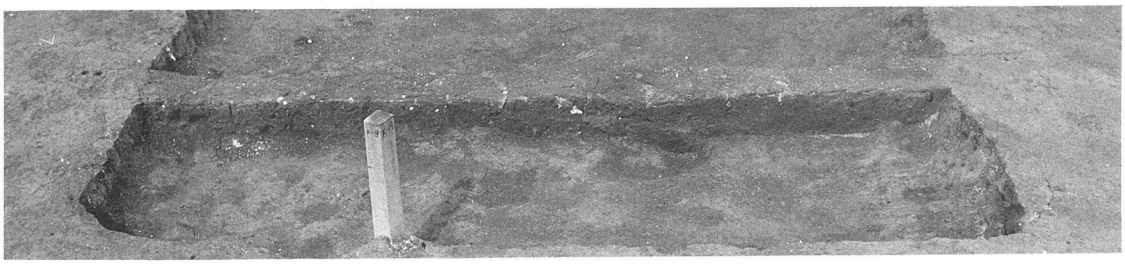
1号溝状遺構の断面



1号溝状遺構

図版15

集石群



地下式貯蔵穴発掘状況

地下式貯蔵穴